

岩手県埋文センター文化財調査報告書第67集

こうづけやま
上野山遺跡発掘調査報告書

国道45号線久慈バイパス関連遺跡発掘調査

序

本県には数多くの埋蔵文化財包蔵地が存在し、昭和57年10月末における遺跡台帳では5924ヶ所が登載されております。

一方、地域開発促進のなかでも道路網の整備は重要施策となっており、これらの開発行為と、貴重な文化財を保護、保存していくこととの均衡を保つことは私達の責務であると考えます。

本報告書は、県北東部にある久慈市を通る国道45号線における交通渋滞緩和を目的として建設される久慈バイパスに関連し、昭和57年度に発掘調査した上野山遺跡の結果についてまとめたものであります。

調査の結果によれば、縄文時代後期前葉と7世紀末から8世紀前半に営まれた竪穴住居跡や遺物も出土しており、特に坯の底部に靱痕のある土師器や、琥珀の加工品が発見されるなど、当時の歴史や文化を考える上で貴重な資料を提示できるものと思われます。

この報告が研究者のみならず、広く一般のかたがたにも活用され埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

これまでの発掘調査から報告書刊行にいたるまでの間、ご援助、ご協力を賜りました建設省東北建設局三陸国道工事事務所、久慈市教育委員会をはじめ関係各位に衷心より感謝するとともに、今後のご指導、ご協力をお願い申し上げます。

昭和58年10月

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター

理事長 金子彰吉

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター組織

役員	理事長	金子彰吉	(県教育長)
	副理事長	柴内眞	(県教育次長)
	常務理事	熊谷正男	(県立埋蔵文化財センター所長)
	理事	吉田良和	(県農政部次長)
	〃	高橋健之	(県林業水産部次長)
	〃	穂積昭慈	(県土木部次長)
	〃	板橋源	(県立博物館長)
	〃	草間俊一	(県立盛岡短期大学長)
	〃	小形信夫	(元常務理事)
	監事	佐藤公志	(県教委総務課長)
〃	小原吉雄	(県教委財務課長)	

職員	所長	熊谷正男		
	副所長	鈴木信吉		
	[総務課]			
	総務課長	菊池勉	専門調査員	柄沢満郎
	庶務係長	阿部詔夫	〃	田村壮一
	主事	佐藤久四郎	〃	岩渕久行
	〃	戸草内幸男	〃	光井文喜
	〃	立花多加志	〃	玉川英喜
	技能員	佐藤春男	〃	石川長喜
	〃		〃	工藤利幸
	〃		〃	中川重紀
	[調査課]			高橋義介
	調査課長	嶋千秋	〃	高橋清文
	主任専門調査員	近藤宗光	〃	佐々木清宗
	〃	国生尚二		酒井隆一
	専門調査員	朝野孝和	[資料課]	
	〃	菊池利恵	資料課長	鈴木信吉
	〃	鈴木恵治	主任専門調査員	鈴木野靖
	〃	渡辺洋一	専門調査員	平井隆英
	〃	大原一夫	〃	鈴木浦謙
〃	田鎖寿夫	〃		
〃	佐々木嘉直			

例 言

1. 本報告書は岩手県久慈市長内町 106 に所在する上野山遺跡^{こうつけやま}の発掘調査の結果を収録したものである。
2. 本遺跡に対する調査は国道45号線久慈バイパス建設に伴う事前緊急発掘調査である。調査は建設省三陸国道工事事務所と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て、財団法人岩手県埋蔵文化財センターが調査を担当した。
3. 現地での発掘調査は昭和57年6月1日から開始され、同年9月4日に終了した。室内整理作業は昭和57年11月1日から昭和58年3月31日まで行われた。
4. 調査面積は1,600㎡で、検出遺構は次のとおりである。
住居址 8棟（内縄文時代4棟、古代4棟）ピット 4基 焼土遺構 4
5. 野外調査及び室内整理作業は当埋蔵文化財センター職員の村上達夫と佐々木清文が担当した。原稿執筆は1と3の(2)、4の(4)は村上達夫が、2と3の(1)、(3)～(5)、4の(1)～(3)・(5)は佐々木清文が行った。
6. 石器の石質鑑定は当埋蔵文化財センター職員 種市進（現在は県立種市高校教諭）が行った。
7. 琥珀の分析は岩手県立博物館赤沼英男氏に依頼した。
8. 靱帯痕については東北農業試験場の奈良正夫氏に鑑定を依頼した。
9. 発掘調査では久慈市教育委員会の協力を賜った。
10. 資料収集に際しては二戸市教育委員会、八戸市教育委員会、種市町教育委員会、久慈市教育委員会、野田村教育委員会、岩手県教育委員会の協力を賜った。
11. 野外調査では作業員として、地元民である下記の方々から協力を得た。
馬場満信 上神田武志 西前 実 中村キヨ 勝田リエ 中村ヤスエ 柏崎ソデ
林下キク 上神田フミエ 四役タエ子 和野ツヤ 村木勝江 中屋敷シギ 久保田サヨ
沢口サカエ 柳久保ヨネ 浜田フミ 神田喜美栄
12. 室内整理作業では下記の方々の協力を得た。
鈴木スズ子 浅沼恵美子 川村洋子

目 次

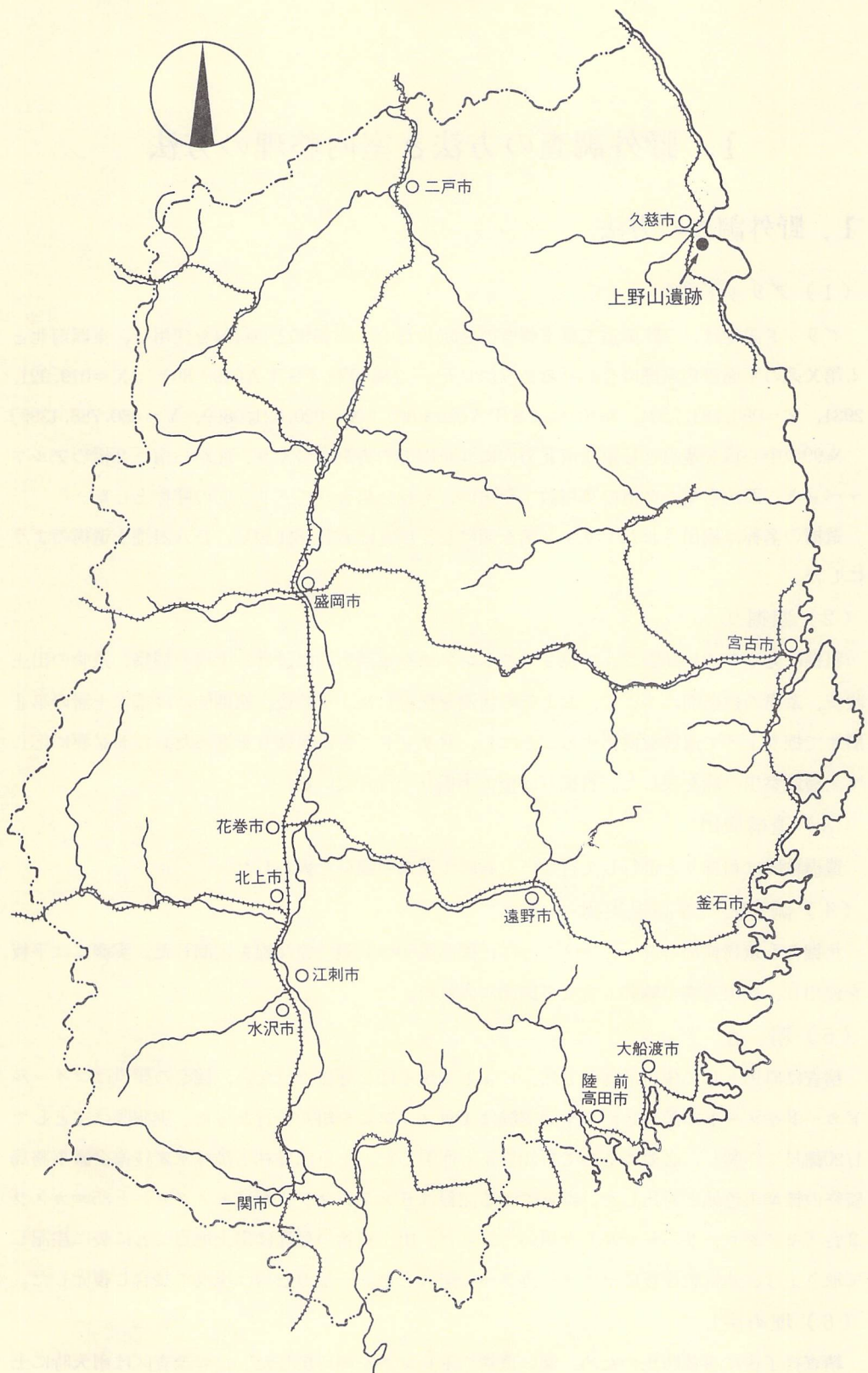
序	CD18ピット	56
埋文センター組織図	(4) 焼土遺構	58
例言	BF19焼土遺構	58
遺跡位置図(岩手県全体図)	BF21焼土遺構	58
1 野外調査の方法と室内整理の方法	CB17焼土遺構	58
周辺の遺跡配置図	DA21焼土遺構	58
周辺の遺跡一覧表	(5) 遺構外の出土遺物	61
2 遺跡の立地と自然環境	縄文土器片	61
(1) 地形概観	石器	61
(2) 上野山遺跡の立地と周辺の遺跡	土師器片	64
(3) 遺跡周辺の自然環境	陶器片	64
(4) 基本土層	古銭	64
3 検出された遺構と遺物	4 考察とまとめ	66
遺構配置図	(1) 出土した土師器の特徴と年代	66
(1) 古代	(2) 坏底部の靱圧痕	69
BH18住居址	(3) 琥珀の産地と流通	70
BJ20住居址	(4) 縄文時代住居址出土の土器	83
BJ21住居址	(5) まとめ	86
CE19住居址	写真図版	87
(2) 縄文時代		
CG20住居址		
CI20住居址		
CJ20住居址		
CJ20-2住居址		
(3) ピット		
BE20ピット		
BF19ピット		
CB19ピット		
CC18ピット		

図 版 目 次

<p>第1図 遺跡位置図（岩手県全体図）……7</p> <p>第2図 周辺の遺跡位置図……10</p> <p>第3図 遺跡周辺の段丘区分図……15</p> <p>第4図 上野山遺跡遺構配置図……20</p> <p>第5図 B H 18住居址（平面・埋土）……23</p> <p>第6図 B H 18住居址（ピット・カ マド）……24</p> <p>第7図 B H 18住居址出土遺物……25</p> <p>第8図 B J 20住居址（平面・埋土）……27</p> <p>第9図 B J 20住居址（カマド）……28</p> <p>第10図 B J 20住居址出土遺物……30</p> <p>第11図 B J 20住居址出土遺物……31</p> <p>第12図 B J 21住居址（平面・カマド）……33</p> <p>第13図 B J 21住居址出土遺物……34</p> <p>第14図 C E 19住居址（平面・埋土・ 埋甕断面）……36</p> <p>第15図 C E 19住居址出土遺物……37</p> <p>第16図 C G 20住居址（平面・埋土）……39</p> <p>第17図 C G 20住居址出土遺物……40</p> <p>第18図 C I 20住居址（平面・埋土・ ピット埋土・炉断面）……42</p> <p>第19図 C I 20住居址出土遺物……43</p> <p>第20図 C J 20住居址（平面・埋土・ 炉断面）……45</p> <p>第21図 C J 20住居址出土遺物……46</p> <p>第22図 C J 20住居址出土遺物……47</p> <p>第23図 C J 20住居址出土遺物……48</p> <p>第24図 C J 20住居址出土遺物……49</p> <p>第25図 C J 20住居址出土遺物……50</p>	<p>第26図 C J 20住居址出土遺物……51</p> <p>第27図 C J 20—2住居址（平面・ 埋土・炉断面）……53</p> <p>第28図 B E 20ピット、B F 19ピット （平面・埋土断面）……55</p> <p>第29図 C B 19ピット、C C 18ピット、 C D 18ピット（平面・埋土）……57</p> <p>第30図 B F 19焼土遺構（平面・断面 ・埋土断面）……59</p> <p>第31図 B F 21焼土遺構、C B 17焼土 遺構、D A 21焼土遺構 （平面・断面）……60</p> <p>第32図 遺構外出土遺物（縄文土器）……62</p> <p>第33図 C J 20—2住居址、遺構外 出土遺物……63</p> <p>第34図 遺構外出土遺物（古銭）……65</p> <p>第35図 琥珀包含層と産出地……71</p> <p>第36図 琥珀製遺物出土遺跡および主 な琥珀産出地……74</p> <p>第37図 久慈産琥珀の赤外線吸収スペ クトル分析結果……81</p> <p>第38図 久慈産琥珀の赤外線吸収スペ クトル分析結果……82</p>
---	---

写真図版目次

<p>第39図 遺構写真（BH18住居址）……………89</p> <p>第40図 // （BJ20住居址）……………90</p> <p>第41図 // （BJ21住居址）……………91</p> <p>第42図 // （CE19住居址）……………92</p> <p>第43図 // （CG20住居址）……………93</p> <p>第44図 // （CI20住居址）……………94</p> <p>第45図 // （CJ20住居址）……………95</p> <p>第46図 // （CJ20—2住居址）…96</p> <p>第47図 // （BE20ピット・ BF19ピット）……………97</p> <p>第48図 // （CB19ピット・CC 18ピット・CD18ピット）……………98</p> <p>第49図 // （BF19焼土遺構・ BF21焼土遺構）……………99</p> <p>第50図 // （CB17焼土遺構・ DA21焼土遺構）……………100</p>	<p>第51図 遺物写真（BH18住居址）………101</p> <p>第52図 // （BJ20住居址）………102</p> <p>第53図 // （BJ20住居址）………103</p> <p>第54図 // （BJ21住居址）………104</p> <p>第55図 // （CE19住居址）………105</p> <p>第56図 // （CG20住居址）………106</p> <p>第57図 // （CI20住居址・ CJ20住居址・CJ20—2 住居址）……………107</p> <p>第58図 // （CJ20住居址・ CI20住居址・遺構外）……………108</p> <p>第59図 // （遺構外）……………109</p> <p>第60図 // （遺構外）……………110</p> <p>第61図 琥珀産出地……………111</p> <p>第62図 琥珀坑道跡……………112</p> <p>第63図 琥珀産出状況……………113</p>
---	--



第1図 遺跡位置図 (岩手県全図)

1. 野外調査の方法と室内整理の方法

1. 野外調査の方法

(1) グリッド設定

グリッド設定は、三陸国道工事事務所の設定した中心杭 No.99 と No.104 を使用し、東西南北とも第 X 系の平面直角座標に合わせるようにした。〔No.99 杭 (S T A 019+80) : X = 019, 921, 2931、Y = 080, 781, 7204、No.104 杭 (S T A 020+80) : X = 020, 021, 0869、Y = 080, 788, 1399〕

No.99 の中心杭を基点とし東西南北方向に 5 m 四方の方眼をつくり、北から南へ 2 桁のアルファベット、西から東へ 2 桁の算用数字を用い、それを組合せてグリッドの呼称とした。

遺構の名称は検出されたグリッド名を頭にし、例えば BH 18 住居址、D A 21 焼土遺構のようにした。

(2) 粗掘り

粗掘りに先立ち 20 m 間隔ごとに幅 2 m のトレンチを東西方向に設け、土層の観察、遺物の出土状況、遺構の検出面について、およその状況を把握した。その後、原則的には基本土層の第 II 層まで掘り下げて遺構を検出することにし、グリッドごとに粗掘りを進めた。なお必要に応じて土層観察用の畦を残した。粗掘りは全て手掘りでやっている。

(3) 遺構検出

遺構検出は粗掘りと併行して行ない、石灰で遺構の輪郭を表わした。

(4) 調査区の等高線実測

粗掘りと遺構検出の終わった地区ごとに、標高差 50 cm 間隔で等高線を実測した。実測には平板を使用し、検出遺構の輪郭も合せて図面に入れた。

(5) 精査

精査は原則として住居址は四分法、ピットや焼土は二分法で行ない、観察の要点はフィールドカードやノートに記録した。平面実測は 1 m メッシュを組んで行なった。実測図は主として 1/20 縮尺で作製し、必要に応じて 1/10 縮尺も作製した。土色は農林省農林水産技術会議事務局監修の標準土色帖と対比した。写真による記録は 6 × 7 カメラ 1 台 (モノクロ) と 35 mm カメラ 2 台 (モノクロ、リバーサル) を用いて行った。出土遺物の処理は出土地点ごとに袋に注記して取り上げ、水洗乾燥後にポスターカラーで記入した。一部の土器は現場で接合し復元した。

(6) 埋め戻し

精査終了後に事故防止のため、深い遺構やトレンチを埋め戻した。なお調査区は雨天時に土砂の流出が懸念されたので、廃土場所に土留めを施した。

2. 室内整理の方法

(1) 遺構配置図

遺構配置図は等高線実測図と遺構実測図を合成して作成した。報告書での縮尺は1/300である。

(2) 遺物の実測と写真撮影

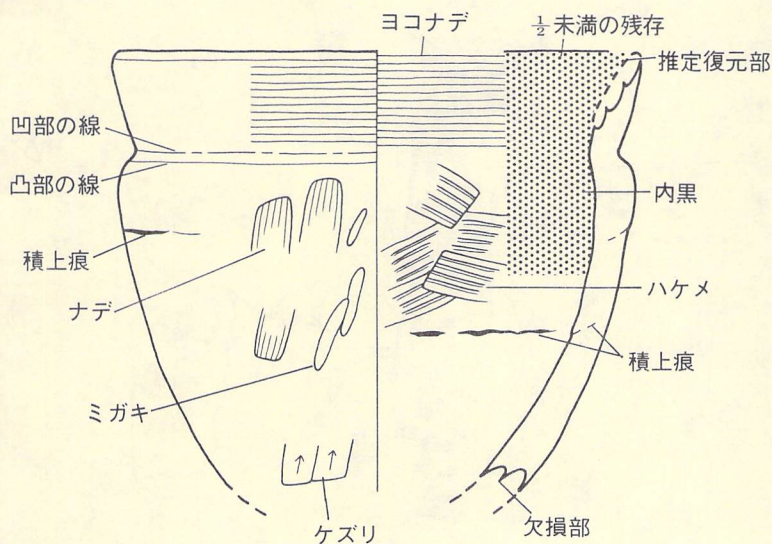
遺物の実測は調査員の指示で主に室内作業員が行なった。実測図は土器と石器が原寸実測で、琥珀製品が2倍実測である。遺物の写真は、当センターの写真室で35mmカメラを用いて撮影した。フィルムはモノクロである。

(拓影)

古銭と若干の土器片を拓影にした。

(図版)

遺構と遺物の実測図は、点検後にトレースして図版を作成した。報告書での縮尺は図面にスケールを附けたが、遺構は1/40又1/20縮尺、遺物の大部分は1/2縮尺である。土師器の表現方法は下図の例による。写真図版は遺構ごとに全景、断面などをまとめた。遺物写真の報告書での縮尺は、琥珀製品が2倍と古銭がほぼ原寸大で、他の遺物は1/3~1/4である。



挿図土師器実測図表現例



第2図 周辺の遺跡位置図



周 辺 の 遺 跡 一 覧 表

No.	遺 跡 名	内 容、時 期	No.	遺 跡 名	内 容、時 期
1	蝦夷塚	縄文?	51	高山館	館跡
2	藤好沢	縄文(晩)	52	上野山	縄文(後・晩)、土師
3	桑畑Ⅰ	縄文(早)、土師	53	小屋畑	縄文(後)、土師
4	桑畑Ⅱ	縄文(前・中)	54	諏訪下	縄文
5	外屋敷西	縄文(前・後)、土師	55	平沢Ⅰ	縄文(前・中・後)、土師
6	七七小出Ⅰ	縄文(中・晩)	56	平沢Ⅱ	縄文(早・前・中・後)
7	七七小出Ⅱ	縄文(晩)、土師	57	平沢Ⅲ	縄文?
8	七七小出Ⅲ	縄文(晩)、弥生	58	二子貝塚	縄文(前・晩)
9	外本屋敷東	縄文(後)	59	二子	縄文(晩)
10	木戸場	縄文?	60	大尻	縄文(後・晩)
11	木戸場	縄文(晩)、土師	61	長根	縄文(後・晩)
12	向町農協倉庫北	縄文(中)	62	金ヶ沢	縄文(前)
13	向町Ⅰ	土師	63	高森Ⅰ	縄文
14	向町Ⅱ	縄文(中～後)、土師	64	高森Ⅱ	縄文
15	向町Ⅲ	縄文(後初)、土師	65	高森Ⅲ	縄文
16	向町Ⅳ	縄文(後)	66	大渡Ⅰ	縄文
17	北野Ⅰ	縄文(後)	67	大渡Ⅱ	縄文
18	北野Ⅱ	縄文(後)	68	大渡Ⅲ	縄文
19	北野Ⅲ	縄文?	69	大渡Ⅳ	縄文
20	保土沢北	縄文?	70	大渡Ⅴ	縄文
21	保土沢南	縄文(晩)	71	下水沢Ⅰ	縄文
22	西久保	縄文	72	下水沢Ⅱ	縄文
23	本波Ⅰ	縄文	73	上水沢Ⅰ	縄文
24	本波Ⅱ	縄文(中)	74	上水沢Ⅱ	縄文
25	麦生Ⅰ	縄文(前)	75	上水沢Ⅲ	縄文
26	麦生Ⅱ	縄文、土師	76	上水沢Ⅳ	縄文
27	麦生Ⅲ	土師	77	上水沢Ⅴ	館跡(蝦夷館)
28	半崎Ⅰ	縄文	78	上水沢Ⅵ	縄文
29	半崎Ⅱ	縄文(中末～後初)、続縄文	79	上水沢Ⅶ	縄文(後)
30	半崎南Ⅰ	縄文、土師	80	生平Ⅰ	縄文
31	半崎南Ⅱ	製塩土器	81	生平Ⅱ	縄文
32	半崎南Ⅲ	縄文(前)	82	青菜畑	縄文
33	半崎南Ⅳ	縄文	83	金間部	製鉄
34	閉伊ノ口	館跡	84	金間部	縄文、土師、古銭
35	鼻	館跡、窯跡	85	堤内	縄文
36	大久保	館跡	86	日当Ⅰ	土師
37	夏井城	館跡	87	日当Ⅱ	縄文
38	夏井平	館跡	88	阿子木	縄文
39	新明城	館跡	89	下帯島Ⅰ	縄文
40	神明	土師	90	下帯島Ⅱ	縄文
41	金比	縄文	91	下帯島Ⅲ	縄文
42	下原	弥生、土師	92	下帯島Ⅳ	縄文
43	原道	土師	93	二ツ屋	縄文
44	昼場沢		94	二ツ屋向	縄文
45	旭町Ⅰ	縄文	95	上帯島Ⅰ	縄文
46	旭町Ⅱ	縄文	96	上帯島Ⅱ	縄文
47	左畔	館跡	97	上帯島Ⅲ	縄文
48	天神堂	縄文	98	上帯島Ⅳ	縄文
49	寺里Ⅰ	縄文(前・後)、土師	99	蝦夷館	縄文
50	寺里Ⅱ	弥生、土師	100	関	縄文

No.	遺跡名	内容、時期	No.	遺跡名	内容、時期
101	帯島開拓 I	縄文	154	平清水 II	縄文(前・後)
102	帯島開拓 II	縄文	155	野田 豎穴	土師(中平遺跡)
103	帯島開拓 III	縄文	156	古館山	縄文(前)、土師、館跡
104	弥栄 I	縄文	157	沢山 I	縄文
105	弥栄 II	縄文	158	沢山 II	弥生
106	弥栄 III	縄文	159	沢山 III	縄文
107	弥栄 IV	縄文	160	和野平 I	縄文
108	弥栄 V	縄文	161	和野平 II	縄文(後・晩)
109	弥栄 VI	縄文	162	和野平 III	縄文(後)
110	弥栄 VII	縄文	163	和野平 IV	縄文(後)
111	弥栄 VIII	縄文	164	和野平 V	縄文
112	弥栄 IX	縄文	165	和野平 VI	縄文
113	弥栄 X	縄文	166	和野平 VII	縄文
114	弥栄 XI	縄文	167	和野平 VIII	縄文
115	弥栄 XII	縄文	168	玉川館	縄文、館跡
116	長塚森 I	縄文	169	浜山開墾 I	縄文
117	長塚森 II	縄文	170	浜山開墾 II	縄文
118	長塚森 III	縄文	171	浜山開墾 III	縄文
119	長塚森 IV	縄文	172	根井 I	縄文
120	大芦	縄文(中・後・晩)	173	根井 II	縄文
121	国坂	縄文	174	根井 III	縄文(後?)
122	広野	縄文(後)、弥生	175	根井 IV	縄文
123	長久保	縄文(中・後)	176	根井 V	縄文(後)
124	沢畑里	縄文(後)、弥生、土師	177	根井 VI	縄文
125	久慈田	縄文?	178	根井 VII	縄文
126	久慈里	館跡 久慈信実	179	根井 VIII	縄文(後)
127	外山上	縄文(前・中・晩)	180	根井 IX	縄文
128	外山上 I	縄文、土師	181	根井 X	縄文
129	外山上 II	縄文、土師	182	根井貝塚	縄文
130	荒津前平 I	縄文?	183	根井貝塚東	縄文(晩)土師
131	荒津前平 II	縄文?	184	机場野	縄文(前・中・後)
132	荒津前平 III	縄文?	185	馬場野	縄文?
133	三日前館	館跡	186	館	縄文?
134	大沢田	縄文(中)、土師	187	堀内	縄文(前・中・後)
135	上日陰	館跡	188	力持	縄文(前・後)
136	兼田農	縄文	189	鵜鳥神社	神社跡(大同元(806)年)
137	上長内	縄文(後)、土師	190	不行道	縄文(中)
138	館石 I	縄文	191	下日当館	縄文、土師、館跡 (小久慈館) 日戸氏
139	館石 II	縄文	192	岸里	縄文
140	小小袖	縄文(中)	193	川里代	縄文(前・中)
141	小小袖	縄文	194	山根館	館跡
142	三崎	縄文(中)	195	細野館	館跡
143	三崎山	縄文(中・後)	196	野頭	縄文(後)
144	三崎 I	縄文(前・中)	197	端神	縄文(中)
145	三崎 II	縄文(前・晩)	198	下の岩	土師
146	広内	縄文(前・中)	199	内間木洞	縄文
147	十字塚	館跡 野田義親	200	夏井小学	縄文?
148	山屋敷	縄文、弥生、土師	201	和野平	縄文(中)
149	山屋敷	土師			
150	上新山	縄文、土師			
151	中野田	館跡 野田氏			
152	野田	館跡			
153	平清水	縄文(前)			

2. 遺跡の立地と自然環境

(1) 地形概観

本地区は北上山地の北東部に位置し、東側は太平洋となっている。そのため三陸海岸に沿って帯状に伸びる海岸段丘が河川により開析された状況を呈している。

海岸段丘は照井(1982)により、水無段丘(220~280m)、九戸段丘(三崎段丘)(150~220m)、蒼前平段丘(侍浜段丘)(130~150m)、麦生段丘(90~110m)、有家段丘(60~90m)、種市段丘(二子段丘)(15~40m)、平内段丘(10m)、宿戸段丘(3m)に区分されている。第3図にこの地区の海岸段丘の分布を表わした。この図幅には水無段丘を除く各段丘と谷底平野が認められる。

九戸段丘(三崎段丘)は侍浜から北に向かって広がる。また久慈湾と野田湾の間の三崎を中心にした地域にも形成されており、ここは三崎段丘とも呼ばれている。鳥谷川と長内川に狭まれた3つの丘陵も古い海岸段丘が夏井川・久慈川・長内川で開析されたもので、平坦面はほとんど残っていない。極めてわずかであるが古い段丘面が尾根状に残っている所もある。

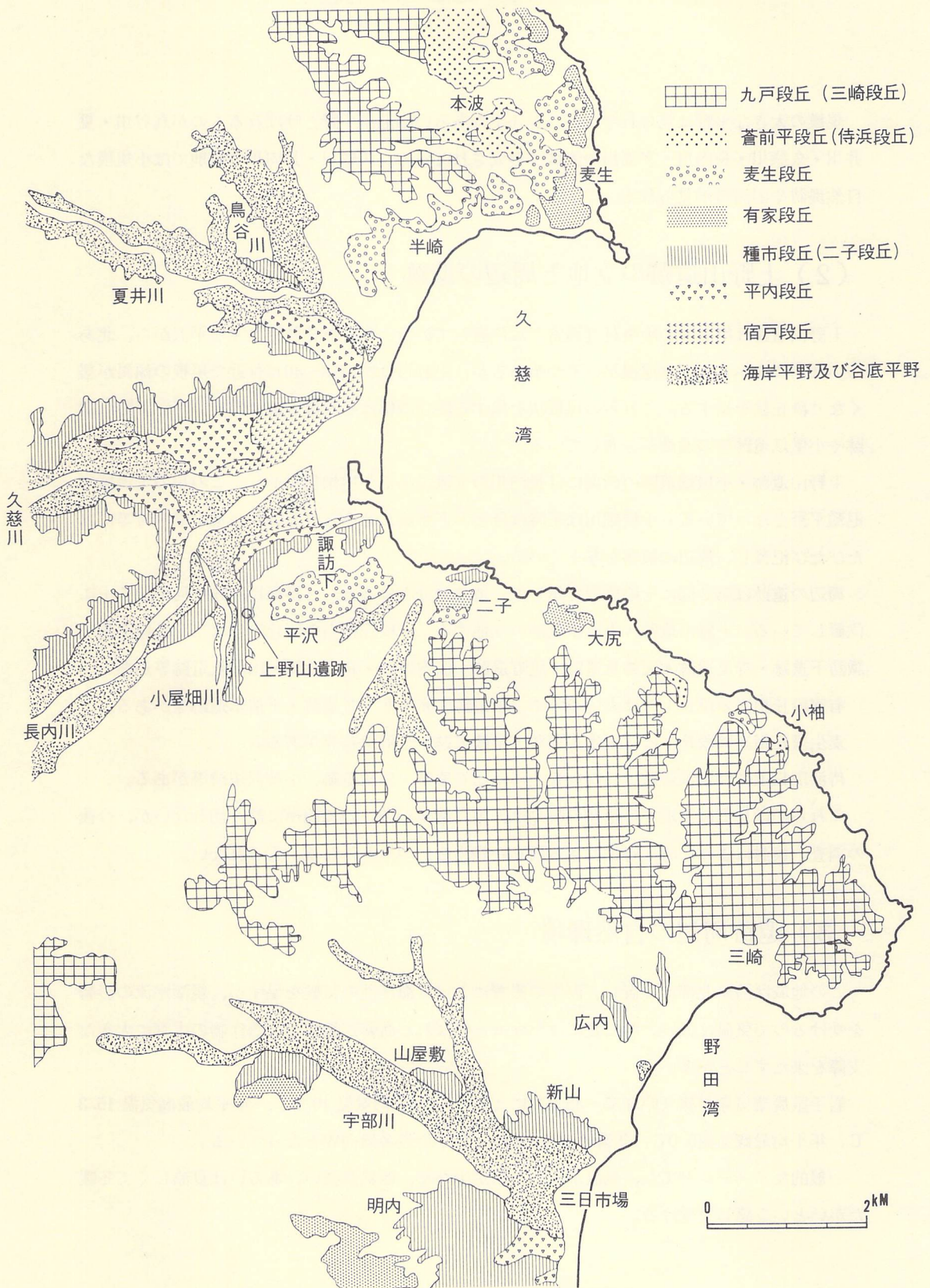
蒼前平段丘(侍浜段丘)は九戸段丘の下位に連続して広がる段丘で侍浜の本波地区から北に向かって伸びている。三崎段丘の下位には蒼前平段丘はほとんど形成されていないが、小袖地区に規模の小さな段丘面がわずかに認められる。

麦生段丘は侍浜の麦生を中心にして、半崎付近から九戸段丘にはほぼ平行して帯状に北に伸びる。長内町の平沢や二子・小袖にも麦生段丘が形成されている。平沢は比較的規模が大きいが二子・小袖は小規模である。

有家段丘は麦生段丘の下位に連続して広がる段丘で、麦生付近から北に向かって帯状に伸びる。久慈湾南岸では二子や大尻・小袖付近に小規模ながらも認められる。

種市段丘(二子段丘)は二子と諏訪下・野田村の山屋敷・新山・明内・広内等に認められる。特に二子付近は段丘面が明瞭で、二子段丘と呼ばれる。鳥谷川・夏井川・久慈川・長内川の下流域にもほぼ同レベルの段丘が形成されているが、これらは河成段丘の可能性がある。

平内段丘・宿戸段丘に相当すると思われる段丘は夏井川・久慈川・長内川の下流域と野田村の三日市場付近に広がっている。夏井川、久慈川・長内川の下流域に広がっている種市段丘・平内段丘・宿戸段丘に相当すると思われる段丘は、これらの河川が比較的流量が多く、また側方の丘陵地からの土砂流出によって形成された小規模な扇状地も多く見られるので、河成段丘と思われる。海成段丘も河成段丘も海水準の変動により形成されるので、ここではとりあえず同一のレベルの段丘として扱う。



第3図 遺跡周辺の段丘区分図

規模の大きな平野は見られないが、谷底平野あるいは氾濫平野と呼ばれるものが鳥谷川・夏井川・久慈川・長内川・宇部川の流域に形成されている。久慈川・長内川の低地では小規模な自然堤防や旧河道が見られる。

(2) 上野山遺跡の立地と周辺の遺跡

上野山遺跡は第3図の中央付近西寄りに位置している。麦生段丘に相当する平沢から、北あるいは西に向かって下る尾根がいくつかあるが、それらは標高15~40m付近で尾根の傾斜が緩くなり段丘状を呈する。これらの尾根状を呈する段丘の幅はそれほど広くはないが、上野山遺跡や小屋畑遺跡等の遺跡が分布している。

上野山遺跡・小屋畑遺跡の西側には長内川の支流である小屋畑川があり、この川の下流域は氾濫平野となっている。小屋畑川は平時はほとんど水流が認められないが、集中豪雨時等にはたびたび氾濫し、周辺に被害を与えている。

周辺の遺跡は第2図にその位置を示した。遺跡の分布はほとんどが海岸段丘や河岸段丘上に位置している。上野山遺跡・小屋畑遺跡の立地する二子段丘相当の段丘上には二子貝塚遺跡・諏訪下遺跡・寺里遺跡・天神堂遺跡・旭町遺跡・広内遺跡・新山遺跡・山屋敷遺跡等がある。

有家段丘相当の段丘上には大尻遺跡や二子遺跡・麦生Ⅱ・Ⅲ遺跡・平清水遺跡等がある。

麦生段丘相当の段丘上には麦生Ⅰ遺跡・半崎遺跡・平沢遺跡等がある。

侍浜段丘上には本波遺跡・三崎段丘上には館石遺跡・三崎遺跡、小袖沢遺跡等がある。

これらの段丘上に立地する遺跡の時期は、複合遺跡が多いので簡単に割り切れないが、今後の調査、検討により、時代時期による段丘の利用法が明らかになるかもしれない。

(3) 遺跡周辺の自然環境

この地域は沿岸北部に位置し、海洋の影響によって海洋性の気候を呈すが、親潮寒流の影響を受けるので気温は低い。特に夏にはヤマセと呼ばれる海霧が発生し、農作物の生育に大きな支障を来たすことが多い。

岩手県農業気象月報(昭和35~45年)によると、年平均気温10.1℃、年平均最高気温15.3℃、年平均最低気温5.0℃、年降水量1,125mm、年平均最多風向Wとなっている。

一般的なイメージとして、気温が低く、雨が少なく、西風が強い、あるいは夏涼しくて冬暖かいという感じを受ける。

(4) 基本土層

調査地は段丘上の畑地を中心に南北に細長く続く範囲内にあるため、段丘上と北側の斜面、南側の沢沿では土層の堆積状況はだいぶ異なっている。そこで、ここでは調査地区内の任意の五箇所土層柱状図をもとにして調査地内に共通する土層を以下のように命名した。

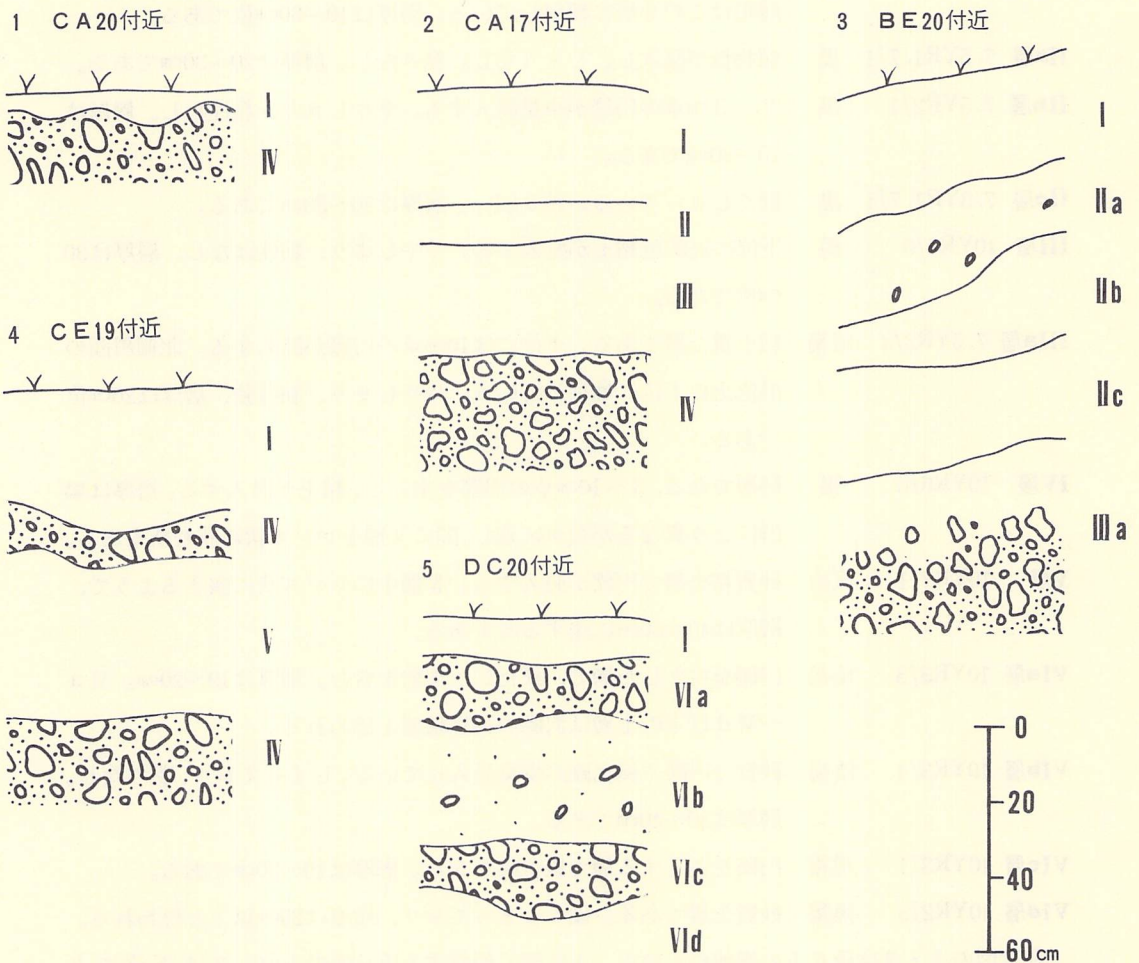
- I層** 10YR3/1 黒褐 耕作土または表土層である。植物根や円礫が混入する。表土層では特に植物根が多い。粘り・しまりなし。層厚は10~30cmである。
- II層** 10YR3/3 暗褐 褐色土の混入する部分もあるが、全体として暗褐色から黒色を呈している。この土層は主に段丘上に分布し、緩い段丘面の下位ほど厚く堆積している。次のII a~II c層は北側の斜面に堆積しているが層相はこのII層に類似している。層厚は10~30cm位である。
- IIa層** 7.5YR1.7/1 黒 植物根が混入し、しまりなし。粘りなし。層厚は20~30cmである。
- IIb層** 7.5YR2/1 黒 2~3cmφの円礫が少量混入する。ややしまり、粘性なし。層厚は10~30cmである。
- IIc層** 7.5YR1.7/1 黒 硬くしまっている。粘り弱い。層厚は20~30cmである。
- III層** 10YR6/6 褐 下位に灰黄色粘土が混入する。ややしまり、粘性はなし。層厚は30cm位である。
- IIIa層** 7.5YR3/4 暗褐 粘土質土層である。下位には10cmφの円礫が混入する。北側斜面の黒色土の下位に堆積している。ややしまり、粘性強、層厚は20cm位である。
- IV層** 10YR6/6 褐 礫層である。3~10cmφの円礫を主とし、粘土が混入する。層厚は場所により異なるが数mに達し、間にV層をレンズ状に狭む所もある。
- V層** 10YR7/1 灰白 砂質粘土層で円礫が混入する。IV層中にレンズ状に狭まるようで、層厚は40~50cmに達する所もある。
- VIa層** 10YR3/3 暗褐 円礫を主とした層で、風化した泥岩を含む。層厚は19~20cm。VI a~VI d以下の土層は沢際の再堆積層と思われる。
- VIb層** 10YR3/4 暗褐 砂質で円礫や風化礫が少量混入している。しまっており、粘りなし。層厚は30~40cmである。
- VIc層** 10YR3/1 黒褐 円礫を主とする層で風化礫を含む。層厚は10~20cmである。
- VI d層** 10YR2/3 黒褐 砂質土層である。硬くしまっており、層厚は20cm以上と思われる。

柱状図の1・2は段丘上の畑地のもので、1は緩く傾斜する段丘面の上位、2は下位である。耕作土は斜面上位ほど薄く、1ではII層・III層が欠如しており、耕作土の直下が礫層となっている。

柱状図 3 は北側の斜面の土層断面の一部である。この北側斜面の現在の農道付近は涸沢になっており、黒色土が厚く堆積している。

柱状図 4 は段丘の南側の農道傍の土層断面の一部である。ここではⅡ層・Ⅲ層が欠如しており、表土直下が礫層となっている。礫層の間には灰白色の砂質粘土層がレンズ状に入る。この灰白色の砂質粘土層は遺跡周辺の礫層中でも観察され、やはりレンズ状に堆積している。

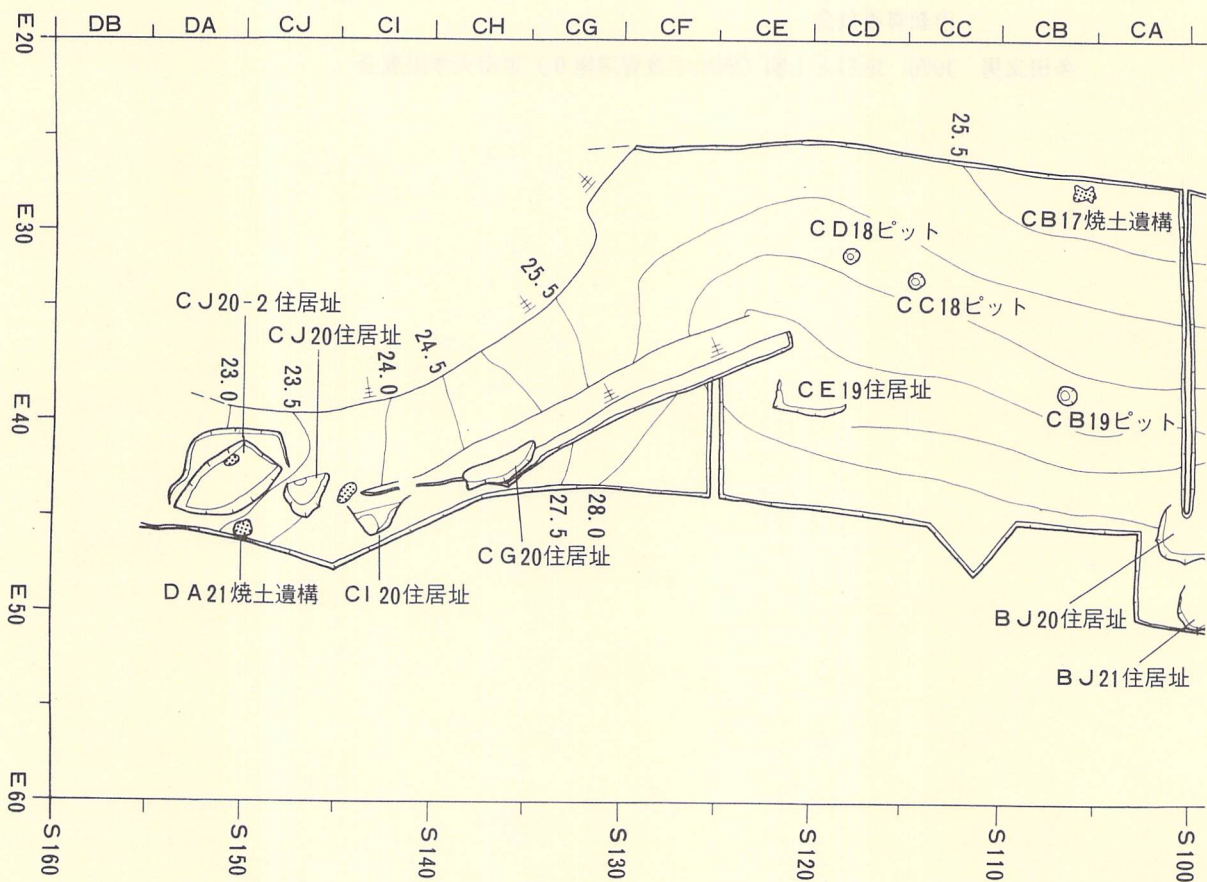
柱状図 5 は遺跡南端の沢沿の部分の土層断面の一部である。沢は現在幅 1 m 位であるが洪水時には涸れ、集中豪雨時には鉄砲水が流出し、大量の土砂を運び出しているようである。そのためこの地点の土層は流出による再堆積層と思われる。



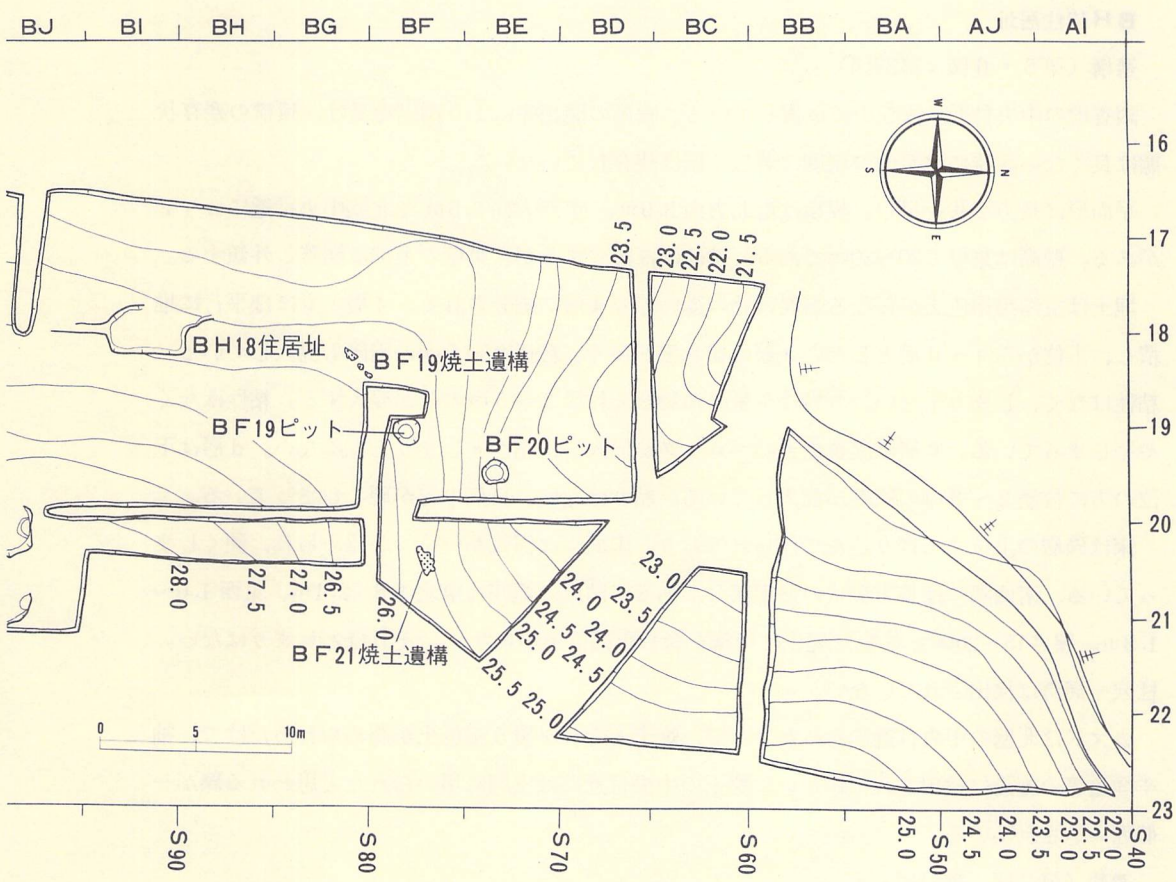
挿図 土層柱状図

引用・参考文献

- 石野公一 1976 北上山系開発地域土地分類基本調査—久慈— 岩手県企画開発室
- 石野公一 1976 北上山系開発地域土地分類基本調査—陸中野田— 岩手県企画開発室
- 照井一明 1982 陸中海岸北部地域の海岸段丘と古流系 岩手県高等学校教育研究会地理部会
- 中村良好 昭和53年 三崎（Ⅲ）遺跡発掘調査報告書（久慈市文化財調査報告書第2集）久慈市教育委員会
- 多田文男 1976 地形と土壤（新地学教育講座9）東海大学出版会



第4図 上野山遺跡遺構配置図 (等高線は標高値, 単位:m)



3. 検出された遺構と遺物

(1) 古代

BH18住居址

遺構 (第5・6図; 第39図)

調査地の中央付近・段丘上に位置している。戦後の開拓等により削剝を受け、遺構の残存状態は良くない。特に北西側の削剝は著しく壁は残存していない。

平面形は長方形状を呈し、規模は南北方向3.9m、東西方向2.5mで北壁中央付近にカマドがある。壁高は東壁で20~30cmである。壁はほぼ直立するが、東壁の上部は崩落し外傾する。

埋土は主に黒褐色土からなるが混入物の違い等で4層に細分される。4層ともほぼ平行に堆積し、上位からa~d層とした。a層は植物根が多く、粒径2~5cmの円礫も混入している。粘性はなく、しまりもない。b層は少量の植物根と粒径2~5cmの礫が混入する。粘性はなくややしまっている。c層は灰黄色土のブロックが混入し、粘性・しまりともない。d層は下位の方に粒径2~3cmの円礫が混入している。粘りはない。東側の方が硬くしまっている。

床は礫層の上位まで掘り込んで作られており、床面には円礫がいくつか認められ、硬くしまっている。南西隅には長方形の貼床部分がある。貼床の範囲は南北1.8~2.1m、東西1.0~1.3m、深さ15~20cmである。埋土は円礫を含む黒褐色土からなり、それほどしまりはない。柱穴や周溝は検出されていない。

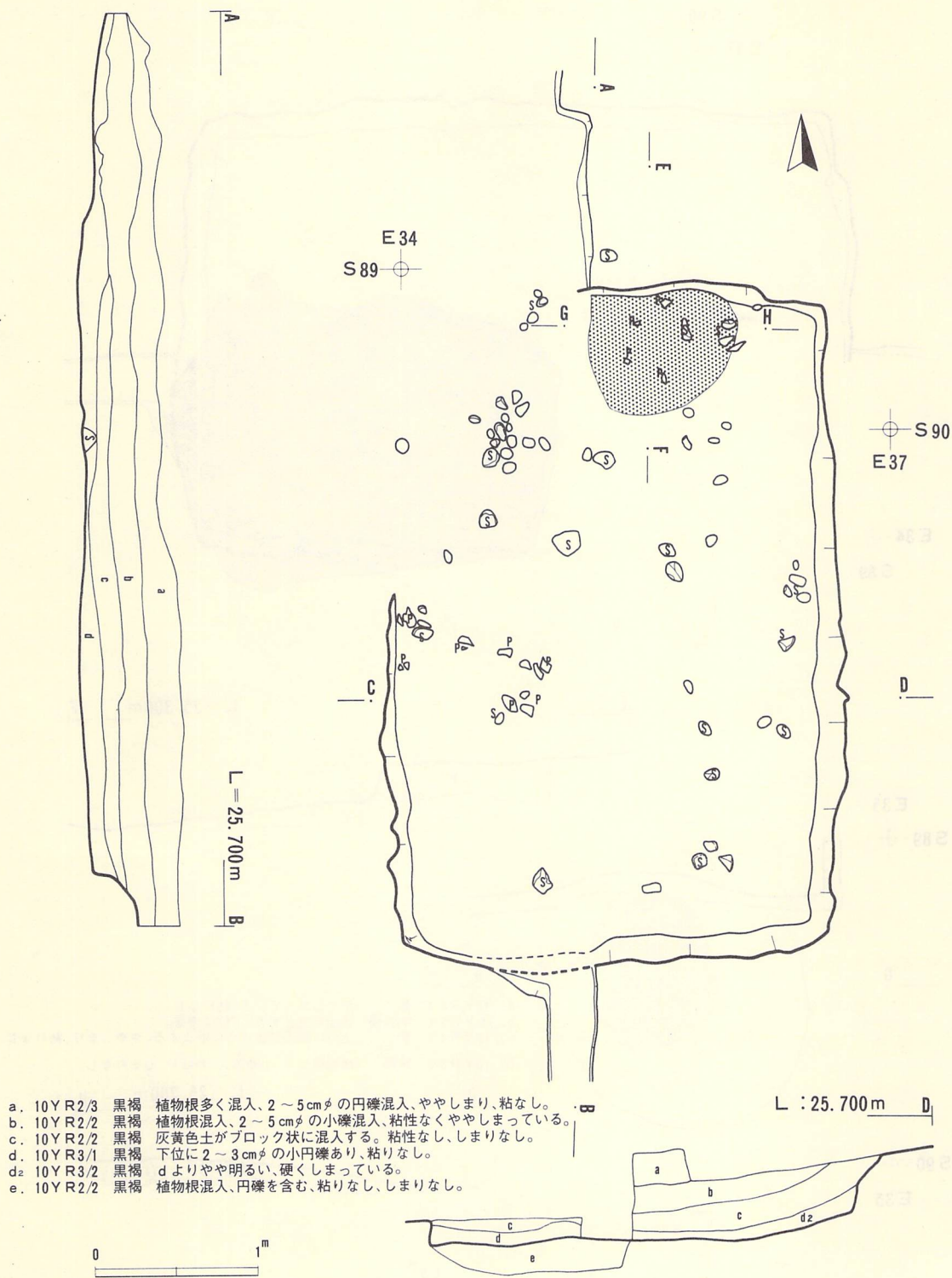
カマドは北壁の中央付近にあったようで、焼土とそれを覆う褐色土が認められるだけで、袖や煙道等の施設は検出されていない。焼土の中央付近には支脚に用いられたと思われる礫が一個埋め込まれている。

遺物 (第7図; 第51図)

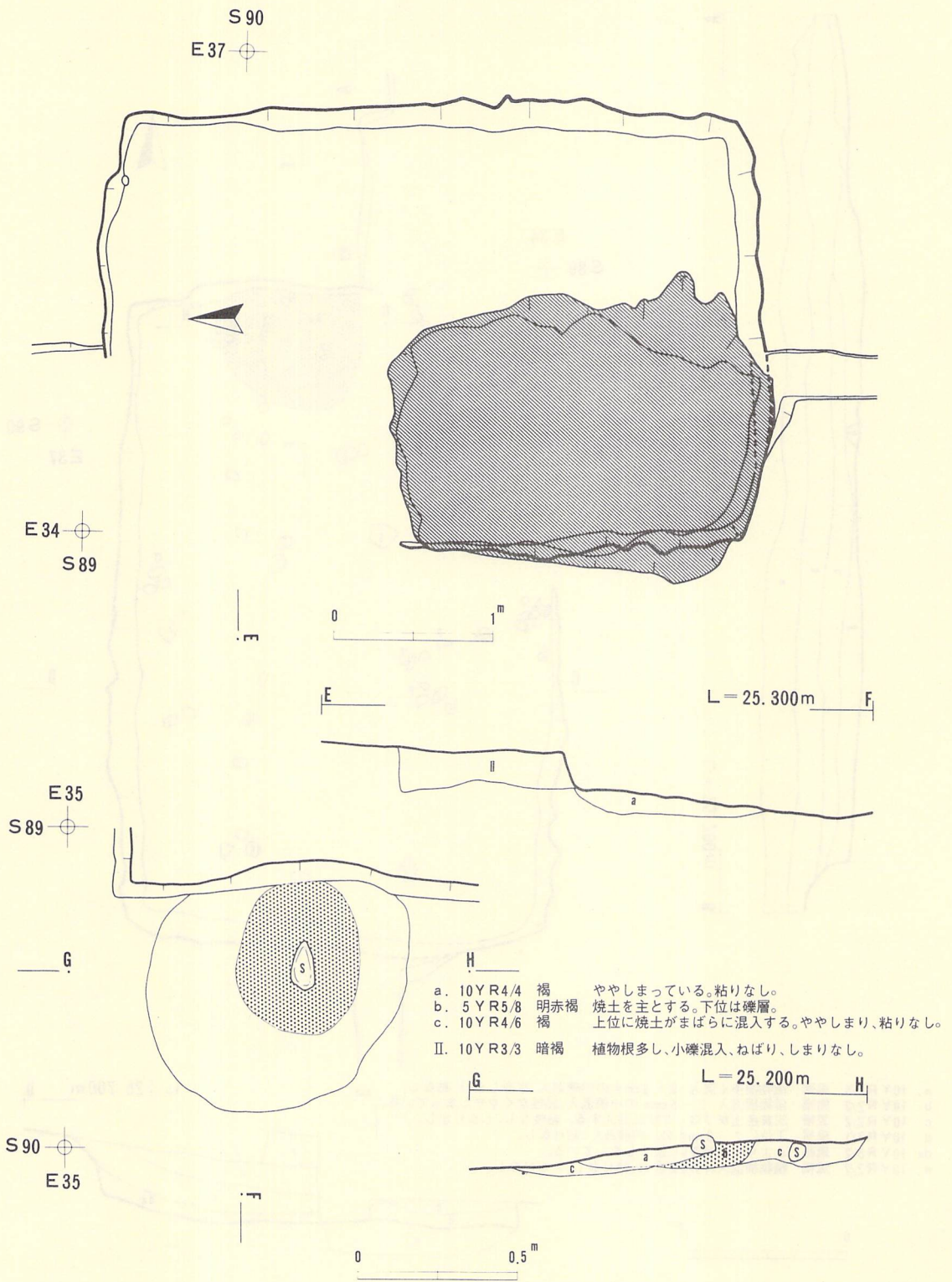
出土遺物は西壁中央付近の埋土下位から床面にかけて坏と甕の破片が、北西の床面付近から琥珀の半加工品が得られている。またカマドの焼土中からも土師器片が得られている。

坏(7-1)は全体の4分の1位の残存で、底部は欠損している。体部は内湾ぎみに立ち上がり、明瞭な段で口縁部と区切られる。口縁部は僅かに外反した後、内湾して立ち上がる。器面調整は、外面は体部ハケメ・口縁部ヨコナデで口縁部下位から体部にかけてミガキが行なわれている。内面はミガキである。内外面とも黒色処理が施されている。胎土に細砂を含み、焼成は普通である。口径は15.5cm、器高は7cm位と思われる。

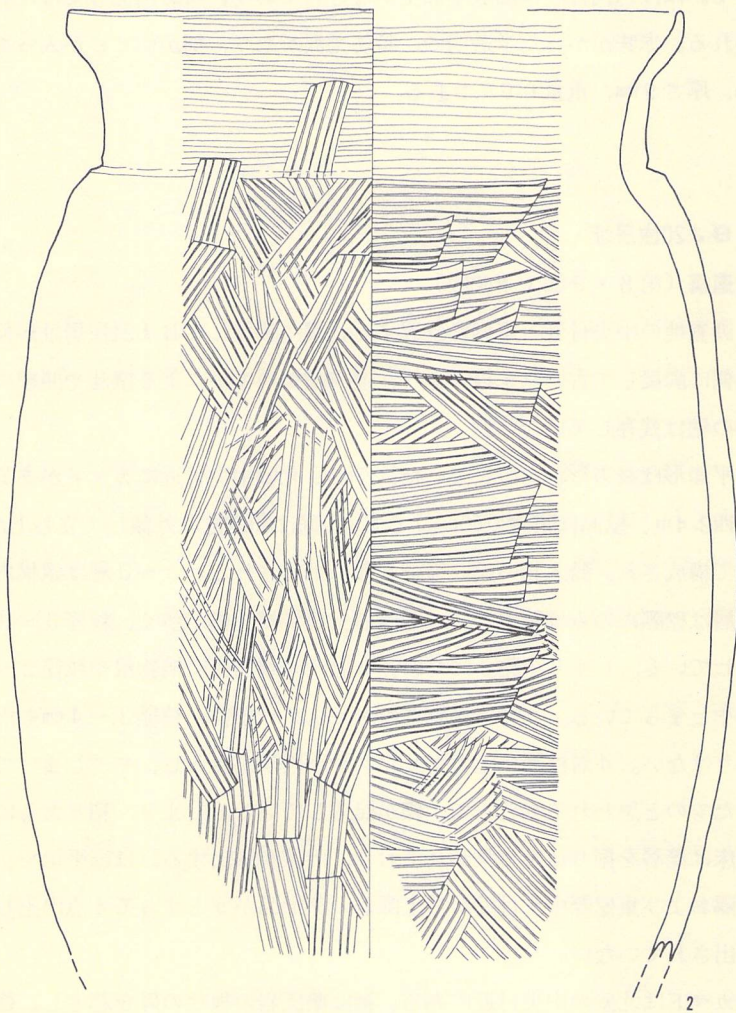
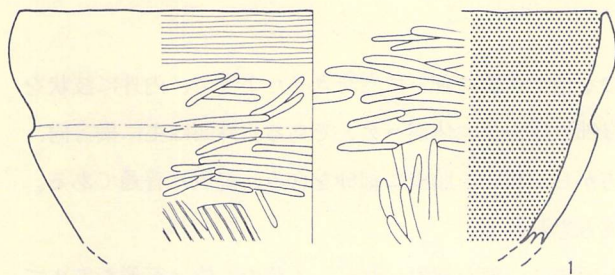
甕(7-2)も4分の1位の残存で底部は欠損している。体部の中央付近が僅かに膨らむ円筒状で、明瞭な段で区切られて口縁部に続く。口縁部は直立した後、外反し、さらに内湾ぎみ



第5図 BH18住居址(平面、埋土断面)



第6図 BH18住居址(ピット、カマド)



0 2 cm

3

0 5 cm

第7图 BH18住居址出土遺物

に直立する。口縁部は外反していたものを指で内側に押し内湾させたようで、内外に波状を呈している。器面調整は、内外とも口縁部ヨコナデ、体部ハケメである。外面は主に縦方向、内面は主に横方向のハケメで、内面の方が目が粗い。胎土に細砂を含み、焼成は普通である。口径16.2cm、最大径19.4cm、器高30cm位と思われる。

琥珀製遺物（7-3）は検出・取り上げ時に一部を破損したが、4分の3位は原形を留めている。ほぼ六角柱状に面取り加工がなされており、研磨は充分ではない。^{なつめ} 棗玉の半加工品と思われる。赤味がかかった半透明で、脂肪光沢があり、細かいヒビが入っている。長さ16mm・幅11mm、厚さ9mm、重量0.9gである。

B J 20住居址

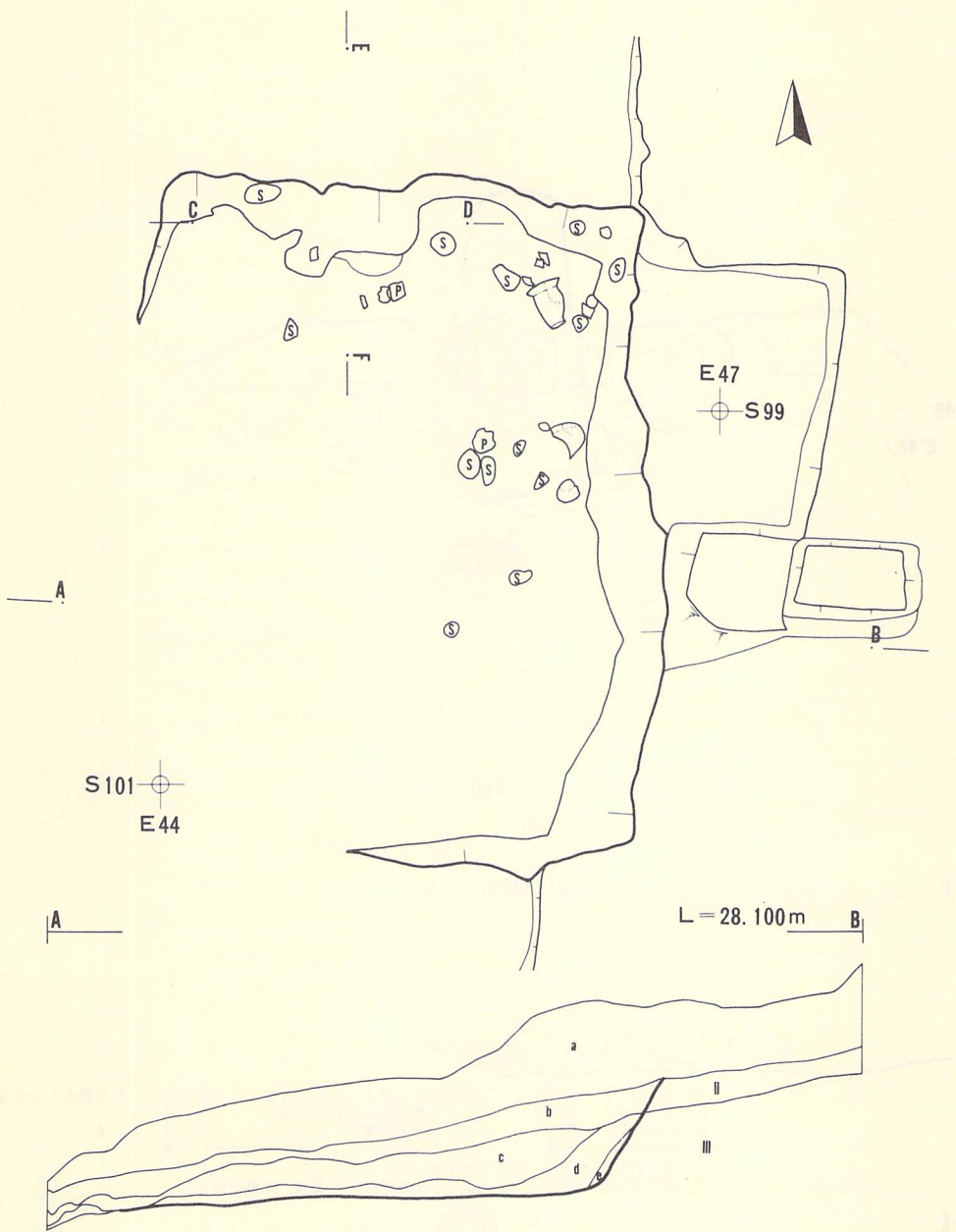
遺構（第8・9図；第40図）

調査地の中央付近・東側に位置する。東に隣接してB J 21住居址が検出されている。遺構の西側に隣接して古い巨木根があり、遺構はこの木根による攪乱や開墾による削剥を受け、南西側の壁は残存していない。

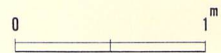
平面形は長方形を呈していたようで、北壁中央付近にカマドがある。規模は南北3.2m、東西2.4m、壁高は東壁で50cm位である。壁は60度位に外傾して立ち上がる。埋土は主に黒褐色土で構成され、混入物の違い等で5層に細分される。a～d層は遺構内にほぼ平行に堆積し、e層は壁際にのみ堆積する。a層は表土層で植物根が多く、粒径3～10cmの円礫や亜角礫も混入している。しまりや粘りはない。b層はa層同様に植物根や粒径2～3cmの円礫が混入し、ややしまっている。c層は褐色土のブロックや粗粒、粒径3～4cmの円礫が混入している。しまりはない。d層は褐色土のブロックや小円礫が混入し、ややしまっている。e層は壁の崩落したものと思われる褐色土で、礫が混入している。しまり、粘りともない。

床は礫層を掘り込んで築かれており、円礫が露出する。ほぼ平坦で、硬くしまっている。北東隅および東壁際中央付近から土師器の完形品がまとまって4点出土している。柱穴や周溝は検出されていない。

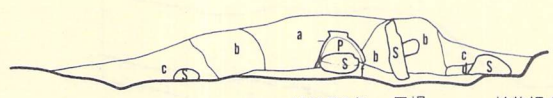
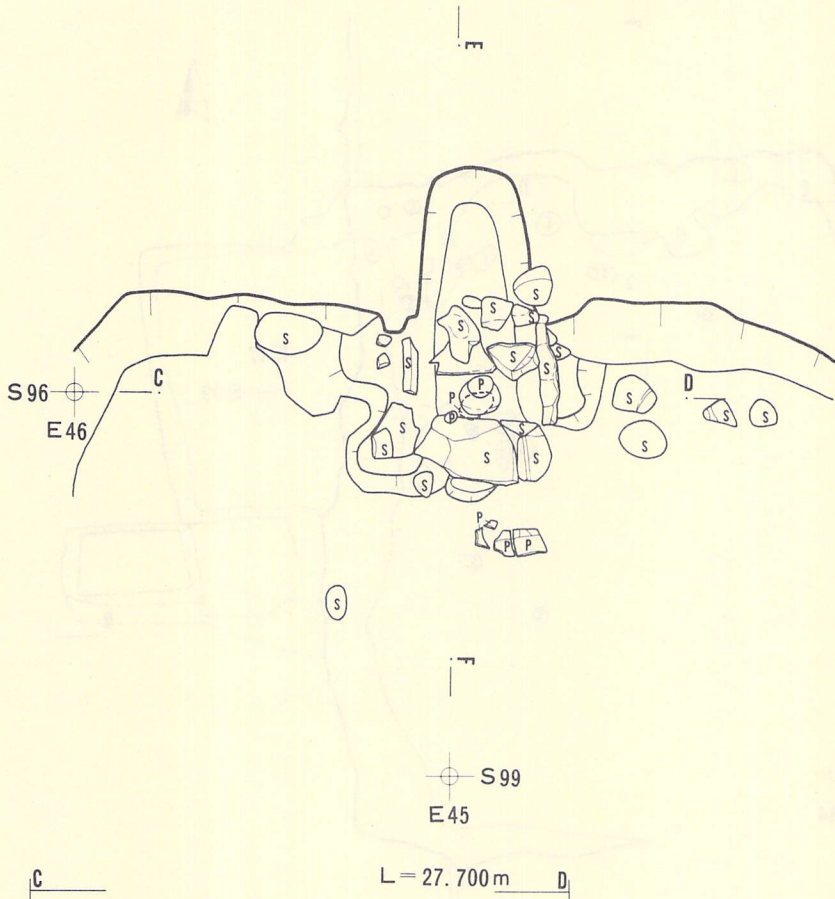
カマドは北壁の中央付近にある。袖は凝灰岩の板状の礫を芯とし、住居址の壁と床を3cm位掘り込んで立て、礫混じりのシルトを貼りつけて作られている。両袖の上には板状の凝灰岩を渡してあるが、手前の天井石は折れ落ちている。燃焼部の中央付近には支脚として使用された甕の下位が固定されている。焚口部は床面から15cm位くぼんでおり、燃焼部は煙道に向かって徐々に立ち上がっている。煙道は壁から急に立ち上がり、長くない。右袖の長さは50cm、左袖の長さは35cm、両袖の間隔は30cm、焼土の広がり径は30cm位、厚さ2～3cmである。



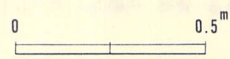
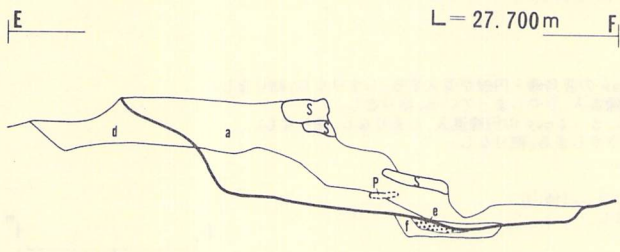
- a. 10YR2/3 黒褐 表土層、植物根多し、3~10cm ϕ の垂角礫・円礫が混入する。しまりなし、粘りなし。
- b. 10YR3/1 黒褐 植物根混入、2~3cm ϕ の円礫混入、ややしまっている。粘りなし。
- c. 10YR3/2 黒褐 褐色土のブロック粗粒が混入、3~4cm ϕ の円礫混入、しまりなし、粘りなし。
- d. 10YR2/3 黒褐 褐色土ブロック・小礫混入、ややしまる。粘りなし。
- e. 10YR4/4 褐 垂角礫混入、しまり、粘りなし。
- II. 10YR4/4 褐 植物根混入、しまりなし、粘りなし。(地山)
- III. 10YR5/8 黄褐 円礫混入、ややしまる。粘りなし。



第8図 BJ20住居址(平面、埋土断面)



- | | | |
|-------------|-------|-----------------------------------|
| a. 10YR3/2 | 黒褐 | 植物根多く混入、にぶい黄橙色土が若干あり、粘り性なし、しまりなし。 |
| b. 10YR3/4 | 暗褐 | にぶい黄橙色土が表面を覆う、やわく、粘りなし |
| c. 7.5YR4/4 | 褐 | 4~5 cmの円礫混入、粘りなく、硬くしまっている。 |
| d. 10YR3/4 | 暗褐 | 2~3 cmの礫が混入、粘性なくやわい。(地山) |
| e. 5YR5/4 | にぶい赤褐 | 焼土層、硬くしまる。 |
| f. 10YR3/4 | 暗褐 | 2~6 cmの円礫多く混入、砂質でやわい。 |



第9図 BJ20住居址(カマド)

遺物（第10・11図；第52・53図）

床面直上の出土遺物としては北東隅から東壁中央付近にかけて甕・坏・碗・甑の完形品がそれぞれ1点ずつ、坏と甕の破片がそれぞれ1個体分ずつ出土している。カマドからは支脚として使用された甕の下位と小破片が得られている。埋土からは土師器と縄文土器の小破片がいくつか得られている。

坏（10—3）は底部から緩やかに湾曲して立ち上がり、口縁部は内湾したのち外反して口唇部に続く。平面形は偏円形である。器面調整は内外ともミガキで、内面は黒色処理がなされている。外面には粘土紐の積上げ痕が残っている。胎土に細砂を含み、焼成は普通である。口径11.2cm、底径4cm、器高3.8cmである。

碗（10—2）は底部から内湾ぎみに広がって立ち上がり、口縁部は内側に入る。器面調整は、口縁部は内外ともに横ナデ、体部外面はハケメ、内面はナデである。胎土に粗砂を含み、焼成は普通である。口径10.6cm、最大径11.7cm、底径6cm、器高7.8cmである。

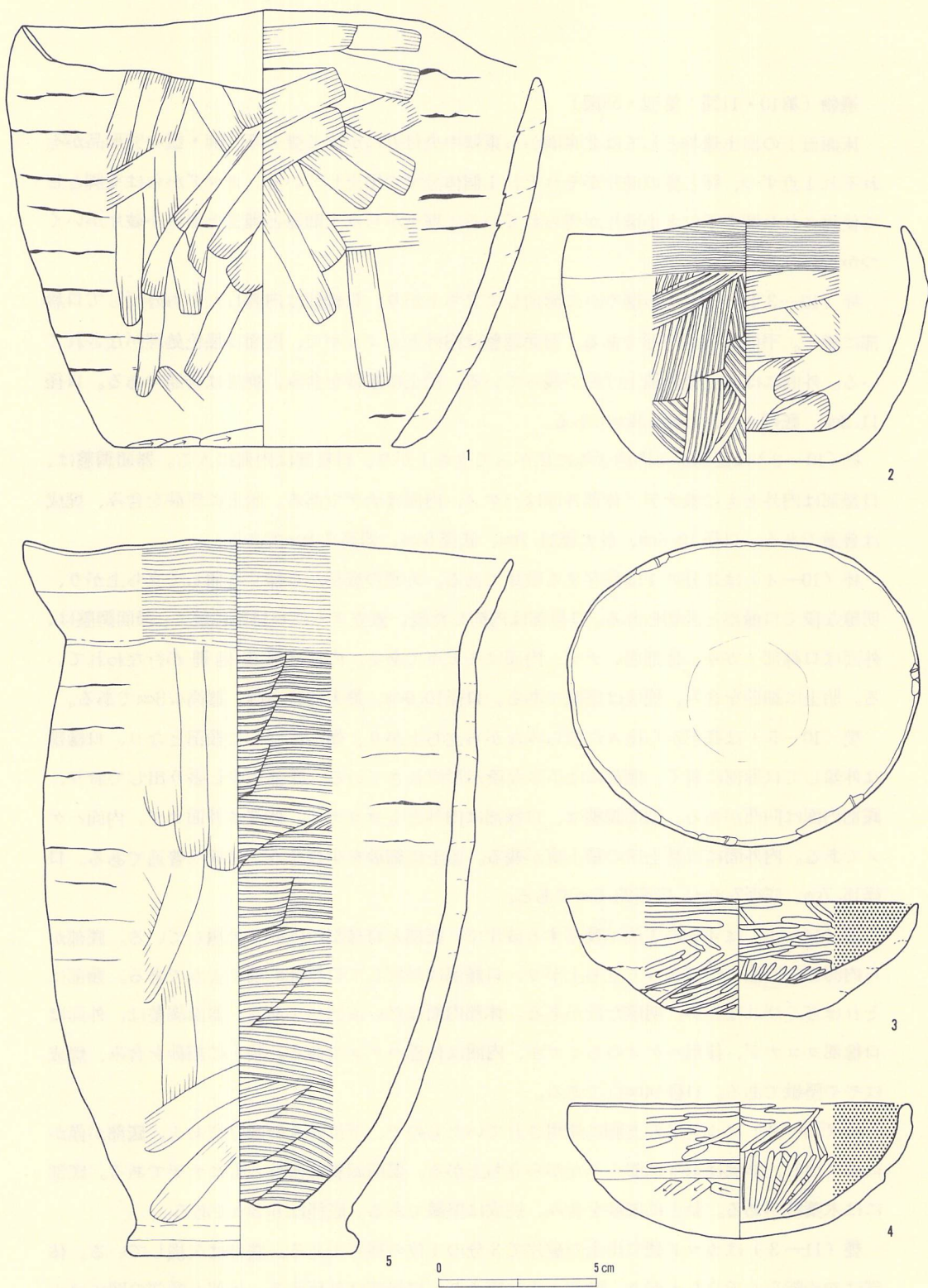
坏（10—4）は3分の1位残存する破片である。丸底の底部から緩く湾曲して立ち上がり、明瞭な段で口縁部と区切られる。口縁部は内湾した後、直立ぎみに口唇部に続く。器面調整は、外面は口縁部ミガキ、体部粗いナデ、内面はミガキである。内面は黒色処理が行なわれている。胎土に細砂を含み、焼成は堅緻である。口径10.9cm、最大径11.1cm、器高4.3cmである。

甕（10—5）は底部から徐々に膨らみながら立ち上がり、僅かに窄んで頸部となり、口縁部は外傾して口唇部に続く。頸部には小さな段が形成れさせている。底部は少し張り出しており、底部内面は凹凸がある。器面調整は、口縁部は内外ともヨコナデ、体部は外面ナデ、内面ハケメである。内外面には粘土紐の積上痕が残る。胎土に細砂を少量含み、焼成は普通である。口径15.7cm、底径7.4cm、器高23.6cmである。

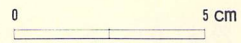
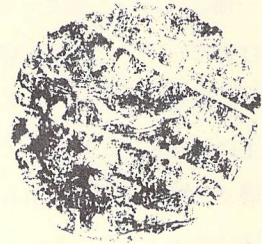
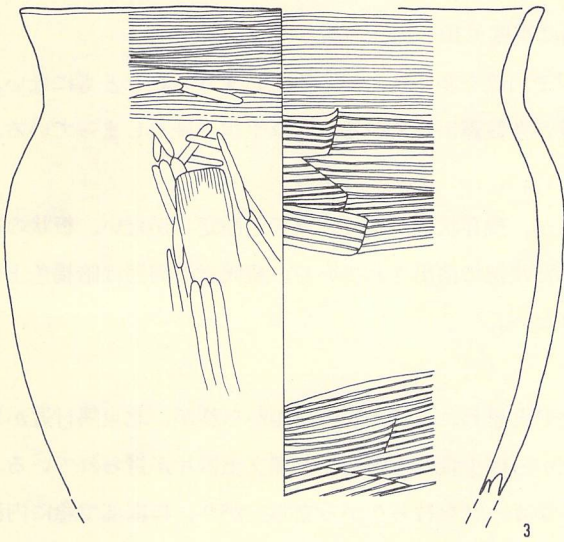
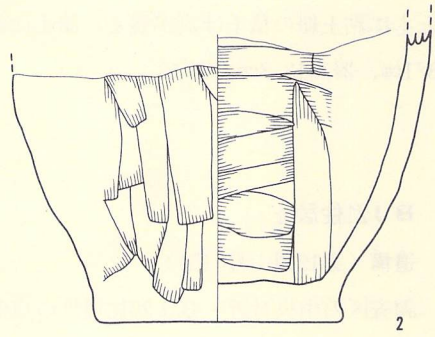
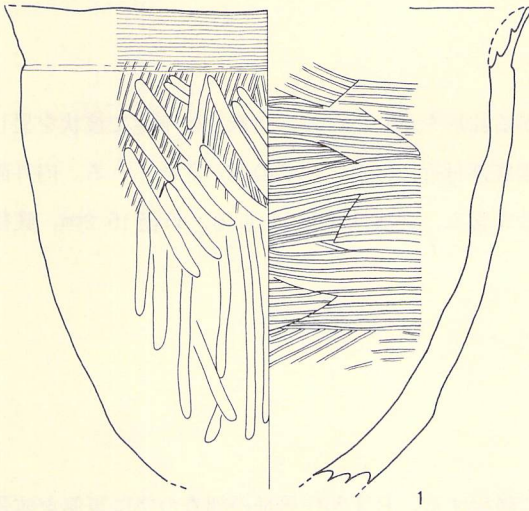
甕（11—1）は4分の1位が残存する破片で、底部と口縁部の内面は欠損している。底部から内湾ぎみに徐々に広がって立ち上がり、口縁部は外反して口唇部に続くようである。頸部はそれほどくびれないが、明瞭な段がある。体部内面はだいぶ凹凸がある。器面調整は、外面は口縁部ヨコナデ、体部ハケメのちミガキ、内面は体部ハケメである。胎土に細砂を含み、焼成はやや堅緻である。口径14cm位である。

甕（11—2）はカマドの支脚に使用されていたもので、下位のみが残存である。底部が僅かに張り出し、体部は徐々に膨らみながら立ち上がる。器面調整は内外ともにナデである。底部には木葉痕がある。胎土に細砂を含み、焼成は堅緻である。底径は6.3cmである。

甕（11—3）はカマド焚口出土の破片で3分の1位が残存である。底部は欠損している。体部はやや膨らんで立ち上がり、頸部で少し窄まり、口縁部は外反する。体部と頸部の間には小さな段が認められる。器面調整は、口縁部は内外ともにヨコナデ、体部は外面ハケメのちミガキ、内面ハケメである。外面のハケメは縦方向、内面は横方向である。胎土に粗砂を含み、焼



第10図 B J 20住居址出土遺物



第11図 B J 20住居址出土遺物

成は普通である。口径13.7cm位である。

甗(10-1)は無底で緩く開いて立ち上がる鉢形を呈している。口縁部は不定で波状を呈している。器面調整は内外ともにナデで、外面底部付近には篋ケズリの痕が認められる。内外面ともに粘土紐の積上げ痕が残る。胎土に細砂を含み、焼成は普通である。口径16.2cm、底径8.1cm、器高13.8cmである。

BJ21住居址

遺構(第12図;号41図)

調査区の中央付近・BJ20住居址の東側に隣接する。BJ20住居址の調査の為に東側を拡張した際に検出された遺構である。この住居址も開墾時に削剝を受けたようで、西側を除く壁とカマドの一部と思われる施設が残っているのみである。

平面形は方形を呈していたと思われるが、検出状況では東壁の中央付近が張り出しており不定形に近い。規模は南北2.3m位、壁高は東壁で10~15cmである。

埋土は主に黒褐色土からなり、植物根や円礫を多く含んでいる。しまり・粘りともにならない。

床は礫層まで掘り込んで作られ、円礫が多数露出している。ほぼ平坦で硬くしまっている。柱穴や周溝は検出されていない。

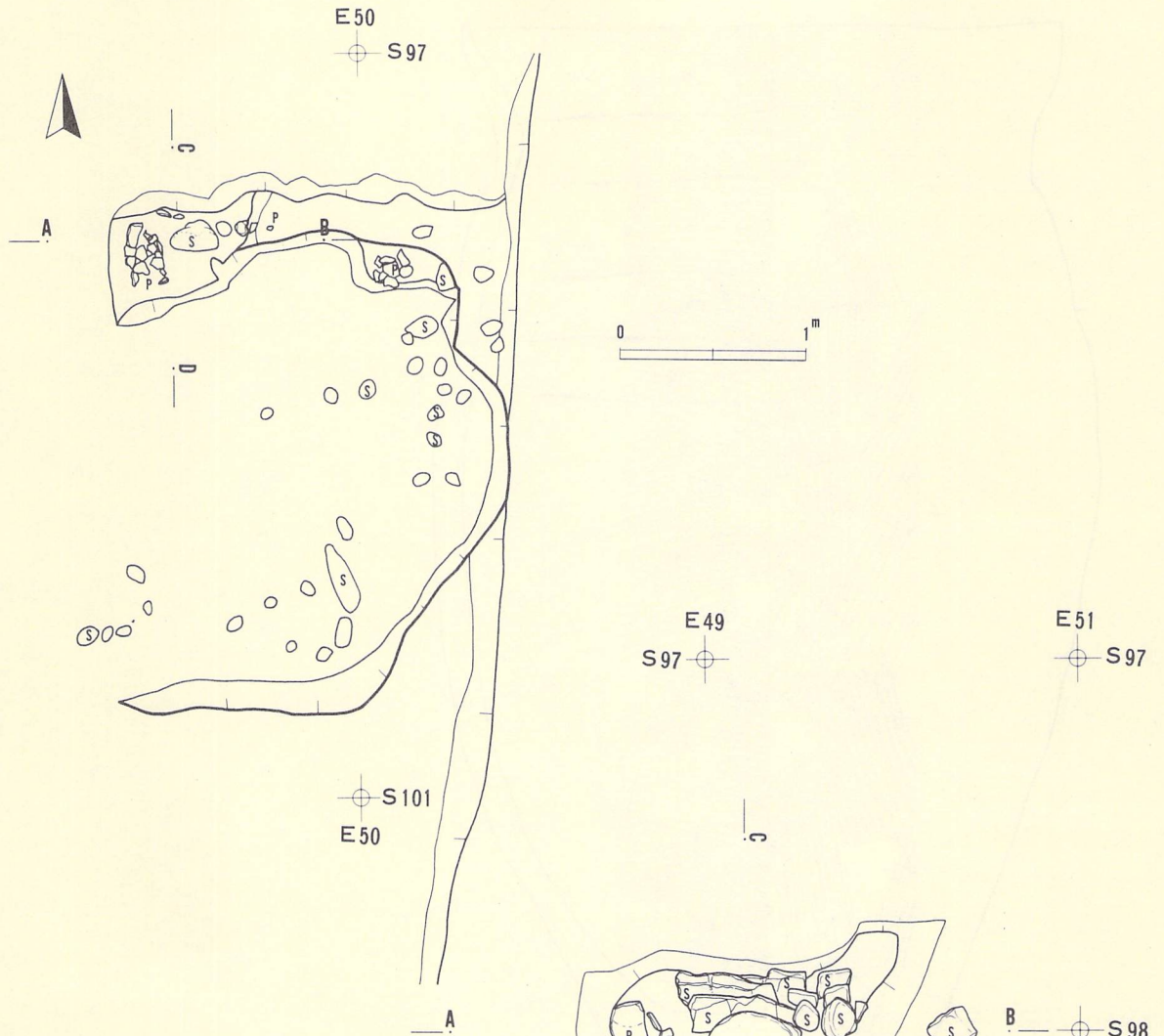
カマドは北壁中央付近に位置しているが、残存状態が悪くカマドと断定しがたい。板状の凝灰岩の礫が4枚重ねて壁に立てかけられた状態で検出されている。凝灰岩の周囲は暗褐色土が堆積しており、焼土や炭化物は認められない。

遺物(第13図;第54図)

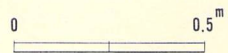
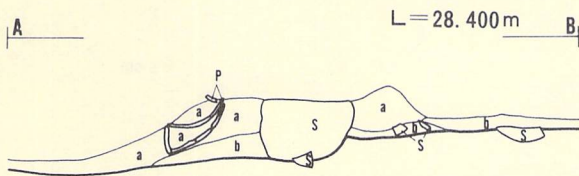
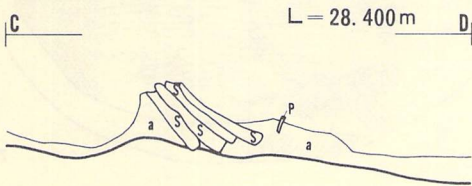
床面直上からの出土遺物としてはカマドと思われる凝灰岩の西側から甕が、北東隅付近から坏がそれぞれ1個体得られている。埋土からは少量の土師器片と縄文土器片が得られている。

坏(13-2)は丸底の底部から緩やかなカーブを持ちながら立ち上がり、口縁部で急に内湾し、また外反して口縁部に続く。口縁部と体部の間には明瞭な段が形成されている。器面調整は、外面は口縁部横ナデ・体部ハケメ、内面は丁寧なミガキで黒色処理が施されている。外面体部には靱の圧痕が認められる。胎土に細砂を含み、焼成は普通である。口径13.7cm、最大径14.1cm、器高7.0cmである。なおこの坏は須恵器の蓋を模倣したものと思われる。

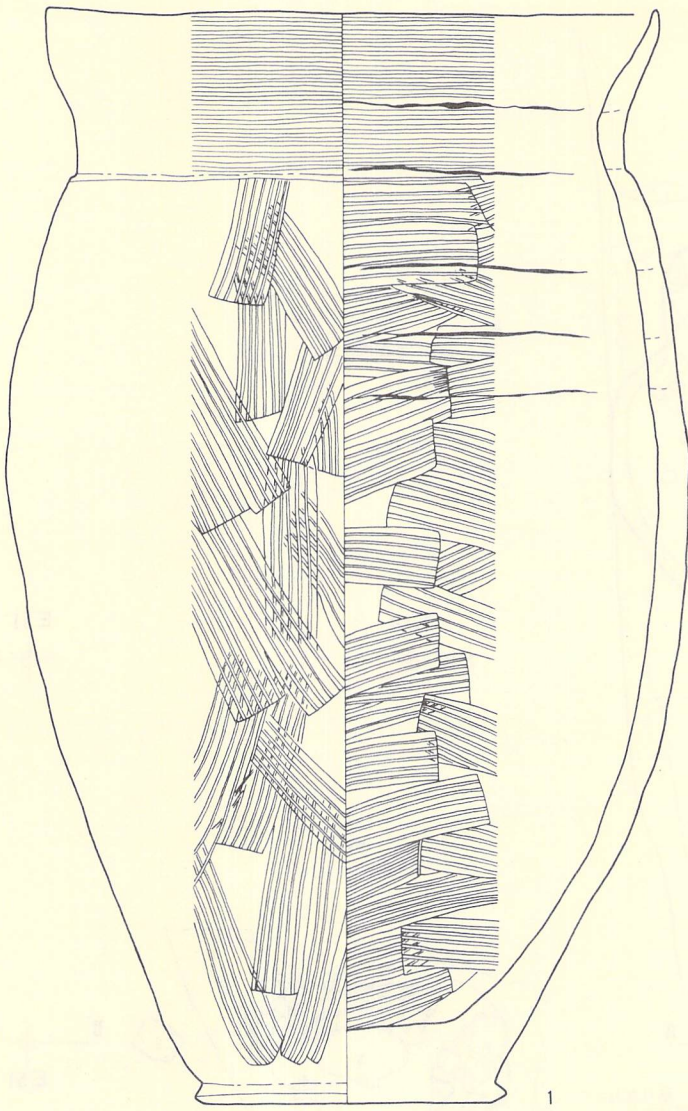
甕(13-1)は底部が僅かに張り出し、体部は徐々に膨らみながら立ち上がり、中央付近から頸部に向かって徐々に窄まる。頸部には明瞭な段があり、口縁部は外反した後内湾して口唇部に続く、口縁部は外反して広がっていたものを手で押さえて内湾させたようで、内外に波状を呈している。底部には木葉痕がある。器面調整は内外面ともに口縁部ヨコナデ・体部ハケメである。外面は主に縦方向、内面は主に横方向のハケメである。内面には粘土紐の積上げ痕が



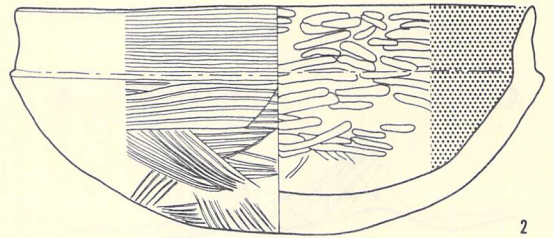
- a. 10YR3/3 暗褐 植物根多し、小礫混入、しまりなし、粘りなし。
- b. 10YR3/4 暗褐 小～中礫混入、ややしまっている。粘りなし。



第12図 BJ21住居址(平面、カマド)



1



2

0 5 cm

第13図 BJ21住居址出土遺物

残っている。胎土に細砂を少量含み、焼成は普通である。口径16cm、最大径18cm、底径8.3cm、器高28.6cmである。

CE19住居址

遺構（第14図；第42図）

段丘上の調査区南端付近に位置している。遺構付近は削平され、調査開始時には小屋の土台が残っていた。そのため遺構の大半は破損を受けており、東壁と南壁の一部と南東部の床が残っている。壁は45度位に外傾して立ち上がる。カマドは残存していない。

埋土は3層に分かれ、a層は表土から連続する暗褐色土で、小礫が混入し、しまっている。b層は炭化物がまばらに混入する黒褐色土で構成され、床面の大半を覆っている。c層は褐色土の粗粒が多量に混入する暗褐色土で床面上にブロック状に堆積している。

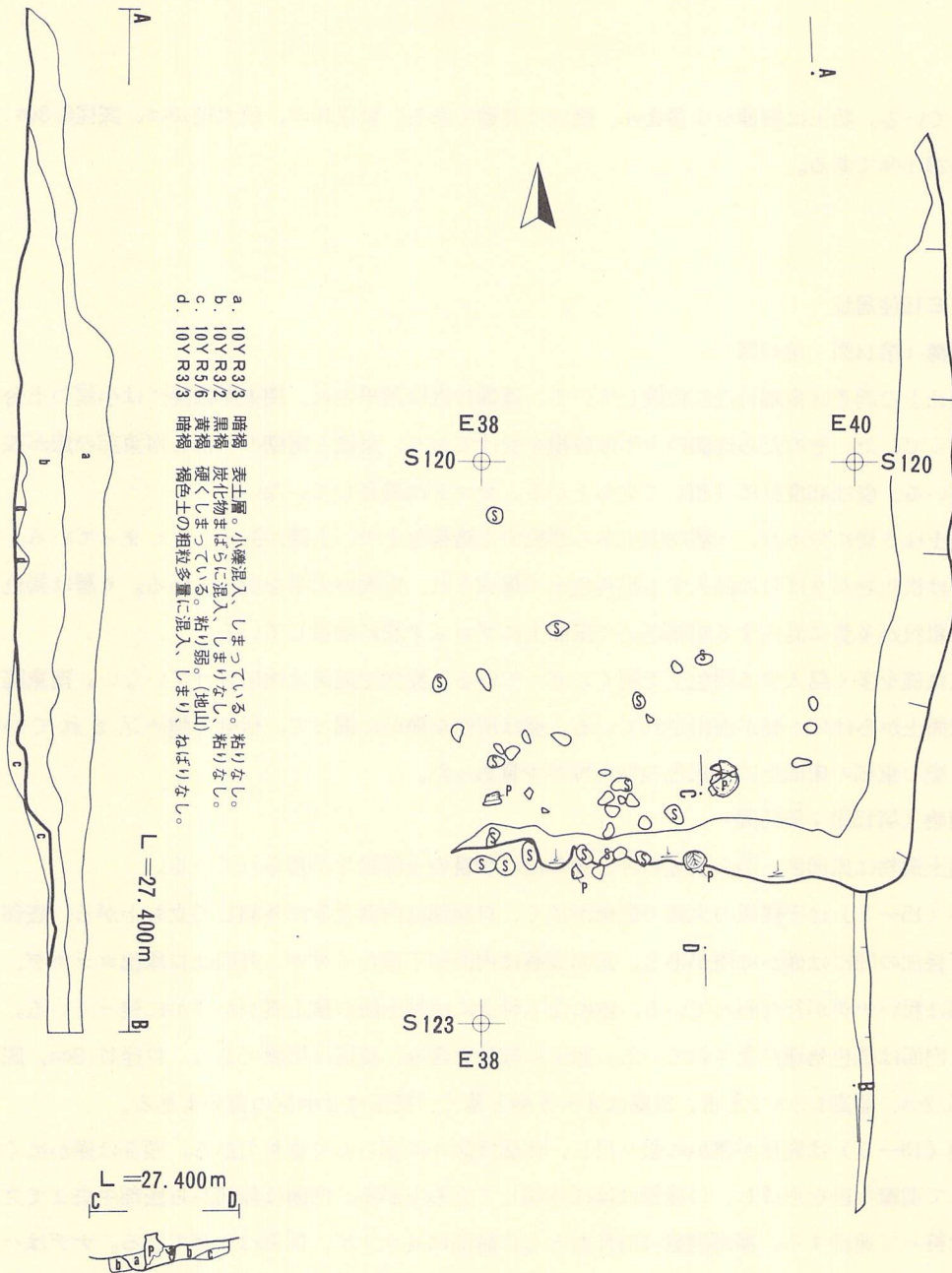
床は礫を多く混入する褐色土で硬くしまっている。柱穴や周溝は検出されていない。南東隅の床面上からは坏と甕が検出されている。甕は南壁を僅かに掘って、伏せて埋め込まれている。甕の東側の床面上には灰色の粘土塊が少量あった。

遺物（第15図；第55図）

出土遺物は床面直上から上述の坏と甕の他に少量の土師器片が得られている。

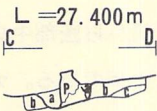
坏（15-1）は平底風の丸底で底部が広く、口縁部は内湾ぎみに外傾して立ち上がる。底部と口縁部の間には僅かに段がある。器面調整は内面が丁寧なミガキ、外面は口縁部ヨコナデ、底部は粗いナデが行なわれている。段になる付近には粘土紐の積上痕がかすかに残っている。また内面は黒色処理がなされている。胎土に細砂を含み、焼成は堅緻である。口径17.3cm、底径15.2cm、器高4.3cmである。器厚は4～5mmと薄く、底部は2mm位の部分もある。

甕（15-2）は底部が僅かに張り出し、体部は徐々に膨らんで立ち上がる。頸部は僅かにくびれて明瞭な段を形成し、口縁部はほぼ外傾して立ち上がる。内面は体部から底部中央まで丸味を持って連続する。器面調整は内外面とも口縁部はヨコナデ、体部はナデである。ナデはハケメのように粗く、内面は主に横方向、外面は主に縦方向の調整である。底部には木葉痕がある。胎土に細砂を含み、焼成は芯に黒色部分がかなり残るがやや堅緻である。口径14.2cm、底径7.6cm、器高13.0cm、器厚は6～7mmである。また内外面に煮こぼれ状の炭化物が付着している。

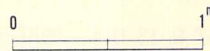


- a. 10Y R3/3 暗褐 表土層。小礫混入、しまっている。粘りなし。
- b. 10Y R3/2 黒褐 灰化物まばらに混入、しまりなし。粘りなし。
- c. 10Y R5/6 黄褐 硬くしまっている。粘り弱。(地山)
- d. 10Y R3/3 暗褐 褐色土の粗粒多量に混入、しまり、なげりなし。

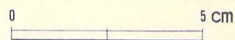
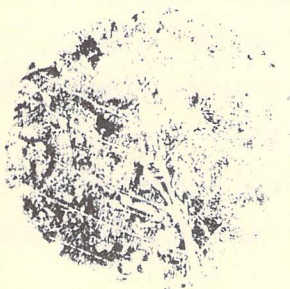
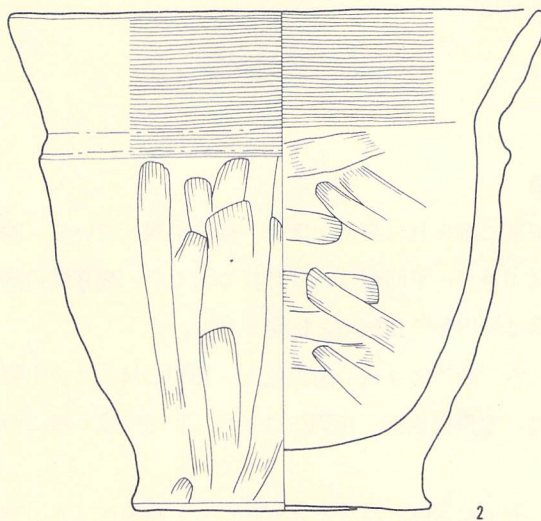
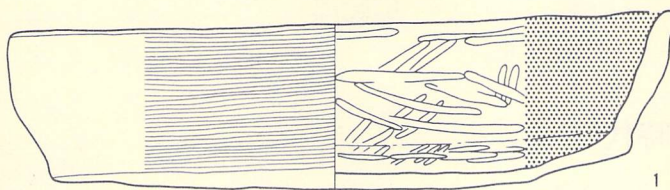
L = 27.400 m



- a. 10Y R3/3 暗褐 褐色土粗粒混入、しまりなし、粘りなし。
- b. 10Y R3/4 暗褐 褐色土細粒まばらに混入、しまりなし、粘りなし。
- c. 10Y R4/6 褐色 ややしまる。粘りなし。(地山)



第14図 CE 19住居址(平面、埋土断面、埋甕断面)



第15図 C E 19住居址出土遺物

(2) 縄文時代

縄文時代の住居址は4棟（CG20、CI20、CJ20、CJ20—2）検出された。各住居の位置は、調査区域南部の南面する斜面（標高23～25m）にあって、古代の住居址（標高26～27m）よりも低地に占地している。縄文時代住居址のある場所は畑への通路になっているため、道路工事によって削られ、各遺構の西側半分以上は毀されていた。そのため遺構は主として、道路工事による露頭で検出された。

CG20住居址

遺構（第16図；第43図）

遺構の大部分は道路工事で削られ、東壁と床の一部が残っている。残存部の規模は北西～南東3.9m、北東～南西1.0mで、平面形は三日月状であるが、残存壁の周り具合からみて、原状は径5m前後の円形又は楕円形の住居址と推定される。

埋土は3層に大別される。断面図a層の暗褐色土（10YR3/4）は表土層で遺構外の土層と連続する。b層は円礫の混じる黒褐色土（10YR3/1）で、北側ではc層にのるが、南側は床に接して堆積する。

壁は北から南に傾斜して下がる礫の混入する黒褐色土と明褐色シルト質土を掘り込んで造られている。壁高は北側で110cm、南側で30cmで50～90度に外傾している。

床は径1～10cmの円礫が多く混じる明褐色シルト質土で、ほぼ平坦である。

柱穴は北側から1ヶ検出された。礫層を掘り込んでいて、開口部径20cm、底部径7cm、深さ30cmあり、埋土は黒褐色土の単層である。

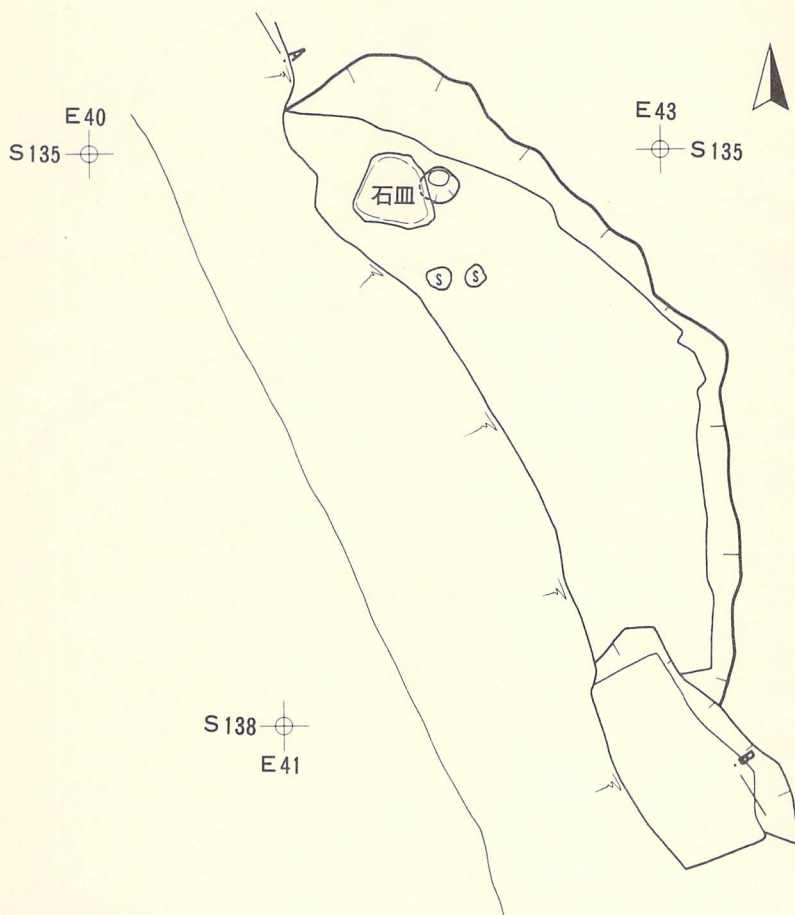
炉は検出されていないが削平部分にあった可能性が強い。なお北側埋土断面（c層）の下部にピット状に凹んでいるが、c層の大部分は削られていて調査不能の状態であり、詳細は不明である。

遺物（第19図；第56図）

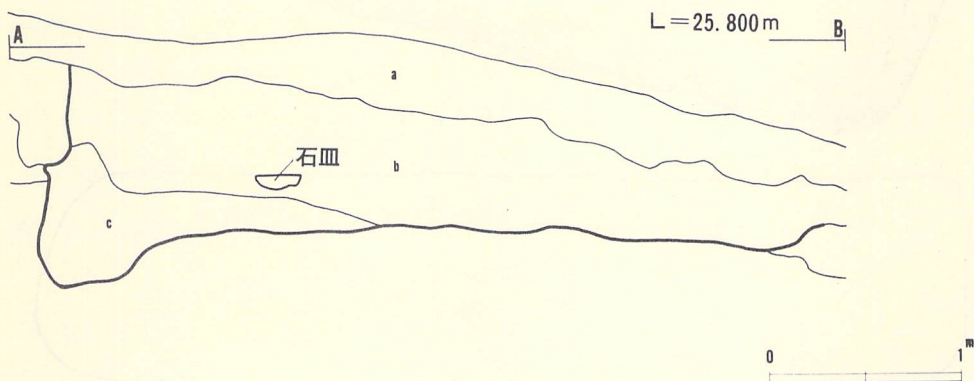
石皿と磨石が各1ヶ、北側床上約25cmの埋土から出土した。石皿（19—2）は長さ40cm、幅20～40cm、厚さ8.5cmの盤状の礫で石質は花崗岩である。一面は平坦で一面には起伏があり、共に磨痕があるが、平らな面の方が多く研磨されている。

磨石（19—1）は径10.5cm、幅9cm、厚さ8cmの花崗岩円礫で、ほぼ全面が研磨され平滑になっているが、敲打による凹凸もあり敲打石としての用途も考えられる。

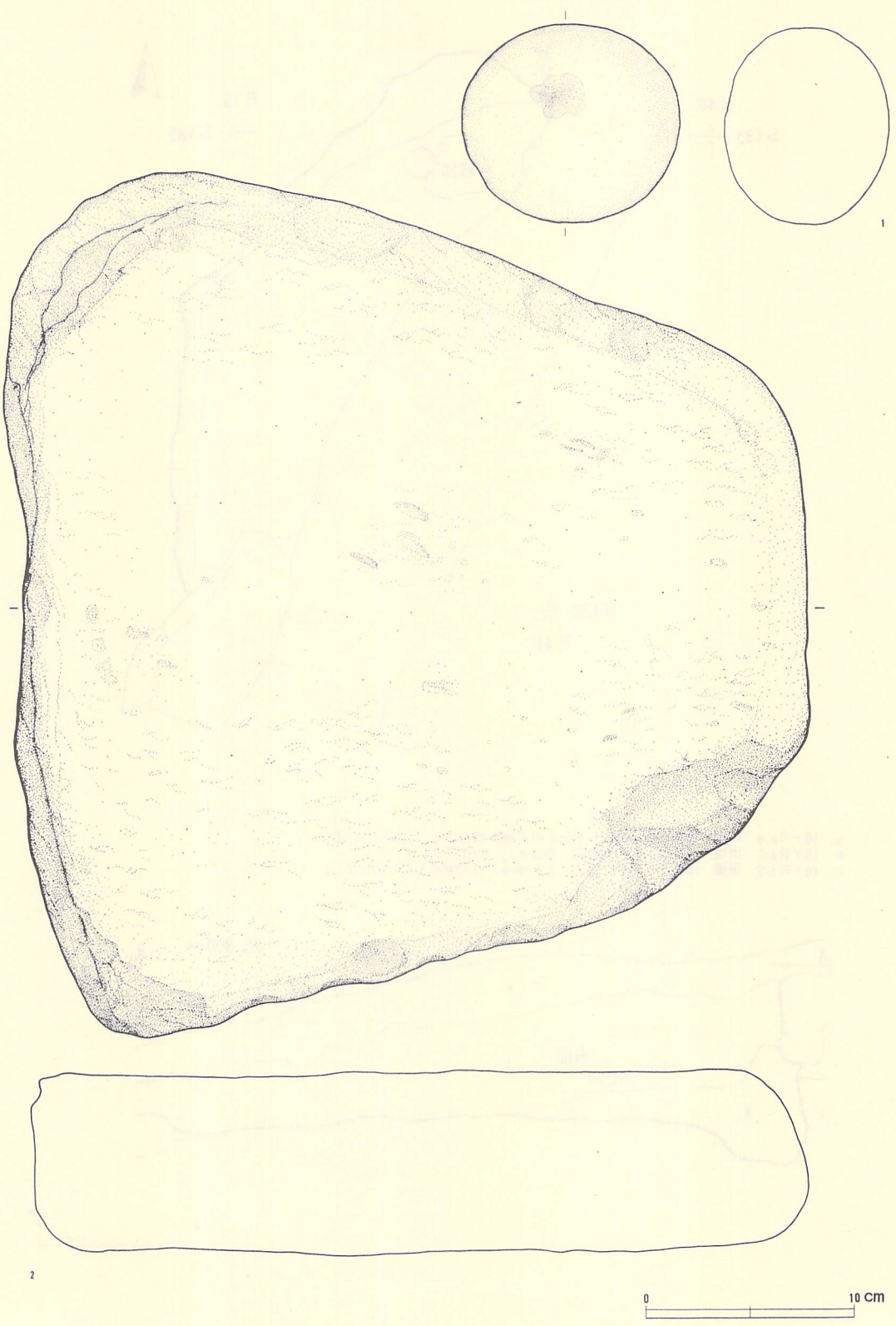
住居址の所属時期は出土した石器からみて縄文時代と考えられるが、土器の出土はなく明確な時期は不明である。



- a. 10Y R3/4 暗褐 植物根多く混入、5 cm ϕ の円礫が散在する。しまっている。
- b. 10Y R3/1 黒褐 1~10cm ϕ 円礫散在、石皿あり、しまりなし。
- c. 10Y R3/2 黒褐 褐色土部分的に混入、1~10cm ϕ の円礫混入、しまりなし。



第16図 CG 20住居址(平面、埋土断面)



第17図 C G 20住居址出土遺物

C I 20住居址

遺構（第18図；第44図）

西半部が削られており、東壁及び南壁の一部分と西半部の床が検出された。残存部の規模は北西～南東3 m、北東～南西2.5 mである。壁の周り具合や炉の位置から推定すると、原状は径3～4 mと考えられる。

埋土は4層に分かれる。a層の黒褐色土とb層の暗褐色土は遺構外に連続する土層である。c層は径5 cm前後の円礫が散在する黒褐色土（10YR3/2）で、大部分はd層の上に乗るが、中央部は床に接して堆積する。d層は部分的に褐色土が混じる暗褐色土（10YR3/4）で、壁際に厚く中央部に向って薄く堆積する。

壁は円礫の混じる黄褐色シルト質土（地山）を掘って造られている。壁高は15～45cm、勾配は70～80°である。

床は円礫の混じる褐色土でほぼ平坦である。柱穴は検出されていない。

炉は土器埋設炉が1基、東壁から約2 mの位置で検出された。埋設土器は風化が著しく、復元は不可能であったが、土器の口縁部又は胴部を輪切りにしたような状態で用いたとみられる。土器の径は20cmで、内部の土は炭化物や焼土の細粒を含む極暗褐色土（7.5YR3/2）である。

埋設土器の東側に接する70cm×80cmの不規則な範囲で、赤褐色（5 YR4/6）の焼土が検出されている。

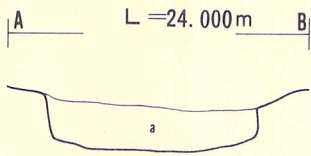
南東隅の壁に接してピットが1基検出された。平面形は円形で、規模は径1.1m×1.2m、深さは25cmで断面形は皿状を呈する。埋土は小礫と褐色土の細粒が散在する暗褐色土（10YR3/4）の単層で、住居址埋土のd層に似た土であることから、住居址に附属するピットとみられる。

遺物（第19図；第57・58図）

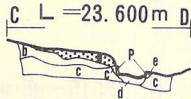
東壁に接する床面から浅鉢（19-1）と埋土から若干の土器片が出土した。浅鉢は底部から口縁に向って外反ぎみに広がって立ち上がる。口縁部の一部が欠損しているが、12山の小波状口縁である。地文はLRの斜縄文で、沈線によって施文されている。沈線で区画された口縁部には、口唇部にそって一本の沈線が施文されている。体部上位には2条の沈線が巡り、沈線内には縄文が残る。体部下位には「T」字を連続したようなモチーフが磨消により施文されている。内面も磨いて調整されているが、外面よりも粗雑である。外面の一部に赤色の顔料がみられるが、本来は全面に塗られていたと考えられる。波状口縁部の一ヶ所に土器を焼く以前にあけたとみられる径2 mmの穴がある。

埋土出土の土器片（19-2～6）は多条の沈線で施文されているが、文様の詳細は不明である。上記の他に南東隅のピットの埋土から琥珀の細片が出土している。

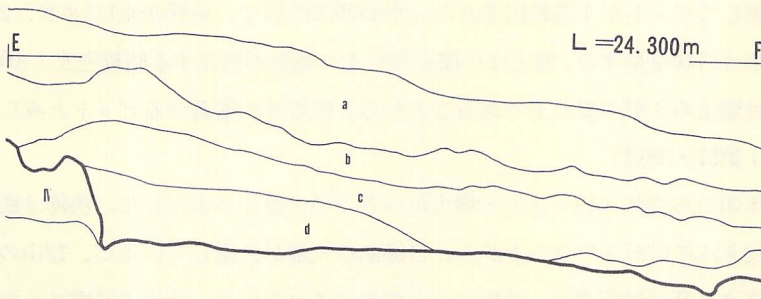
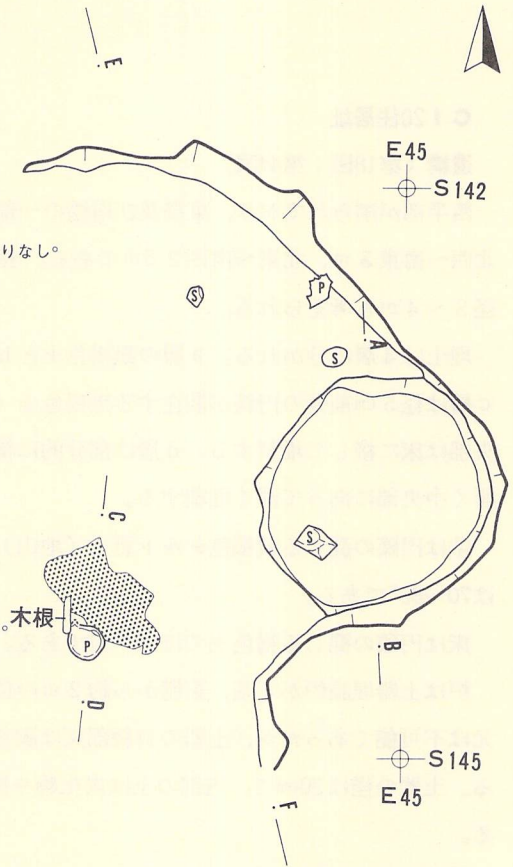
住居址の所属時期は、出土した土器の特徴からみて縄文時代後期前葉と考えられる。



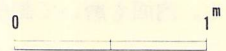
a. 10Y R2/3 黒褐 褐色土、炭化物、礫が混入する。ねばり、しまりなし。



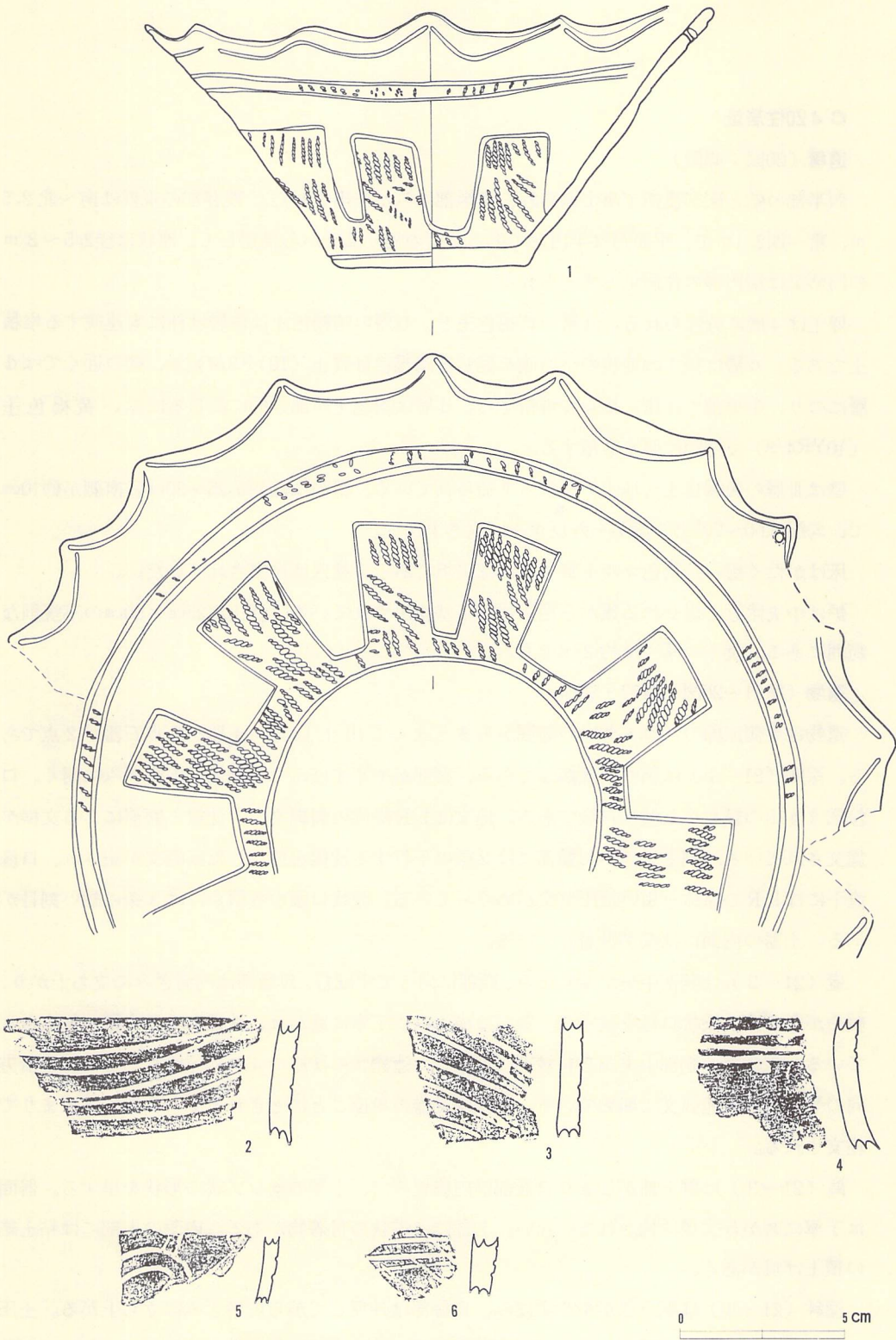
- a. 5 Y R4/6 赤褐 焼土、硬くしまっている。
- b. 10 Y R2/3 黒褐 炭化物まばらに混入、硬くしまる。粘りなし。
- c. 7.5 Y R4/6 褐色 しまっている。粘りなし。(地山)
- d. 7.5 Y R2/3 極暗褐 焼土、炭化物混入、ややしまる。粘りなし。
- e. 10 Y R3/2 黒褐 ややしまる。粘りなし。



- a. 10Y R3/2 黒褐 もろく、粘りなし。(盛土)
- b. 10Y R3/4 暗褐 植物根多く混入、5cm位の礫が散在する。ややしまっている。
- c. 10Y R3/2 黒褐 5cm位の円礫散在、サラサラしている。
- d. 10Y R3/3 暗褐 部分的に褐色土がまじる。ややしまっている。
- IV. 10Y R5/6 黄褐 10cm位の円礫が混入する。しまっている。(地山)



第18図 C I 20住居址(平面、埋土断面、ピット埋土断面、炉断面)



第19图 C I 20住居址出土遺物

C J 20住居址

遺構 (20図; 45図)

西半部の壁と床が農道工事で削られ、東半部のみが検出された。残存部の規模は南～北2.5 m、東～西2.1 mで、平面形は半円形である。壁の周り具合から推定して、原状は径2.5～3 mの円形又は楕円形の住居址と考えられる。

埋土は4層に分けられる。a層の黄褐色土と、b層の暗褐色土は住居址外にも連続する堆積土である。c層は径1 cm前後の小円礫が混じる暗褐色砂質土(10YR3/4)で、壁の近くではd層にのり、中央部では床に接して堆積する。d層は褐色土が部分的に混じるにぶい黄褐色土(10YR4/3)で壁際に厚く堆積する。

壁はⅢ層の黄褐色土(地山)を掘って造られている。壁高は北側が25～30 cm、南側が約10 cmで、勾配は60～70°あり床から外反ぎみに立ち上がる。

床はかたく締った褐色シルト質土でほぼ平坦である。柱穴は検出されていない。

炉は中央附近と思われる床から地床炉が1基検出されている。焼土は25 cm×50 cmの不規則な範囲にある。焼土の厚さは約2 cmである。

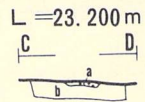
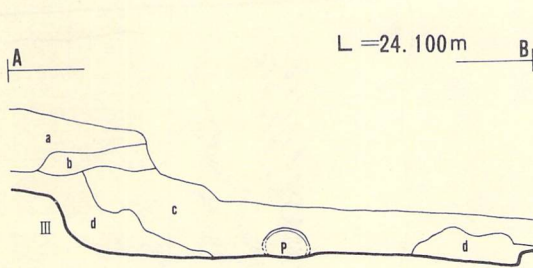
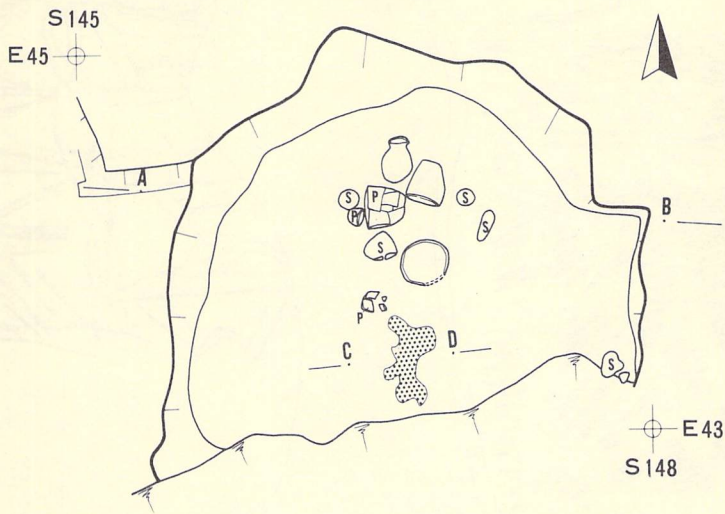
遺物 (第21～26図; 第57・58図)

遺物は東側床面の70 cm×80 cmの範囲からまとまって出土した。土器が5点石器が2点である。深鉢(21-1)は胴の上部がふくらみ、頸部がややすぼんで口縁部が内湾ぎみに開く。口縁部は4山の緩やかな波状口縁である。地文はLR縦位の斜縄文で、沈線と磨消による文様が施文されている。胴上半部から頸部には2条の平行する沈線を使用した区画文が施され、口縁直下にはLRの原体を用いた圧痕文がめぐっている。波状口縁の各頂点には3条の短い刻目がある。土器の内面には煤が付着している。

壺(21-2)は胴部中央がふくらみ、頸部に向ってすぼむ。口縁部は内湾ぎみに立ち上がり、緩やかな3山の波状口縁を呈する。器面は横方向に丁寧に磨かれ、沈線による文様が施文されている。文様帯は胴部中央から口縁部にあって、連鎖状の沈線で4つに区画し、その間を横方向の平行沈線と連弧文で埋めている。沈線は文様の単位ごとにとぎれる2～3条のまとまりで施文される。

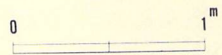
鉢(21-3)は胴下部がしまり口縁部が内湾ぎみで、小型のコップ状の形状を呈する。器面は丁寧に磨かれ文様は施されていない。上部には煤状の付着物がある。内面の上部には粘土紐の積上げ痕がある。

深鉢(21-4)は胴上位がややすぼみ、口縁部は外反してから内湾ぎみに立ち上がる。土圧による歪みが著しく口径は16～21 cmの楕円形を呈する。全面に斜縄文が施されているが、原体の撚りの方向は判別が難かしく不明である。1ヶ所に縦方向の綾絡文(L)が施文されている。口縁部直下には補修孔と思われる径3 mmの小穴がある。器面には煤の付着がみられるが、特に

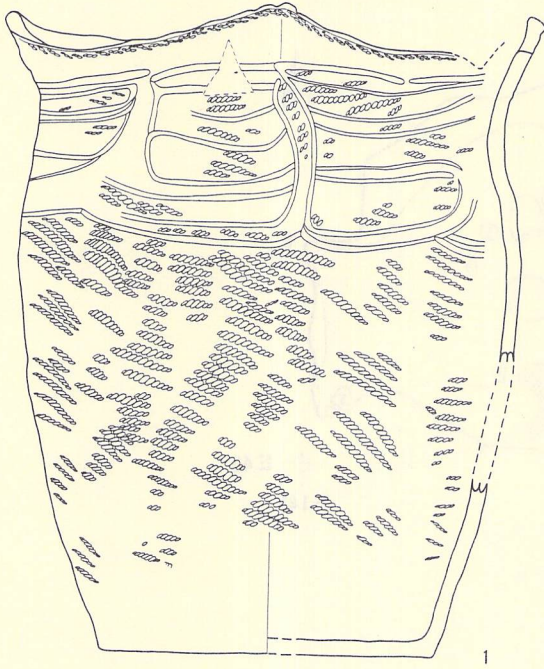


- a. 5 Y R 3/3 暗赤褐 焼土層、少量の炭化物を含む。
- b. 10 Y R 3/2 黒褐 焼土の下位は硬くしまる。(地山)

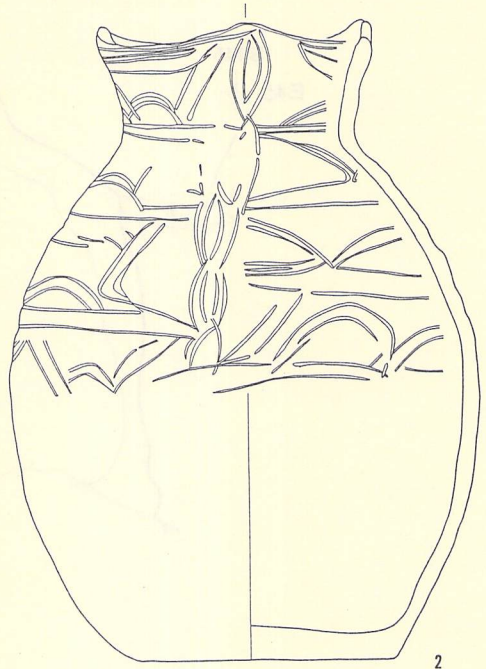
- a. 10 Y R 4/3 にぶい黄褐 砂質土、植物根多く混入。
- b. 10 Y R 3/4 暗褐 砂質土、粘性なくもろい。
- c. 10 Y R 3/4 暗褐 砂質土、1 cm 前後の小礫混入、下位に遺物あり、粘りなし、ややしまる。
- d. 10 Y R 4/3 にぶい黄褐 褐色土が部分的に混入、ややしまる。粘りなし。
- Ⅲ. 10 Y R 5/6 黄褐 粘りなし、硬くしまっている。(地山)



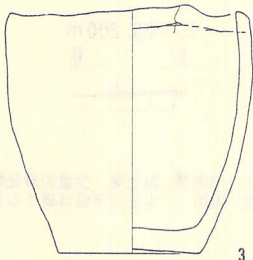
第20図 C J 20住居址(平面、埋土断面、炉断面)



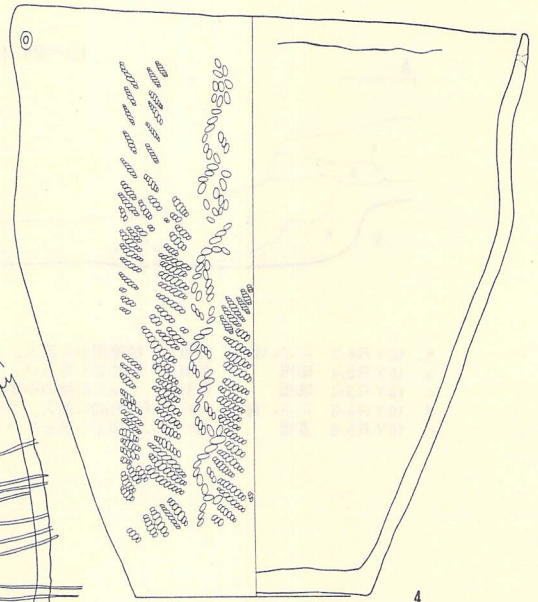
1



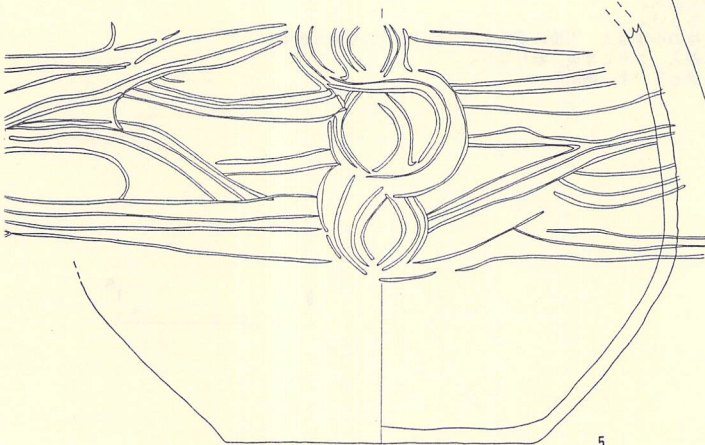
2



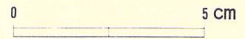
3



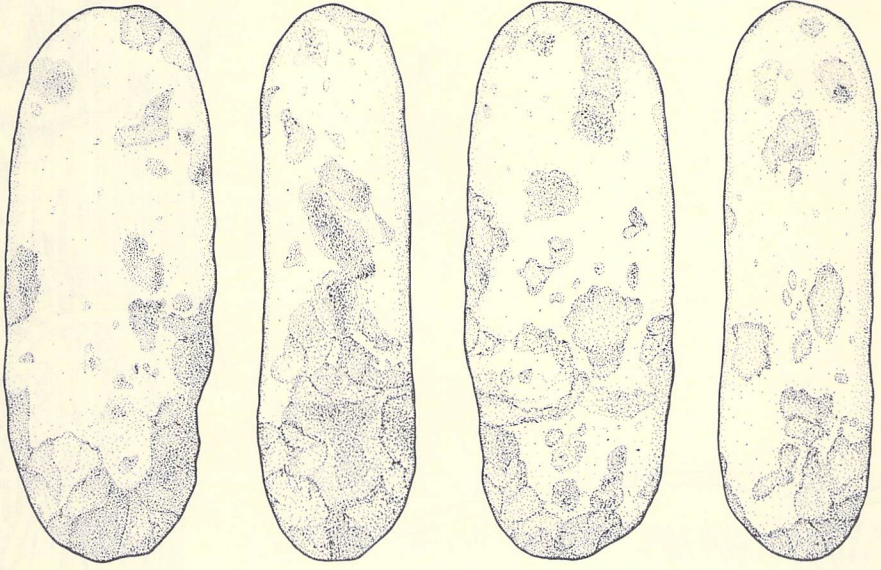
4



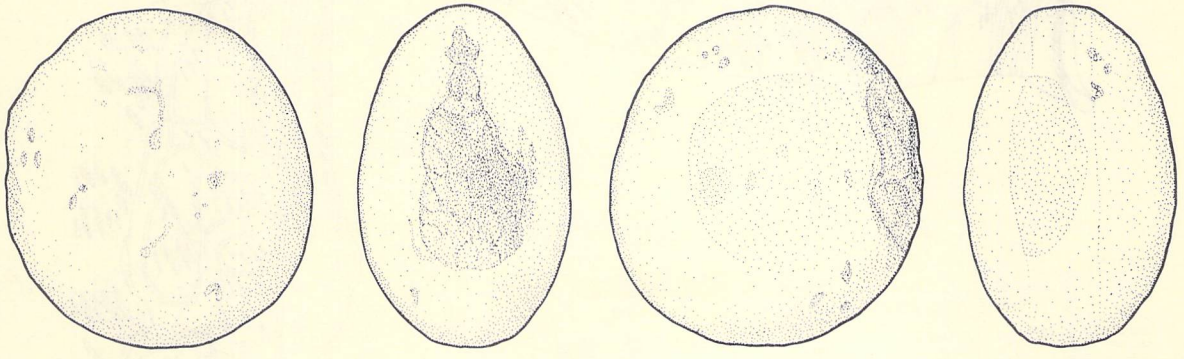
5



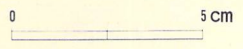
第21図C J 20住居址出土遺物



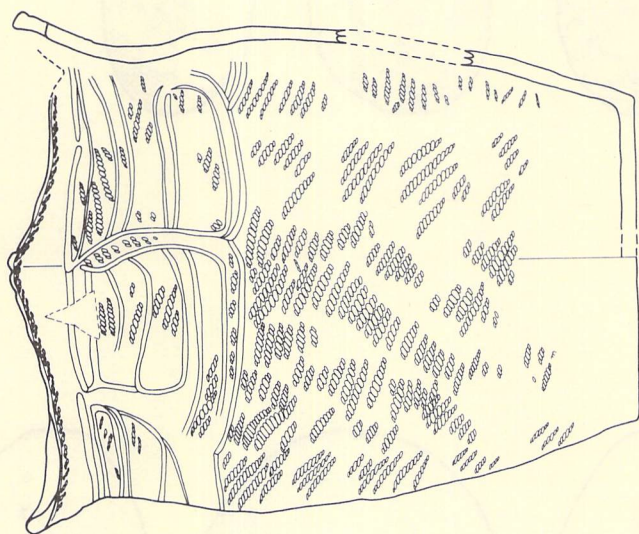
1



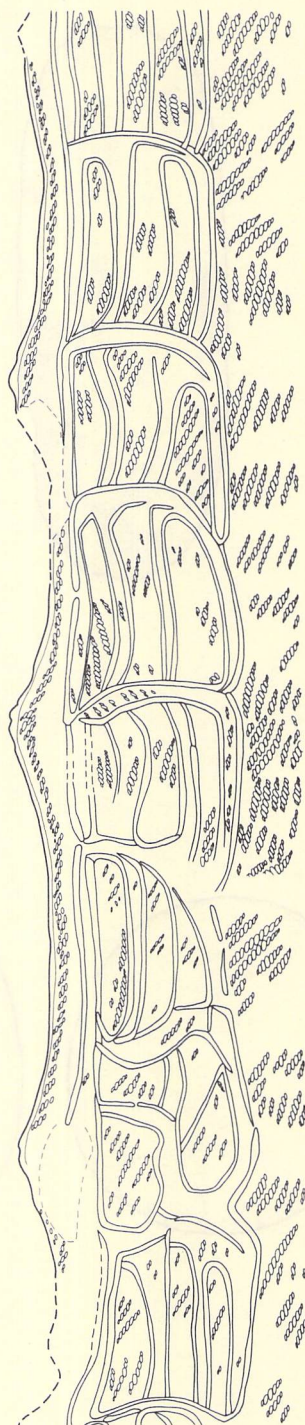
2



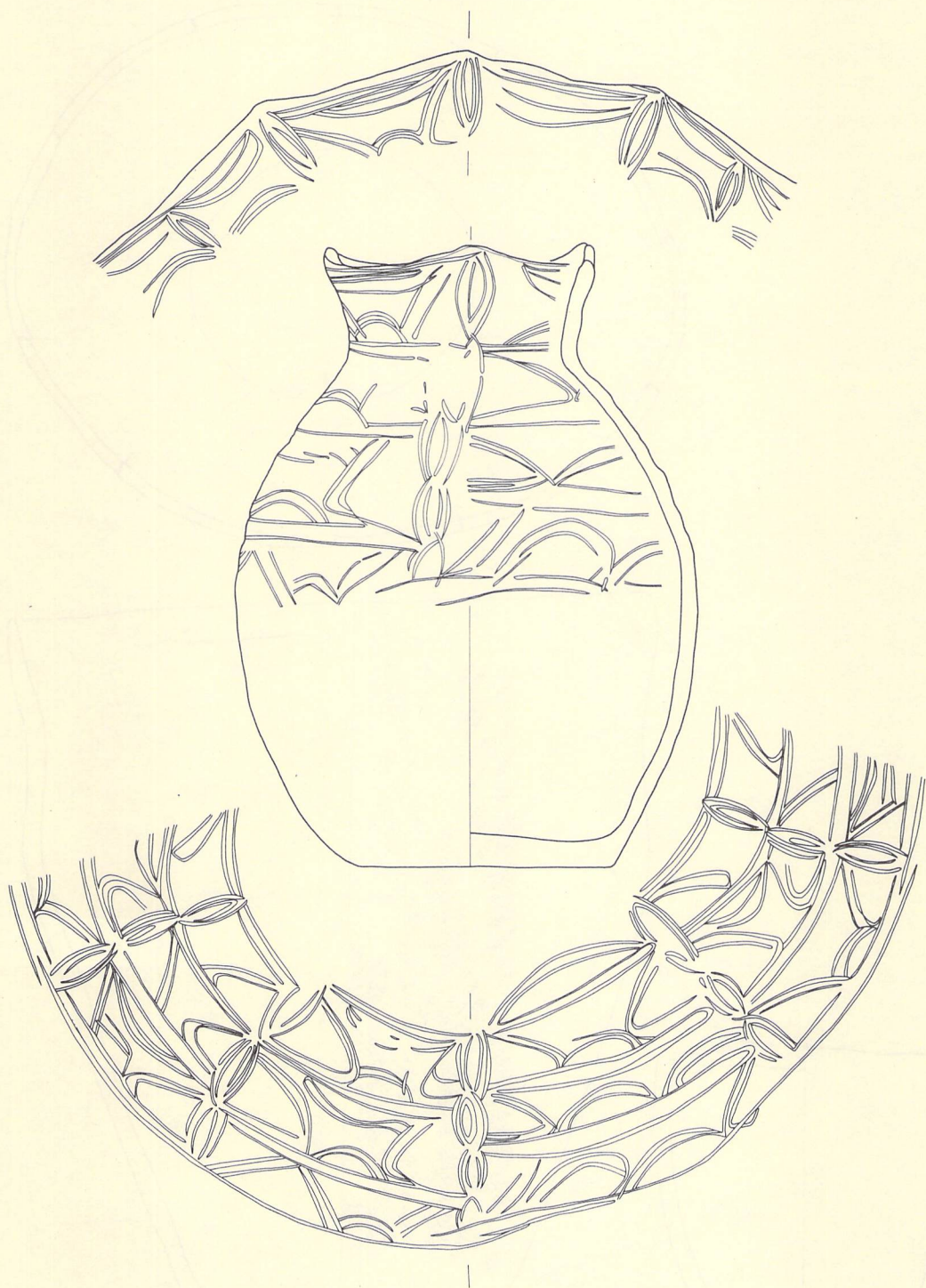
第22図 C J 20住居址出土遺物



0 5 cm

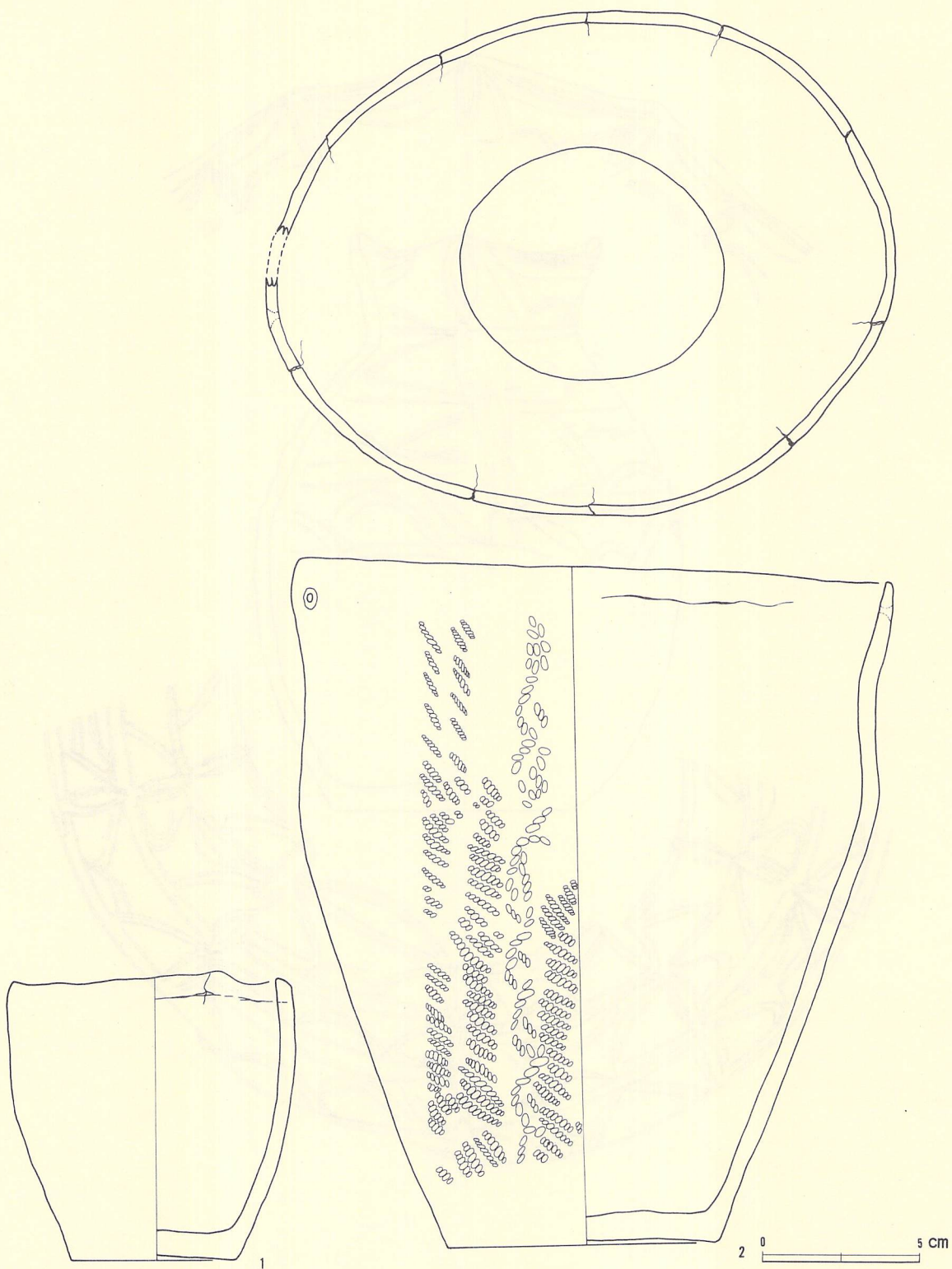


第23图 C J 20住居址出土遺物

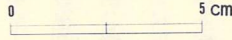
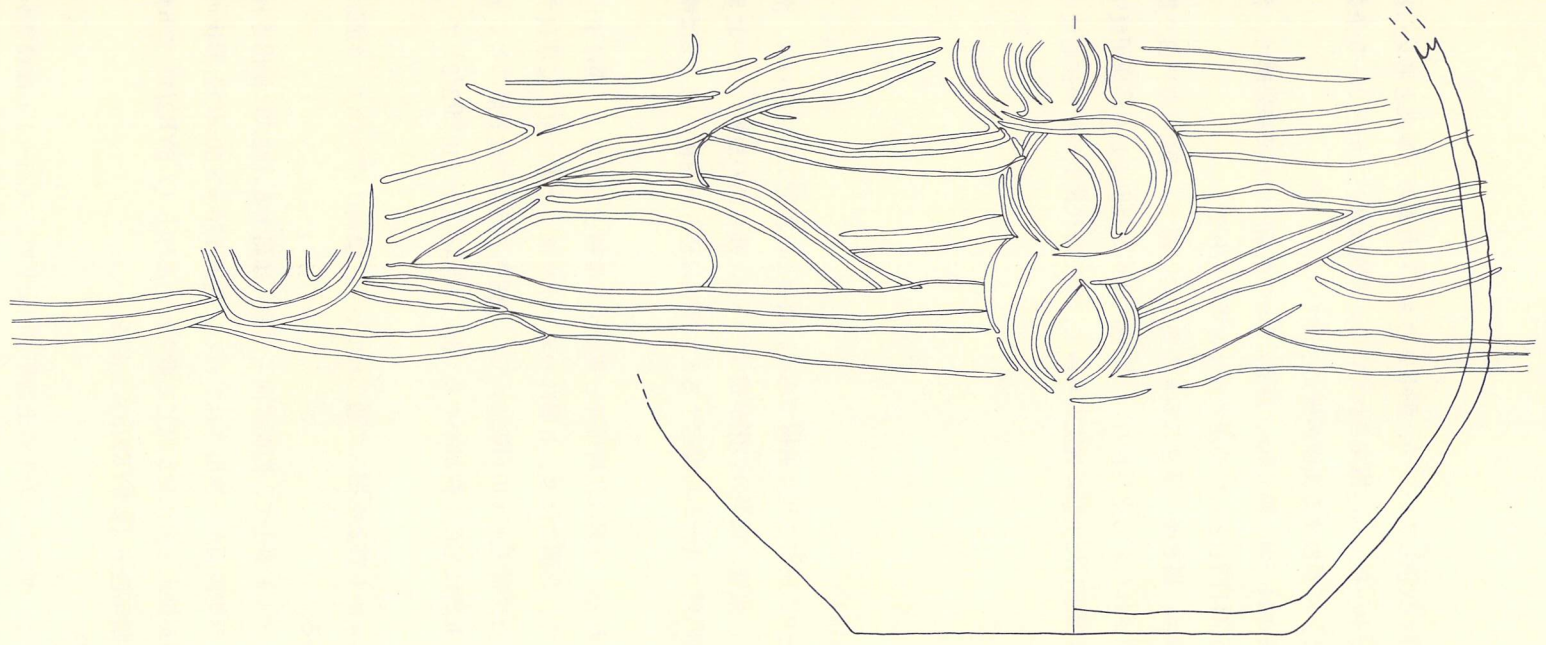


0 5 cm

第24図 C J 20住居址出土遺物



第25図 C J 20住居址出土遺物



第26図 C J 20住居址出土遺物

口縁部の周辺に多い。

(21-5)は上半部が欠損しているが、胴中央のふくらむ壺の下半部と考えられる土器である。文様は胴のふくらみから上部に施文されている。器面は磨いてから2～3条を単位にする沈線を用いて(21-2)に類似する文様が施文されている。

石器(22-1)は長さ14.5cm、幅5.5cm、厚さ4.2cmの長楕円状の閃緑岩礫で、各部に不規則な敲打痕があり、敲石又は凹石として使用されたと考えられる。

(22-2)は長さ9cm、幅8cm、厚さ5.5cmの安山岩円礫で、側面に敲打痕や擦痕があり、敲石や磨石として使用されたと考えられる。この他に礫が2点出土したが使用痕はない。

住居址の所属時期は出土した土器の施文からみて、縄文時代後期前葉の住居址と考えられる。

C J 20-2 住居址

遺構(第27図;第46図)

C J 20住居址の精査中に検出された遺構である。西半部は農道工事で削られ、南側は下方にある沢の浸食をうけて、東壁と東半分の床が残っている。残存部の規模は南～北5.6m、東～西3.0mであるが、壁の周り具合から推定すると、原状は径6m前後の円、又は楕円形の住居址と考えられる。

埋土は9層に細分される。b層は住居址外と連続する堆積土である。f層は小円礫の混じる黒褐色土(10YR2/2)で、北側ではg、h層にのるが中央部では床に接して堆積する。g層は褐色土粒や炭化物を含む黒褐色土(10YR2/2)で、北側壁の近くではh層にのるが、大部分は床に接して堆積する。h層は褐色土粒がやや多く混じる黒褐色土(10YR3/2)で、壁際に楔状に堆積する。

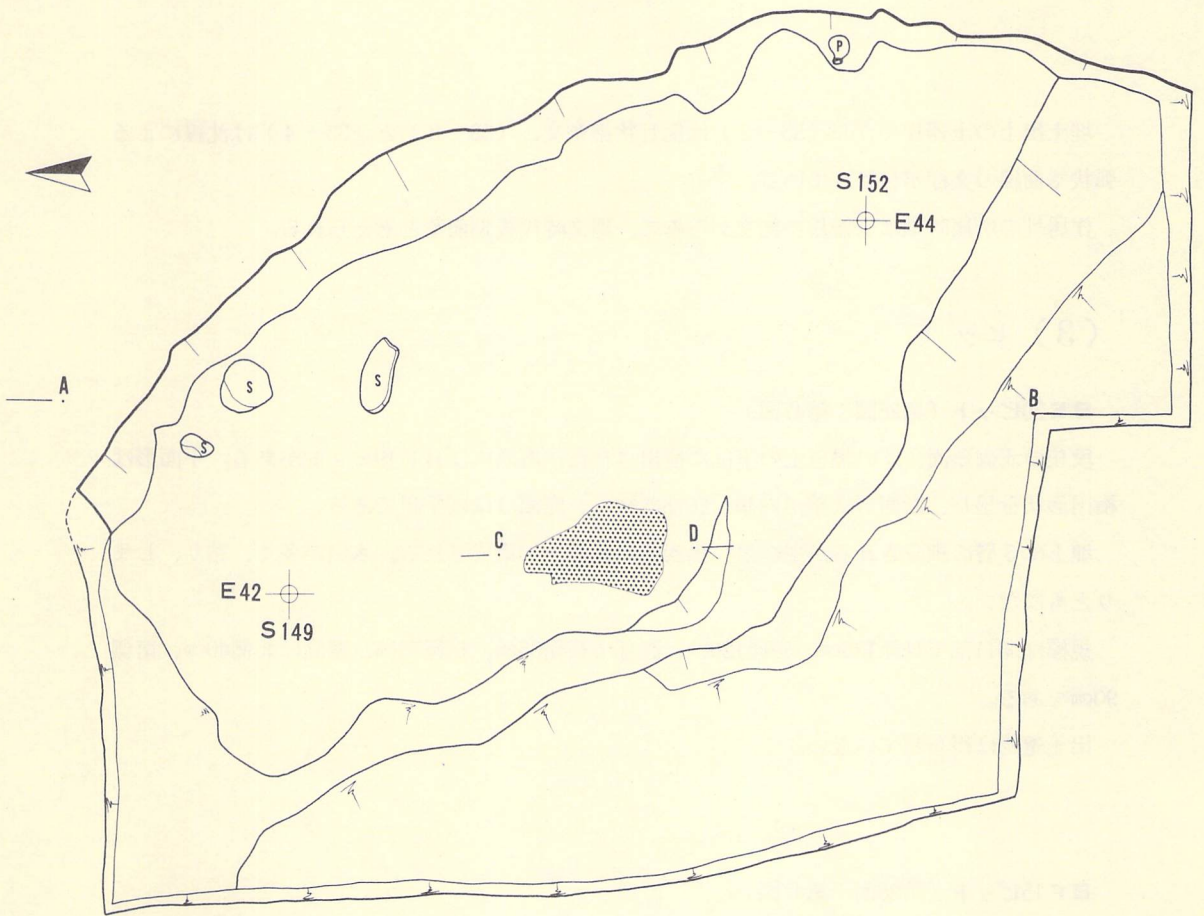
壁は礫が混じる褐色シルト質土を掘って造られている。壁高は約30cmで、勾配は50°前後あり外傾ぎみに立ち上がる。

床は礫の混じる褐色シルト質土で、西側に向って緩く傾斜する。柱穴は検出されていない。

炉は地床炉が1基、西側床面から検出されている。焼土は70cm×50cmの台形状の範囲にある。焼土の断面はa層が焼土と炭化物が混じる軟らかい黒色土(7.5YR2/1)でb層は少量の炭化物や小礫の混じる暗褐色土(2.5YR2/3)である。

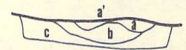
遺物(第33図;57図)

東壁際から壺が1点と、埋土から若干の土器片が出土した。(33-1)は頸部から口縁部が欠損している。胴中央部がふくらみ頸部に向ってすぼむ。器面は縦方向に磨かれているが、調整が粗雑で凹凸がある。文様は施されていない。

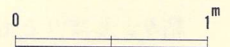
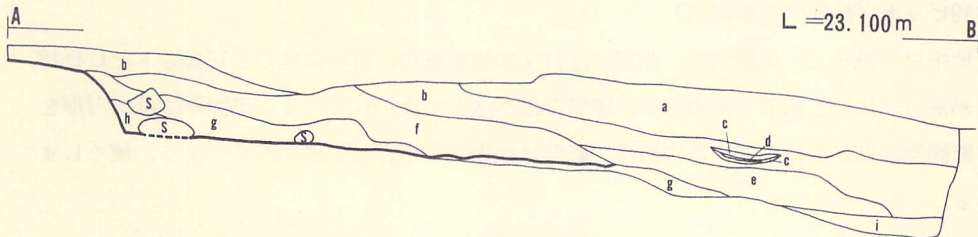


- a. 7.5 Y R 2/1 黒 焼土混入、やわく、若干の粘性あり。
- b. 7.5 Y R 2/1 黒 焼土、炭化物混入、やわく若干の粘性あり。
- c. 2.5 Y R 3/3 暗褐 焼土、少量の炭化物、3~4 cm ϕ の円礫混入、やわやか。
- d. 7.5 Y R 3/2 黒褐 柔く、粘りあり、下に円礫あり。

C L = 22.400 m D



- a. 10 Y R 4/4 褐 1~15 cm ϕ の円礫が多く混入する。粘性強、かなりしまっている。
- b. 10 Y R 2/3 黒褐 植物根多く混入する。1~5 cm ϕ の円礫も混入する。硬くしまり、粘りなし。
- c. 10 Y R 1.7/1 黒 炭化物を多く混入する。しまりなし、粘りなし。
- d. 10 Y R 7/1 灰白 灰層
- e. 10 Y R 2/2 黒褐 植物根混入、炭化物まばらに混入、ややしまり、粘りなし。
- f. 10 Y R 2/2 黒褐 植物根混入、2~3 cm ϕ の円礫混入、しまっている。粘りなし。
- g. 10 Y R 3/1 黒褐 褐色土粗粒混入、炭化物まばらに混入、ややしまり、粘りなし。
- h. 10 Y R 3/2 黒褐 褐色土粗粒、小ブロックがやや多く混入、しまり、粘りなし。
- i. 10 Y R 3/3 黒褐 褐色土粗粒混入、しまりなし、粘りなし。



第27図 C J 20-2住居址(平面、埋土断面、炉断面)

埋土出土の土器片のうち(33—2)は網目状捺糸文、(33—3)と(33—4)は沈線による弧状や曲線の文様が施されている。

住居址の所属時期は土器片の施文からみて、縄文時代後期前葉と考えられる。

(3) ピット

BE20ピット(第28図;第47図)

段丘の北側斜面、厚い黒色土の下位に検出された。南西にはBF19ピットがある。平面形は楕円形状を呈し、断面形は壁が内傾し底部に続く。底面はほぼ平坦である。

埋土は5層に細分されるが主に黒～黒褐色の砂質土で構成される。水気が多く、粘り、しまりともない。

規模は開口部で長径135cm、短径120cm、底部で長径85cm、短径70cm、壁高は北側40cm、南側90cmである。

出土遺物は得られていない。

BF15ピット(第28図;第47図)

段丘の北端にあり、表土直下で検出されている。南西にはBF19焼土遺構がある。試掘トレンチで南側を掘り過ぎているが平面形は円形を呈し、断面形は壁が内湾して底部に続く。底面は平坦で硬くしまっている。

埋土は黒褐色土で橙色の浮石質の小粒が混入している。しまり、粘りともない。

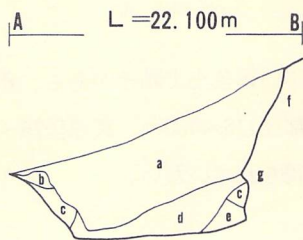
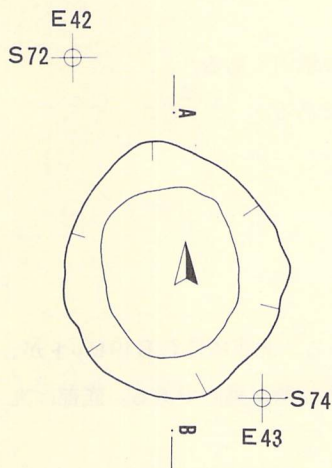
規模は開口部径165～170cm、底部径135～145cm、壁高は北側で35cmである。

出土遺物は得られていない。

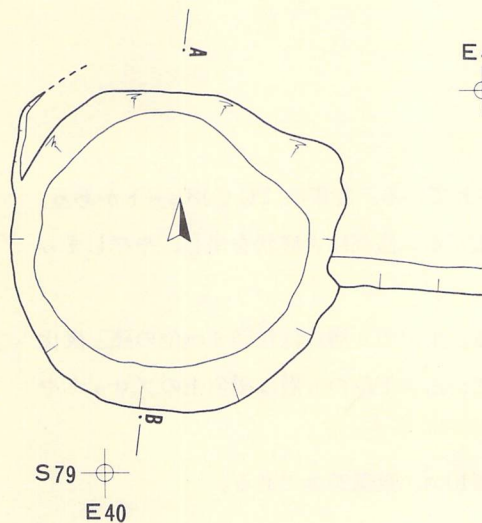
CB19ピット(第29図;第48図)

調査地中央の段丘上に位置する。北東にはBJ20住居址が、南西にはCC18ピットとCD18ピットがある。耕作土直下で検出され、礫層を掘り込んで築かれている。平面形はほぼ円形を呈し、断面形は壁が内傾して底部に続く。底部は地表面に平行して東側がやや高く、硬くしまっている。

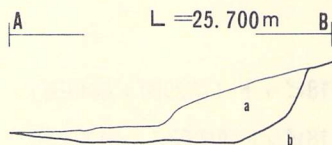
埋土は5層に細分される。上位のa・b層は黒褐色土である。a層は表土の一部と思われ、粘り、しまりともない。b層には粒径10cm位の円礫が混入し、しまっている。中位のc層は黒褐色の砂質土で粒径10cm位の円礫が混入し、しまり、粘性ともにある。下位のe層は暗褐色



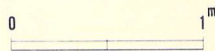
- a. 7.5YR1.7/1 黒 砂質で水分が多い、1~5mmφの橙色浮石混入。
- b. 10YR3/3 暗褐 砂質土、1~5mmφの風化した浮石状粒子混入
- c. 7.5YR3/2 黒褐 砂を含む、やわく、粘りなし。
- d. 7.5YR2/2 黒褐 水気多く、やわい。
- e. 7.5YR2/2 黒褐 水気多く、やわい。
- f. 7.5YR2/1 黒 浮石状の砂を含む、ややしまる。ねばりなし。(地山)
- g. 7.5YR4/4 褐 粘性大、ややしまる。(地山)



E42
S77



- a. 7.5YR3/2 黒褐 下位に橙色浮石状の小粒あり、比較的やわい。
- b. 7.5YR7/6 橙 硬くしまり、粘り強。(地山)



第28図 BE20ピット、BF19ピット(平面、埋土断面)

土、f層はにぶい褐色土で粘性がある。d層は掘り過ぎた部分で地山である。

規模は開口部径115～130cm、底部径75～80cm、深さ60～65cmである。

出土遺物は得られていない。

CC18ピット（第29図；第48図）

段丘上南側にCD18ピットと並んで耕作土直下に検出されている。北東にはCB19ピットが、南西にはCD18ピットがある。平面形はほぼ円形を呈し、断面形は壁が垂直である。底部は丸底でややしまっている。

埋土は黒褐色の砂質土からなり、2層に細分される。上位のa層は褐色土ブロックが混入し、b層は炭化物や杉の葉の腐植物が混入している。両層とも軟く、粘りが無い。

規模は開口部径65～70cm、底部径50～55cm、深さ20～30cmである。

出土遺物は得られていない。

埋土から杉の葉の腐植物が出土したことから、このピットは最近使用された[△]室のような施設の可能性がある。

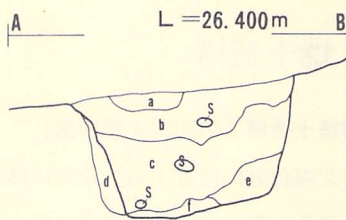
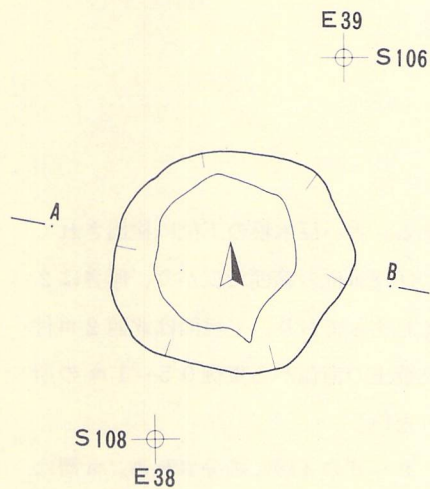
CD18ピット（第29図；第48図）

CC18ピット同様段丘の南側の耕作土直下に検出されている。北東にはCC18ピットがある。平面形は円形を呈し、断面形は壁の下位の方が少し広がる。底部は丸底状を呈し、ややしまっている。

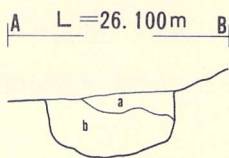
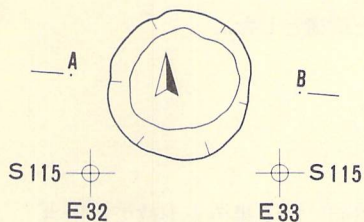
埋土は黒褐色の砂質土からなり、2層に細分される。上位のa層には粒径3cm位の礫と炭化物が混入し、焼土もまばらに含まれ、比較的しまっている。下位のb層は褐色土のブロックや炭化物が混入し、しまりは無い。

規模は開口部径75～80cm、底部径55cm、壁高は西側10cm、東側20cmである。

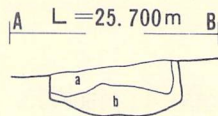
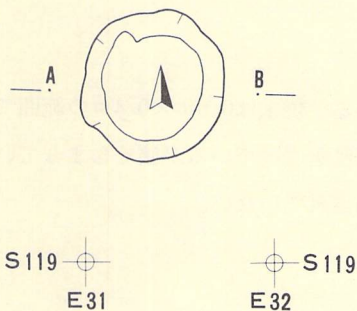
出土遺物は得られていない。



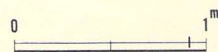
- | | | |
|-------------|------|----------------------------|
| a. 7.5YR3/2 | 黒褐 | ねばり、しまりなし。 |
| b. 7.5YR3/1 | 黒褐 | 10cm位の円礫混入、しまっている。粘りなし。 |
| c. 7.5YR3/1 | 黒褐 | 砂質土10cm位の円礫混入、しまっている。粘性あり。 |
| d. 7.5YR4/3 | 褐 | 粘性強、しまっている。(地山) |
| e. 7.5YR3/3 | 暗褐 | 粘性強、ややしまっている。 |
| f. 7.5YR5/4 | にぶい褐 | 褐色土混入、粘性強。 |



- | | | |
|-------------|----|--------------------------|
| a. 7.5YR3/2 | 黒褐 | 砂質土、褐色土ブロックが混入、やわく、粘りなし。 |
| b. 7.5YR3/2 | 黒褐 | 砂質土、炭化物少量混入、やわく、粘りなし。 |



- | | | |
|-------------|----|---------------------------------|
| a. 7.5YR3/1 | 黒褐 | 砂質土、植物根混入、3cmの小礫混入、比較的硬くしまっている。 |
| b. 7.5YR3/2 | 黒褐 | 砂質土、炭化物混入する。しまり、粘りなし。 |



第29図 CB19ピット、CC18ピット、CD18ピット
(平面、埋土断面)

(4) 焼土遺構

BF19焼土遺構 (第30図；第49図)

段丘の北端付近に位置する。北東にはBF19ピットがある。古い巨木根の下位に検出されているため攪乱を受けている。焼土は所々分断するが2.9m×0.8m位の範囲で広がり、厚さは2～10cmで硬くしまっている。焼土の周囲はほぼ平坦で硬くしまっており、平坦面は北西2m付近まで続く。北西端には扁平な礫が2個認められる。また焼土の南側から東側0.5～1mの所には低い壁が北側まで巡っている。柱穴や周溝は認められない。

焼土面より上位の埋土は主にしまりのない黒褐色土で、a～dの4層に細分される。a層は表土層で植物根が多い。b層には植物根と炭化物がまばらに含まれる。c層には炭化物が含まれる。d層は焼土の直上の土層で炭化物を5～7%含み、ややしまっている。

出土遺物は得られていない。

当遺構は一部に壁が巡るので住居址の可能性も考えられたが、壁は焼土の近くだけを取り囲むように配置していることや柱穴等が検出されなかったので焼土遺構とした。

BF21焼土遺構 (第31図；第49図)

段丘の北端に位置している。西側にはBF19ピットがある。斜面に続く黒色土上位で検出され、円礫が数個混入している。焼土は1m×0.6m位の範囲で不整形に広がっている。厚さは最大10cmである。焼土の周囲は特に平坦でもなく、しまりもない。柱穴は検出されていない。出土遺物として土師器の小破片が得られている。

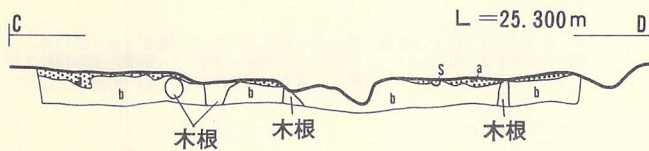
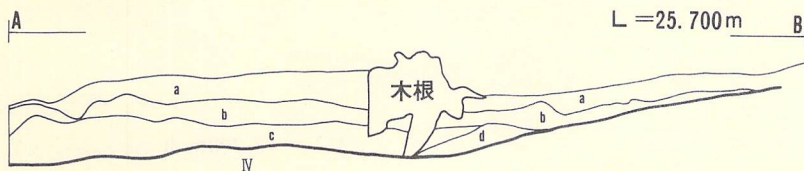
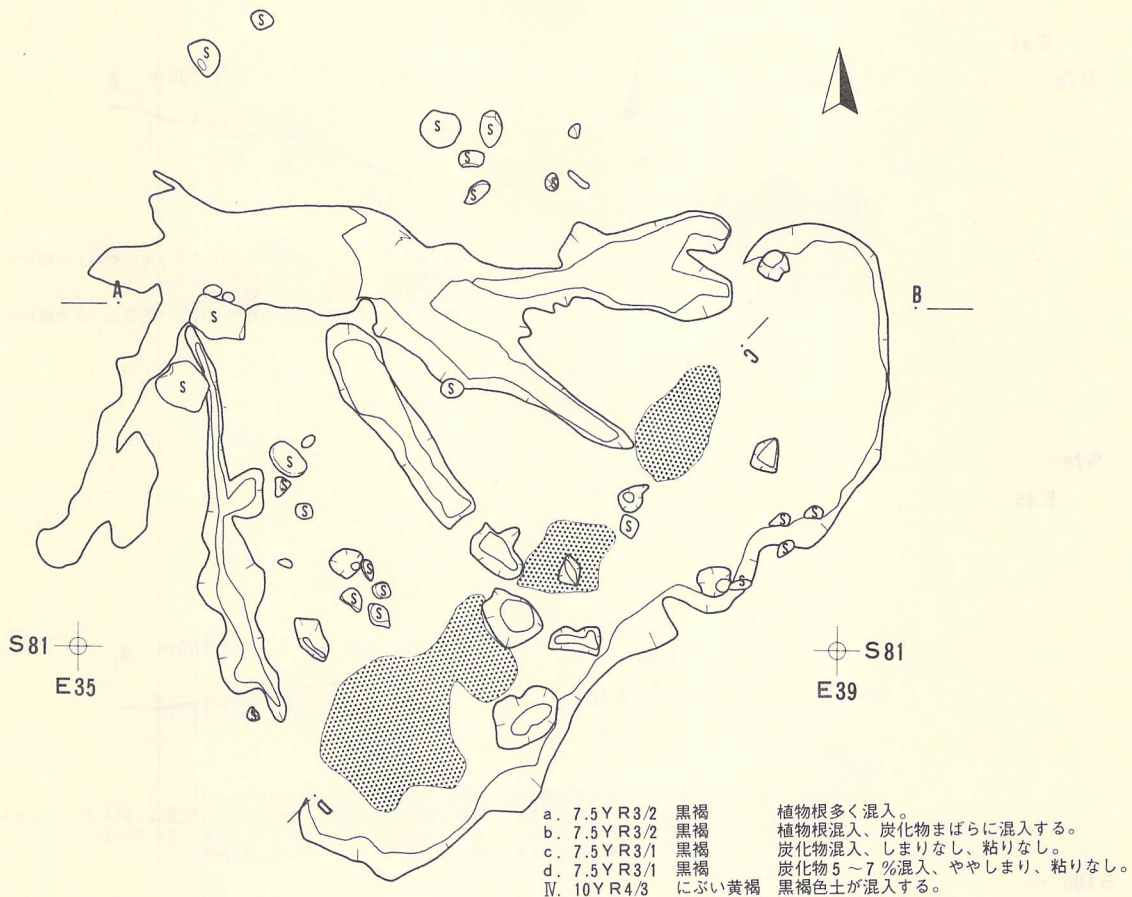
CB17焼土遺構 (第31図；第50図)

段丘西側の厚い黒色土の下位の褐色土上面で検出されている。焼土は0.6m×0.4mの範囲で不整形に広がり、厚さは5cm位である。一部に木根による攪乱を受けているが硬くしまっている。周囲に柱穴や壁等住居址を予測させるような施設は検出されていない。

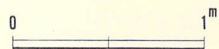
出土遺物は得られていない。

DA21焼土遺構 (第31図；第50図)

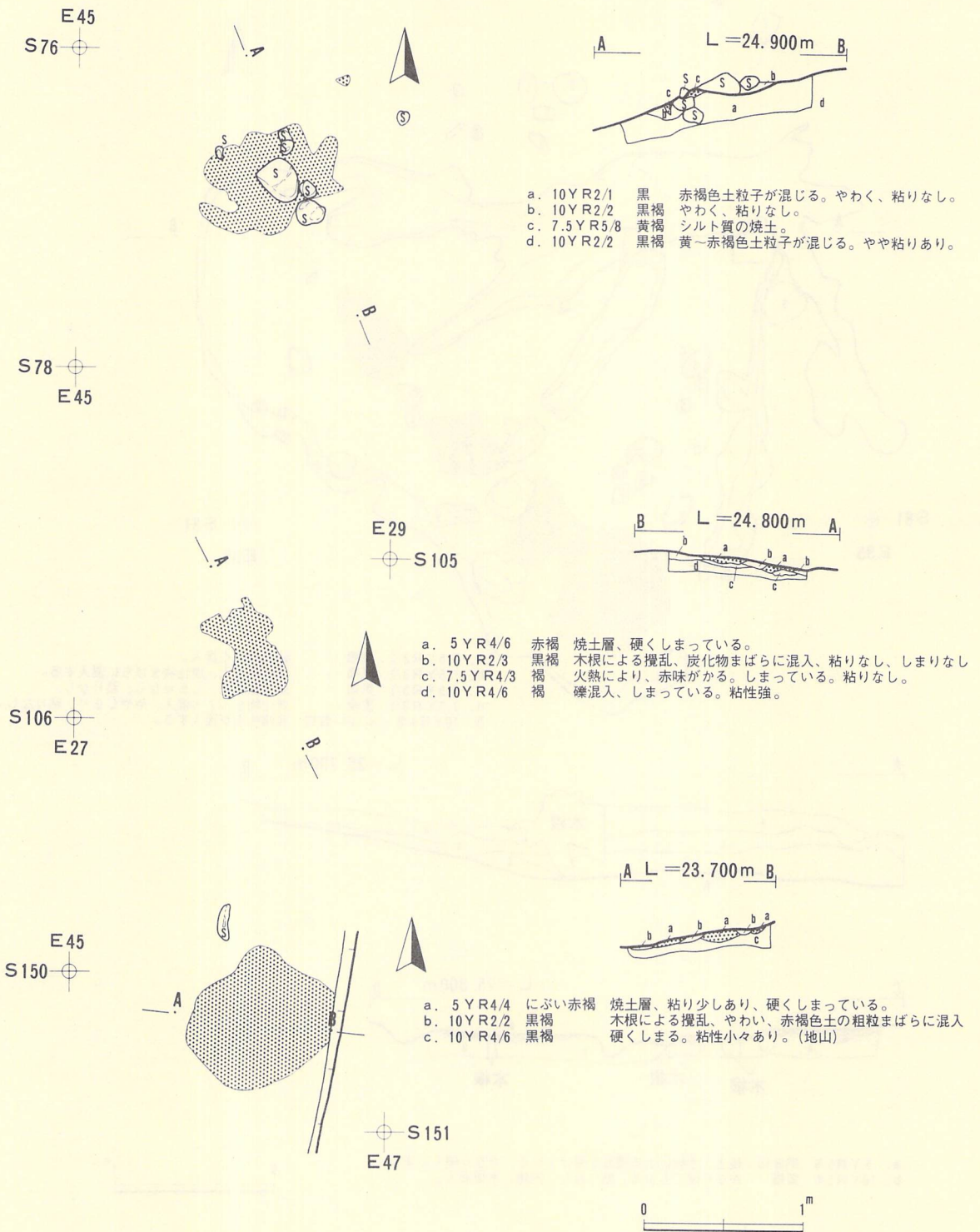
調査地の南端付近、C J 20—2住居址の西側に検出されている。調査時には大木の根株があり、遺構の一部は攪乱を受けている。焼土は1m×0.7mの範囲で不整な楕円形状に広がる。



- a. 5YR5/6 明赤褐 焼土、木根による攪乱を受けている。かなり硬くしまる
 b. 10YR5/6 黄褐 かなり硬くしまる。粘りなし、円礫、木根混入。



第30図 BF19焼土遺構(平面、断面、埋土断面)



第31図 BF21焼土遺構、CB17焼土遺構、DA21焼土遺構(平面、断面)

厚さは5～10cmである。焼土は硬くしまっており、少し粘性がある。周囲に柱穴や周溝等は検出されていない。

出土遺物は得られていない。

(5) 遺構外の出土遺物

遺構外の出土遺物としては縄文土器片・石器・土師器片・陶器片・古銭が得られている。

縄文土器片 (第32図；第59図)

縄文土器片は調査区のほぼ全域から出土している。量的には段丘上の畑地から得られたものが多く、総量は9号ポリ袋に1袋分位である。粗製土器片が多い。精製土器は縄文時代後期と晩期のものが得られている。

1は口唇部に平行する沈線と沈線間を蛇行して垂下する沈線による施文がなされている。地文は単節斜縄文である。2は口唇部に平行する沈線が2条巡っている。地文は単節斜縄文である。3～5は同一個体と思われる破片で、無文部に平行沈線による曲線文が施文されている。6・7は胴部破片で単節斜縄文が施文されている。8は口唇部に平行な太い沈線が4条巡っている。地文は単節斜縄文である。9～12は口唇部に平行な沈線が外面に3条と内面口唇部直下に1条巡っている。10・11の2条目の沈線上には小さな粘土塊が2個1単位になって貼り付けである。13には平行沈線が3条施文されている。

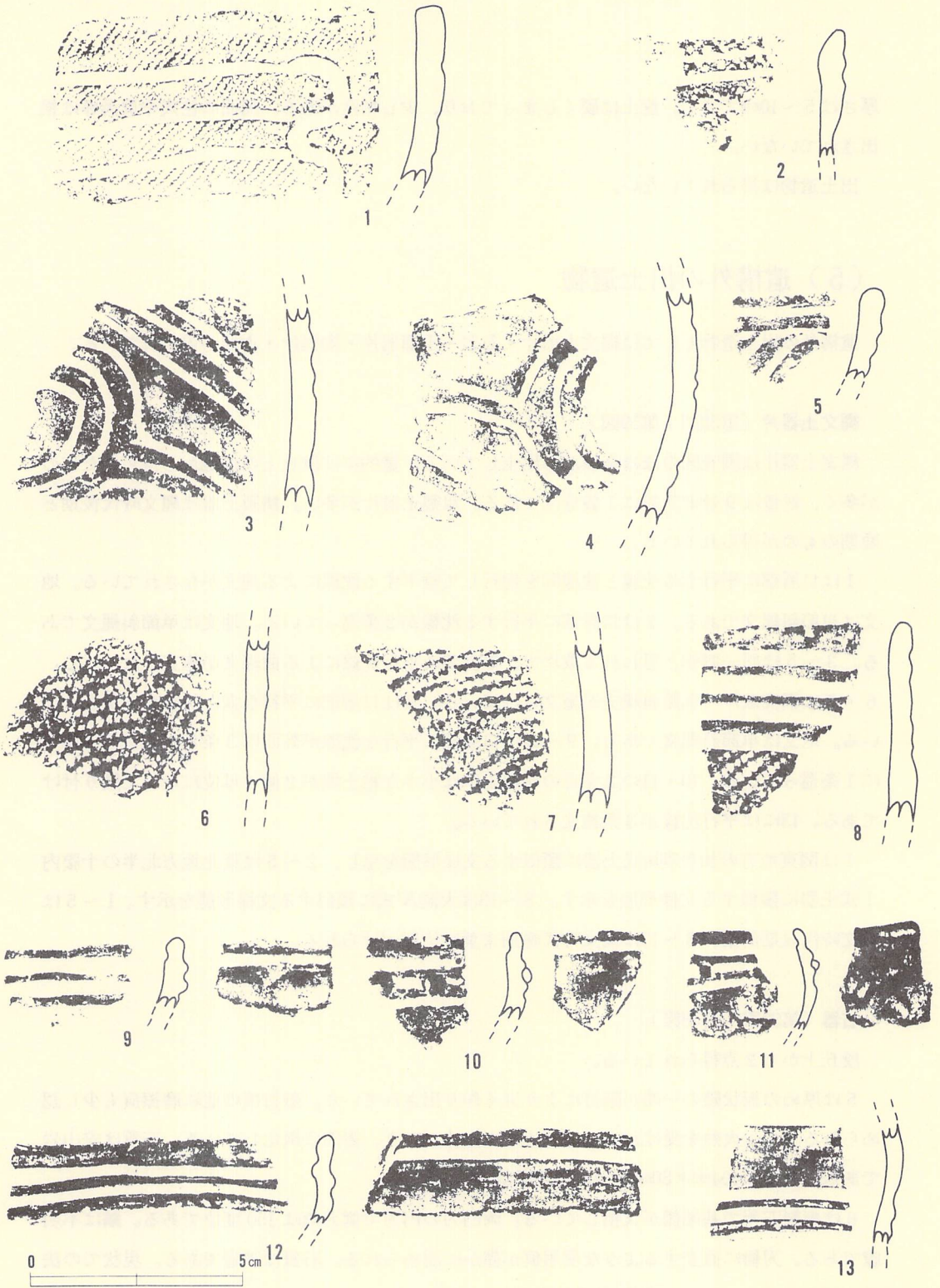
1は関東地方の加曽利₂式土器に類似する文様形態を呈し、2～5は東北地方北半の十腰内I式土器に類似する文様形態を示す。8～13は大洞A'式に類似する文様形態を示す。1～5は縄文時代後期前葉、8～13は縄文時代晩期末葉に位置づけられる。

石器 (第33図；第58図)

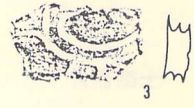
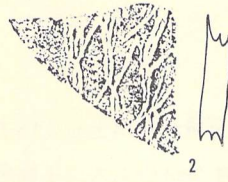
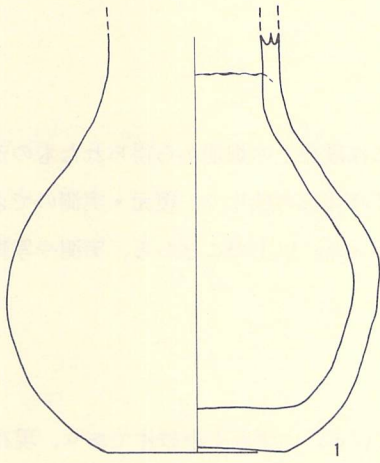
段丘上から2点得られている。

5は厚めの板状礫の一端が敲打により丸く作り出されている。敲打痕の他に磨擦痕も少し認められる。多少火熱を受けたようでいくぶん赤味がかかり、表面は風化している。石質は安山岩である。法量は104mm×80mm×51mm、重量545gである。

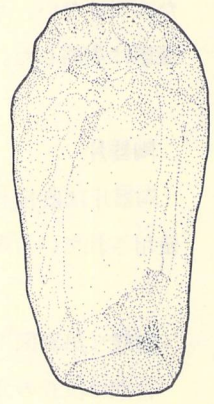
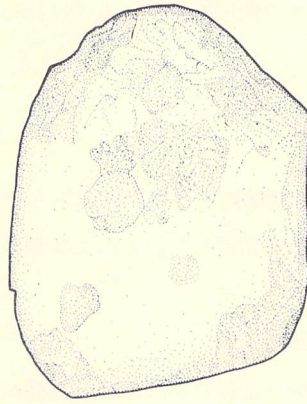
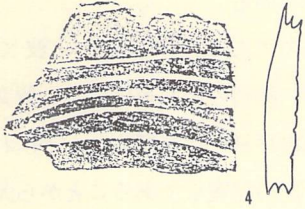
6は磨製石斧で基端側が欠損している。両凸刃の円刃で側刃角は150度位である。鑄は不明瞭である。刃縁に直交するような使用痕が僅かに認められる。石質は砂岩である。現状での法量は85mm×41mm×30mm、重量150gである。



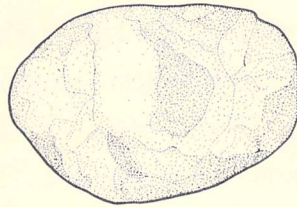
第32图 遺構外出土遺物(縄文土器片)



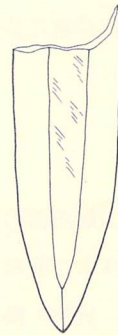
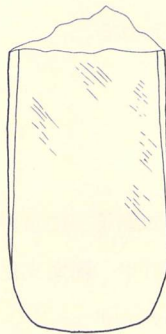
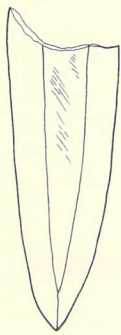
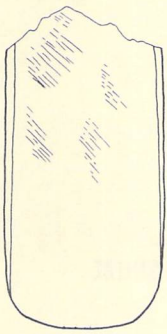
(C J 20-2住居址)



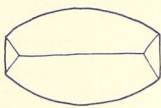
5



(遺構外)



6



(遺構外)

0 5 cm

第33図 C J 20-2住居址、遺構外出土遺物

土師器片

土師器片は調査区のほぼ全域から出土している。量的には段丘上の畑地から得られたものが多く、総量で9号ポリ袋に1袋分位ある。土師器片の多くは体部の破片で、復元・実測のできたものはない。ロクロの使用痕のあるものは認められなかった。以上のことから、実測や写真撮影は省略した。

陶器片

陶器片は段丘上の開墾跡地と北側斜面から3片得られている。いずれも小破片であり、現在使用されている陶器類に類似しているので実測や写真撮影は省略した。

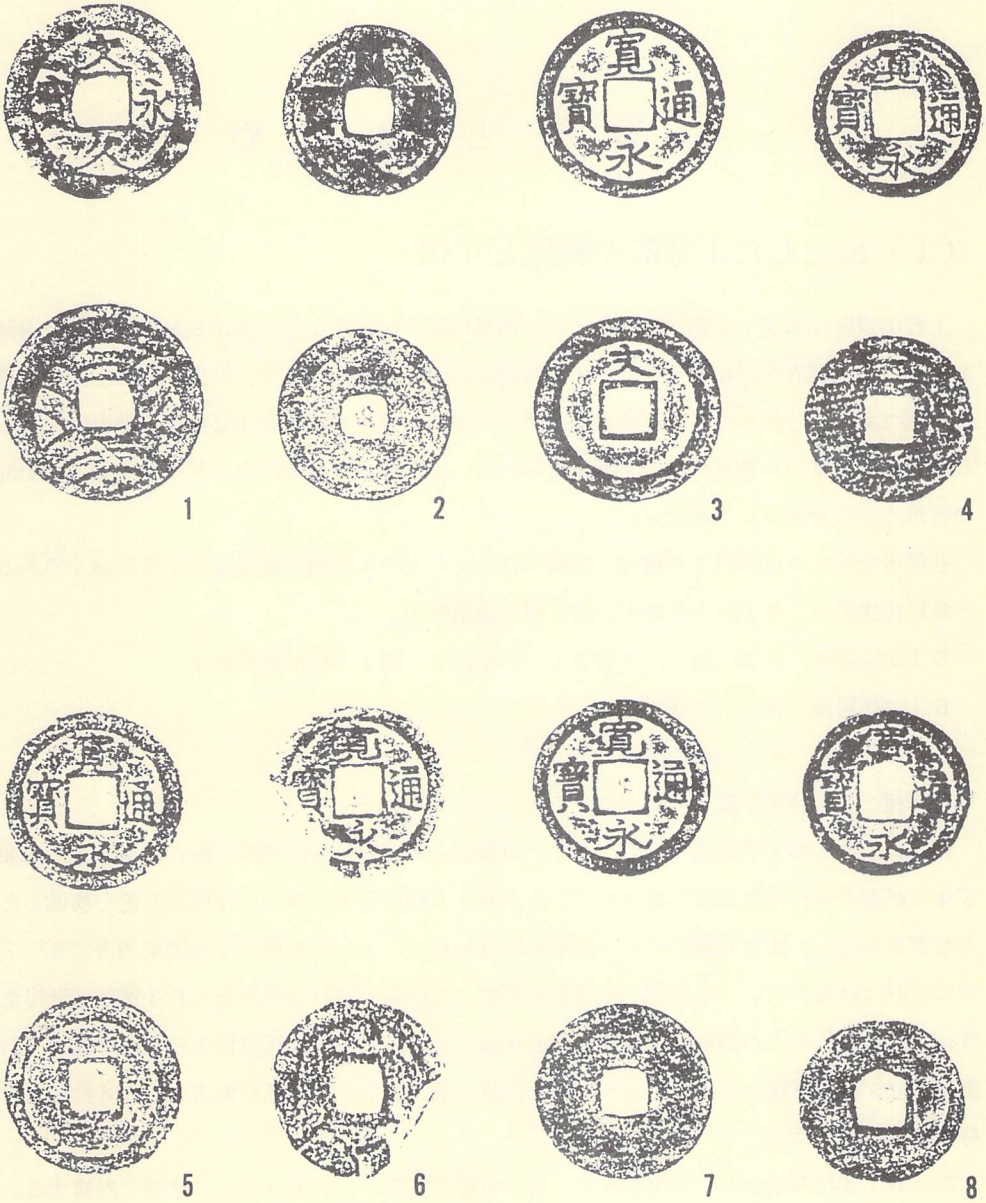
古銭（第34図；第60図）

古銭は段丘の北端から北側斜面にかけた範囲から8点得られている。

1は文久永宝当四文銭で、文久三年（1863）に鑄造されたものである。背文は十一波である。2～8は新寛永通宝銅一文銭である。2は明和四年（1867）鑄造の肥前長崎銭で、背文は「長」の字である。3は寛文期（1661～1673年）に鑄造された亀戸銭で「文寛永」と呼ばれるものである。背文は正字の「文」である。4・6は寛の字が「虎の尾寛」であることから元文元年（1737）鑄造の深川十万坪銭と思われる。5は通の字が「マ頭通」であることから元文二（1738）年鑄造の藤沢銭と思われる。7は永の字が「外ハネ」であることから元文三年（1739）鑄造の出羽秋田銭である。8は孔が梅穿状となっているが本来は方穿であり、享保期（1716～1736年）に鑄造された江戸猿江銭と思われる。

参考文献

- 鈴木道之助 1981年 図録石器の基礎知識Ⅲ 柏書房
加藤晋平 小林達雄 藤本 強編 1981年 縄文文化の研究第4巻 雄山閣出版
青山礼志編 昭和49年 貨幣手帳 ボナンザ
陸原 保編 昭和50年 東洋古銭価格図譜 万国貨幣洋行



第34圖 遺構外出土遺物(古錢)

4. 考察とまとめ

(1) 出土した土師器の特徴と年代

上野山遺跡は本文でも述べているように西側に張り出す段丘上に広がると予測される遺跡であるが、発掘調査を行なったのはバイパス建設にかかる部分のみで、検出された土師器の遺構も4棟である。しかもその4棟は破損を受けており、カマドの残存するのは1棟だけである。しかし各住居址から数点ずつの遺物が得られているので、少量ではあるがそれをもとに土師器の特徴や年代を検討してみたい。

各住居址出土の遺物のうち復元・実測の行なえたものの器種と数量は以下のとおりである。

B H18住居址 坏1、大型甕1、他に琥珀製遺物1

B J20住居址 坏2、碗1、大型甕1、小型甕2、甑1 他に甕底部1

B J21住居址 坏1、大型甕1

C E19住居址 坏1、小型甕1

各器種ごとの特徴は以下ようになる。

坏は丸底のものと平底風のものがあり、口縁部と体部の境界に明瞭な段がある。主に内面が丁寧に研磨され、黒色処理が施されている。B J21住居址出土の坏は須恵器の蓋を模倣したような器形を呈し、体部外面はハケメ調整が行なわれている。この器形は北関東地方で6～7世紀に位置づけられている鬼高期の土師器に類似している。B H18住居址とB J20住居址出土の坏は大きさが異なるが器形および器面調整が似ている。C E19住居址出土の坏は平底風で口縁部が直立ぎみに外傾して立ち上がり、段の位置は低い。これは宮城県地方出土の8世紀前半の坏の器形に類似する。

碗はB J20住居址から1点得られている。口径と器高の比は小さく、口縁部は内湾する。口縁部と体部の間に小さな段がある。器面調整は外面ハケメ、内面ナデで黒色処理は行なわれていない。

甕は器高15cm未満の小型のものと、器高23～27cmの大型のものに分かれる。

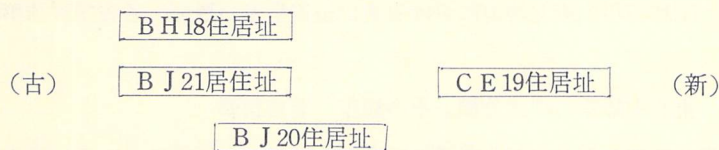
小型の甕は3個体あり、B J20住居址とC E19住居址から出土しており、遺構によって器形や器面調整が異なる。B J20住居址の甕は体部が丸味を帯び、口縁部は外反する。頸部に小さな段があり、底部は欠損している。器面調整は内面ハケメ、外面ミガキである。C E19住居址の甕は頸部に明瞭な段を持ち、体部から口縁部までほぼ外傾して立ち上がる。底部は少し張り出し、木葉痕がある。器面調整は内外ともナデである。

大型甕はB H18住居址、B J20住居址、B J21住居址から出土している。いずれも長胴形を

呈し、体部上位に最大径を持つ。底部は少し張り出し、木葉痕がある。B H 18住居址とB J 21住居址出土の甕は器形や調整技法が類似している。口縁部は外反していたものを指で内側に押し内湾させた痕がある。器面調整は内外ともにハケメである。B J 20住居址出土の甕は他の二つの甕より器型が小さく、頸部の段も小さく、口縁部がやや外反している。口縁部の一部には指で内側に押し内湾させたような痕がある。器面調整は外面ナデ、内面ハケメである。

甗はB J 20住居址出土の1点のみで、無底の鉢形を呈している。器面調整はハケメで粘土紐の積み上げ痕が残る。

このように数少ない資料の比較ではあるが、各住居址間の時間的關係は次のようになると思われる。B H 18住居址とB J 21住居址は大型甕が類似することから同時期。B J 20住居址とB H 18住居址は坏の一部が類似するが、他の遺物の器形や器面調整が異なり、B J 20住居址の方が段も小さいことから、いくらか新しい。C E 19住居址は他の3棟に較べ坏も甕も形態が異なる。甕の器面調整が丁寧なことや坏の器厚が薄いことから他の3棟よりも新しい。



B H 18住居址・B J 21住居址・B J 20住居址の3棟から出土した土師器の共通する特徴は、粘土紐の積上痕が残っていることとハケメ調整が行なわれていることである。

C E 19住居址も含めた4棟の出土遺物の共通する特徴は次のようになる。坏は丸底が多く、内面黒色処理がなされ、体部と口縁部の境界に明瞭な段がある。甕は底部が張り出し、木葉痕があり、ハケメ調整が多用されている。

これらの土師器の特徴は東北地方南半で7世紀に位置づけられている栗罎式土器に類似する。しかし栗罎式土器の特徴である坏の口縁部と体部の境界にある内外に対応する段は、上野山遺跡出土の坏では内面の段は明瞭ではない。

またC E 19住居址出土の遺物は久慈市宇部町の上新山遺跡出土の8世紀後半とされている遺物に坏・甕ともに類似している。なお上新山遺跡では畑地から8世紀始めから9世紀にかけて用いられたという蕨手刀が出土している。しかも、この坏の形態は宮城県の新井時代前半に位置づけられている土器とも類似する。

一方、久慈地方は我国最大の琥珀産地であり、畿内の6世紀の古墳から出土した琥珀玉と久慈産琥珀原石が一致するという分析結果が得られており、当時久慈地方と畿内との間に物資の交流があったことが窺える。琥珀については別項に詳しく述べるが、B J 21住居址から出土した須恵器模倣土器はそういう琥珀の流通に伴う文化の交流を裏付ける資料の一つと考えられる。

上野山遺跡出土の土師器の年代は栗田式土器と較べると特徴に多少の違いがあるが、その違いは地方色の範囲での違いと考えればほぼ同時期とすることが可能と思われる。また蕨手刀を出土した上新山遺跡の第1号住居址の年代も同様にいくらか遡ると考えられる。

以上のことから、上野山遺跡の今回調査した土師器住居址の年代は7世紀末から8世紀前半にかけての時期に位置づけられそうである。

参考文献

- 草間俊一 昭和40年 堀野遺跡 岩手県福岡町教育委員会
- 工藤哲司 昭和57年 栗遺跡 仙台市文化財調査報告書第43集 仙台市教育委員会
- 東北学院大学考古学研究部 昭和54年 仙台市中田町栗遺跡発掘調査報告書、仙台市文化財調査報告書第14集 仙台市教育委員会
- 工藤雅樹 桑原滋郎 昭和47年 東北地方における古代土器生産の展開 考古学雑誌第57巻第35号
- 氏家和典 昭和32年 東北土師器の型式分類とその編年 歴史14輯
- 桑原滋郎 1976年 東北地方北部および北海道の所謂第1型式の土師器について、考古学雑誌第61巻第4号
- 沼山源喜治 1978年 歴史時代土器の研究Ⅰ—東日本における土師器編年—東北北半部— 歴史時代土器研究会
- 瀬川司男 佐々木 勝 昭和51年 山屋敷遺跡発掘調査報告書—久慈市文化財調査報告書第1集 久慈市教育委員会
- 瀬川司男 島 隆 昭和54年 上新山遺跡発掘調査報告書—久慈市文化財調査報告書第3集 久慈市教育委員会
- 岩崎卓也 昭和45年 大谷口—松戸市大谷口小金城跡発掘調査報告—松戸市文化財調査報告第2集 松戸市教育委員会
- 石井昌国 昭和41年 蕨手刀 雄山閣出版
- 石附喜三男 昭和49年 北方の古代文化 毎日新聞社
- 石岡・浅野 1981年 六反田遺跡 岡部町六反田遺跡調査会
- 佐藤武雄 金刺伸悟 昭和51年 夏見台（第2次）船橋市教育委員会

(2) 坏底部の粳圧痕

B J 21住居址出土の須恵器模倣土師器の底部に粳と思われる圧痕が1箇所検出された。東北農業試験場奈良正夫氏に見ていただいた結果、一見粳に似ており9割方粳の可能性はあるが、原米の可能性もあるとの御意見を戴いた。粳圧痕の大きさは4.5mm×2.5mmで国内出土の粳圧痕の一般的な大きさで、ラウンドタイプのジャポニカ種に相当する。栽培されていたとすれば陸稲の可能性が大きく、また赤米であったろうとのことである。

粳圧痕であったとしても原米の圧痕であったとしても7～8世紀の久慈地方に米があった可能性は高い。また、住居址からは食物を蒸す器である甑が出土している。甑は稲作の始まった弥生時代から使用され始めた器で、稲作・米食の普及と密接な関係にある。上野山遺跡で甑を出土した遺構は現在のところ1棟のみであるが、この1棟は他の住居址に較べて特別な構造を呈するものではない。遺跡の主体は調査区の東に広がっていることも考えられ、今後の調査によっては粳圧痕や炭化米についての資料が増加すると思われる。

久慈地方は現在でもヤマセの常襲地帯であり、米作は必ずしも容易ではない。果して7・8世紀のこの地方で稲作が行なわれたかどうか疑問であるが今後、古代の水田址あるいは畑址、稲倉に相当するような建物址、貯蔵穴等の検出されることを期待したい。

参考文献

- 佐藤敏也 昭和46年 日本の古代米 考古学選書Ⅰ 雄山閣出版株式会社
渡辺忠世 昭和52年 稲の道 日本放送出版協会
篠田 統 昭和52年 米の文化史 社会思想社
八幡一郎 昭和53年 稲倉考 考古民俗叢書<16> 慶友社
八幡一郎 昭和47年 日本文化のあけぼの<日本歴史叢書20> 吉川弘文館
安田喜憲 昭和55年 環境考古学事始 日本放送出版協会

(4) 縄文時代住居址出土の土器

縄文時代の遺構出土の土器については、個別に遺構の欄で記述し、後期前葉に属する土器としたが、ここでは文様の特徴や器形の形状から、土器型式について考察し、全体的なまとめをしたい。

完形品と半完形品は7点出土した。遺構ごとの出土数は、C I 20住居址1点、C J 20住居址5点、C J 20—2住居址1点である。これらの土器を施文の技法で分類すると下表のようになる。

類	施文の技法	器形	出土遺構名
1	沈線だけで文様を施したもの	a) 壺(波状口縁) b) 壺(上半部欠損)	C J 20住居址
2	地文が斜縄文で沈線で文様を施したもの	深鉢(波状口縁)	C J 20住居址
3	沈線で区画し磨消縄文を施したもの	浅鉢(波状口縁)	C I 20住居址
4	斜縄文を主とし綾絡文を加えたもの	深鉢(平口縁)	C J 20住居址
5	無文のもの	a) 鉢(平口縁) b) 壺(口縁部欠損)	C J 20住居址 C J 20—2住居址

1～3類には文様が施され、土器の型式を考察するには適当な資料である。1類の文様構成はa・b共に類似のもので、文様は胴中央部から上に施され、2～3条の弧状や平行沈線を用いて縦や横方向に連続させて構成している。2類は文様が上半部に施され、文様構成は1類に類似するが、1類よりも単純な文様である。3類は1、2類と異なり文様の主体は下半部において磨消縄文が施され、文様構成には横に連続する「T」状の文様が用いられている。

東北北部の後期前葉の土器型式としては十腰内I式があげられるが、十腰内I式は近年になって研究者により細分の試みが行なわれている。成田滋彦は、〈青森県の土器(縄文文化の研究、雄山閣、1981)〉で、後期初頭から中葉の編年を概観している。そのなかの諸型式で、本遺跡の土器1、2類が類似する型式は、十腰内I a式であろう。

十腰内I a式の特徴を成田の文から要約すれば、「器形の変化が多く見られるが主体は深鉢型。深鉢型の形状は口頸部がくびれ、胴部が張り出す。口縁部は平口縁と小波状口縁。文様要素は沈線、多条沈線、貼付文、磨消縄文等であるが沈線文様が多い。文様構成は波状入組文を横位方向に展開するのが特徴。」とある。1、2類と比較すると、深鉢の形状や、深鉢と壺の文様に沈線又は多条沈線が用いられていることは類似しているが、文様構成は1、2類では波状入組文よりも単純で素朴な文様が施されている。このような文様構成の相違は、あるいは地域的な違いとも考えられるが、現在は資料も少なく比較検討は今後の課題である。

土器一覽表

No.	器形	出土地	大 き さ (cm)			色 調	焼 成	胎 土	備 考	図 版	写 真
			口 径	底 径	器 高						
1	鉢	C I 20住居址	17.5	5.7	7.8	にぶい橙色	堅 緻	粗砂を含む	小穴あり 赤色塗料付着	第21図	第57図
2	深鉢	C J 20住居址	16.9	10.8	21.2	橙 色	堅 緻	砂を含む		第23図	第57図
3	壺	〃	9.8	9.8	23.8	橙 色	堅 緻	砂を多く含む		第24図	第57図
4	鉢	〃	9.0	5.3	9.0	明赤褐色	やゝ堅緻	石英の細粒を含む	外面に煤付着	第25図1	第57図
5	深鉢	〃	16~21	7.5~8.8	21.5	にぶい橙色	やゝ堅緻	砂を含む	補修孔あり、内外面煤付着	第25図2	第57図
6	壺	〃	不 明	11.5	不 明	橙 色	堅 緻	少量の砂を含む	上半部なし	第26図	第57図
7	壺	C J 20—2住居址	不 明	5.0	不 明	明赤褐色	堅 緻	粗砂を含む	口縁部なし	第33図	第57図

石器一覽表

No.	器 種	出 土 地	大 き さ (cm)			重 量	石 質	備 考	図 版	写 真
			長 さ	巾	厚 さ					
1	石皿	G 20住居址	40	38	8.5	21.5kg	花 崗 岩	両面に使用痕あり	第17図2	第 56 図
2	磨石	〃	10.5	8.0	9.2	1.125g	花 崗 岩	1ヶ所に凹みあり	第17図1	第 56 図
3	敲石	C J 20住居址	14.5	5.5	4.2	520g	花 崗 閃 緑 岩	敲打痕あり	第22図1	第 58 図
4	敲石	〃	9.0	8.0	5.5	512g	安 山 岩	敲打痕あり	第22図2	第 58 図
5	石斧	B D 17区	(8.5)	4.1	3.0	150g	砂 岩	折損して上半部なし	第33図6	第 58 図
6	敲石	B I —20区	10.4	8.0	5.1	545g	安 山 岩	磨石としても使用?	第33図5	第 58 図

3類については形状や文様構成が1、2類と異なる土器であり、弥生時代の土器のような印象さえ受けるが、同じ住居址から出土している土器片は、沈線文を主とした文様で十腰内I式に類似する土器と見られることから、同時期の土器と考えられる。

4類の深鉢と5類aの鉢は、1、2類と同じC J 20住居址出土である。4類は斜縄文を主とし綾絡文を一部に加えたもので、5類aは小型の鉢で無文である。5類bの壺はC J 20—2住居址から出土した。無文であるが、伴出の土器片は十腰内I式に類似する土器であり、後期前葉に所属するものであろう。

本遺跡出土の土器についてまとめれば、文様構成に地域的な個性がみられるが、縄文時代後期前葉に属するもので、型式では十腰内I式に類似する土器と考える。

- 参考文献 野口義麿編「縄文土器大系」講談社 1981
加藤晋平編「縄文文化の研究、縄文土器Ⅱ」雄山閣 1981
今井富士雄 磯崎正彦「十腰内」十腰内遺跡調査会 1969

(5) ま と め

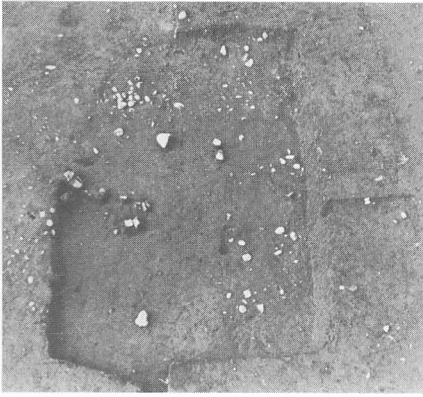
上野山遺跡の調査では段丘上から古代の住居址 4 棟、沢寄りの斜面から縄文時代の住居址 4 棟が検出されている。その他にピット 5 基と焼土 4 が検出され、調査されている。

古代の住居址は 7 世紀末から 8 世紀にかけて営まれた遺構で、2 ないしは 3 時期に細分される。出土遺物の中には須恵器の蓋を模倣したような坏や靱の圧痕のついた遺物、琥珀の半加工品等がある。琥珀製遺物の出土は畿内の古墳出土の琥珀製遺物との関連から、7 世紀以前に久慈地方と畿内とを結ぶ交通路がすでに確立されていた可能性があり、いわば琥珀の道を通じて文化の交流があったことを示唆している。

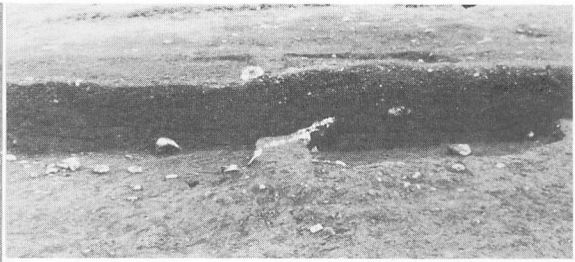
縄文時代の住居址は 4 棟ともほぼ同時期の後期前葉に位置づけられている。土器の文様は東北地方北半の縄文時代後期の指標とも言える十腰内様式の土器に類似しているが器形や文様の施文がやや異なり、地方色が濃かったことが窺われる。

集落の状況や遺構の時期的なことについては、今後隣接する周辺の遺跡の調査が行なわれれば、さらに明かになると思われる。また琥珀の流通は単に原石が輸出されただけでなく、地元で加工された可能性も十分に考えられるので、今後の調査の際に琥珀加工の工房址が検出される可能性もある。

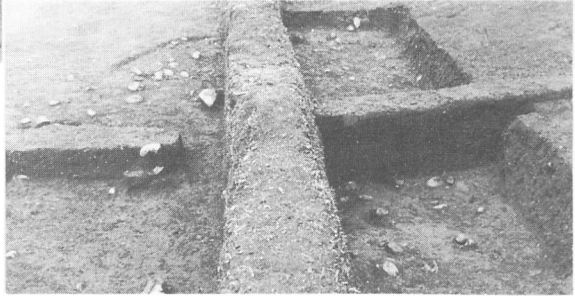
写 真 图 版



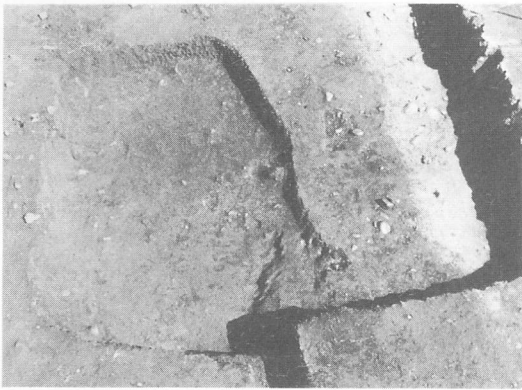
全景 (南→北)



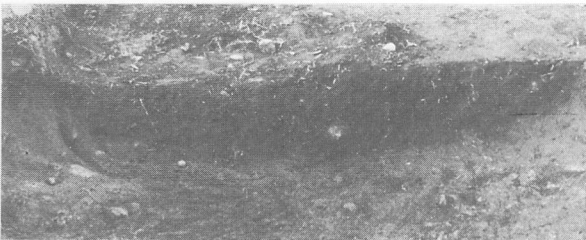
埋土断面 (西→東)



埋土断面 (南→北)



ピット全景
(南→北)

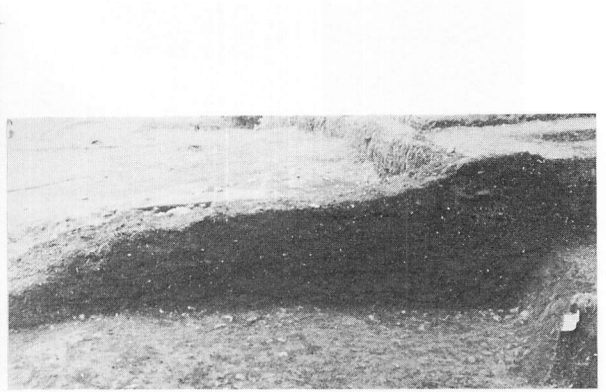


ピット埋土断面
(南→北)

第39図遺構写真 (BH18住居址)



全景(南→北)



埋土断面(南→北)



遺物出土状況(南→北)



カマド全景(南→北)

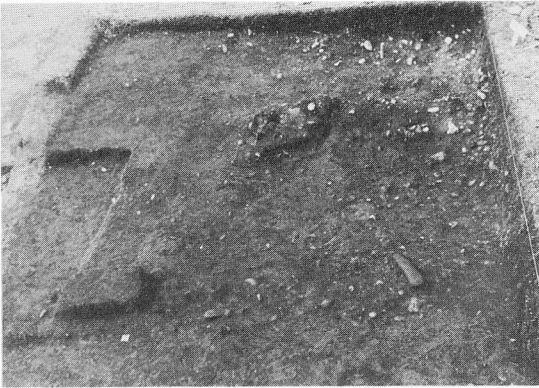


カマドの石組(南→北)

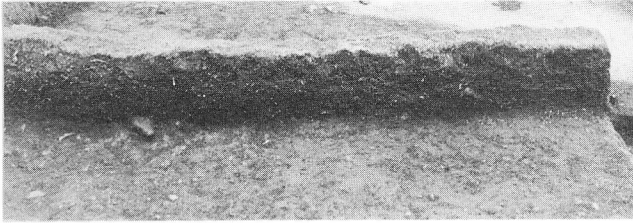


カマドの石組(南→北)

第40図遺構写真 (B J 20住居址)



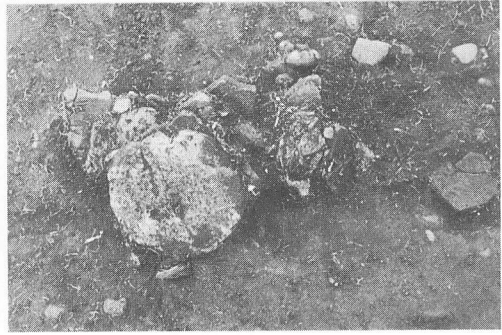
全景
(南→北)



埋土断面
(北→南)



遺物出土状況(西→東)

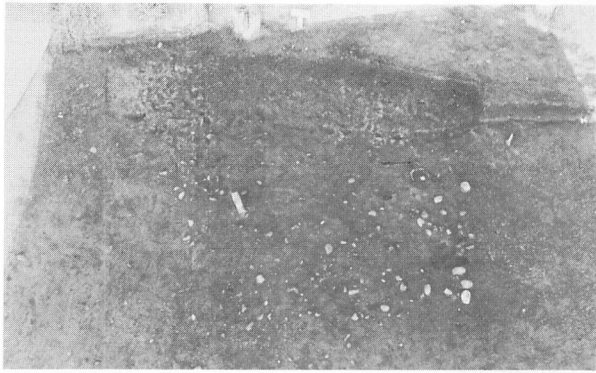


カマド? (南→北)

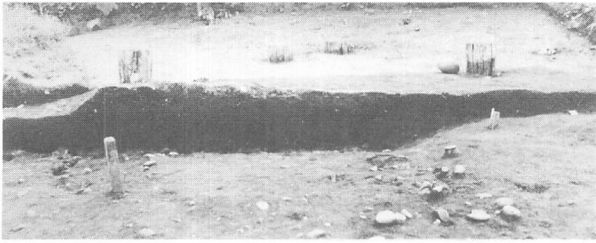


(西→東) 遺物出土状況 (西→東)

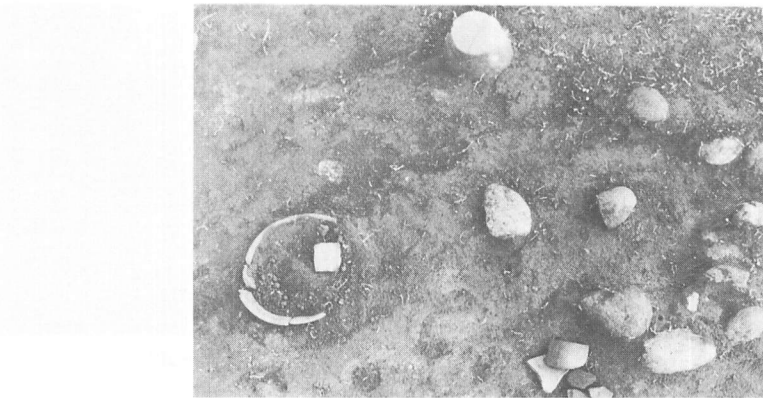
第41図遺構写真 (B J 21住居址)



全景
(西→東)



埋土断面
(西→東)



(西→東)

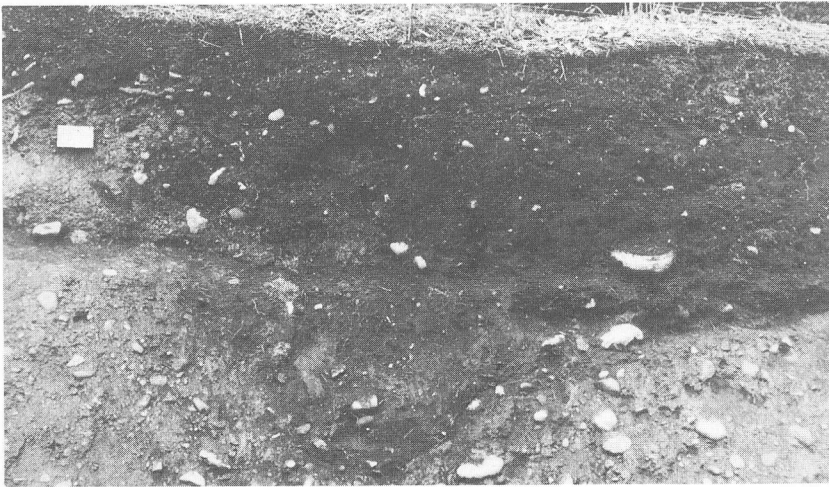


(西→東) 遺物出土状況 (西→東)

第42図遺構写真 (CE19住居址)



全景(西→東)

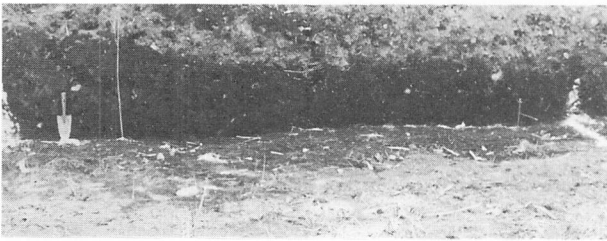


埋土断面(西→東)

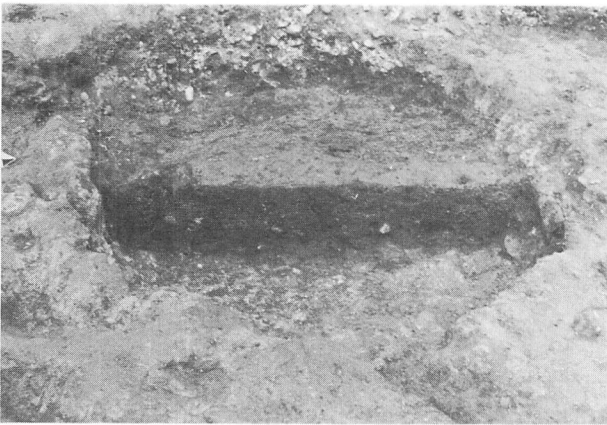
第43図遺構写真 (CG20住居址)



全 景
(西→東)



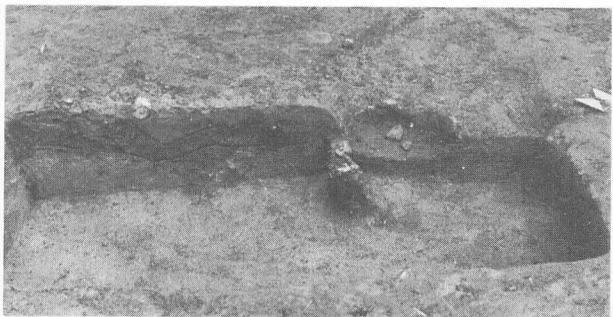
埋土断面
(西→東)



ピット断面
(西→東)

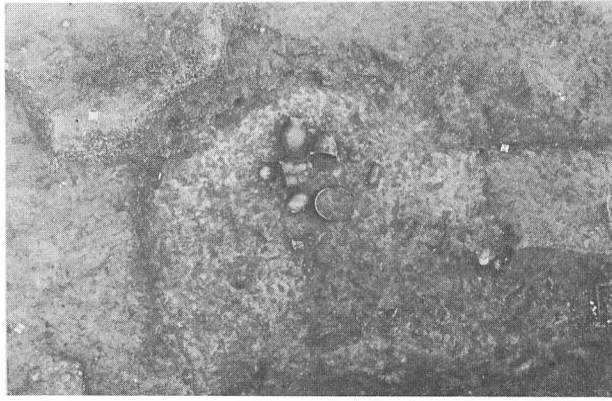


炉全景(西→東)

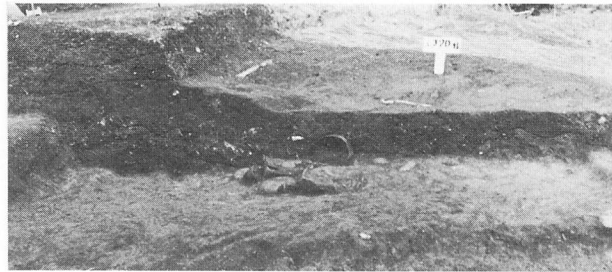


炉断面(西→東)

第44図遺構写真 (C I 20住居址)



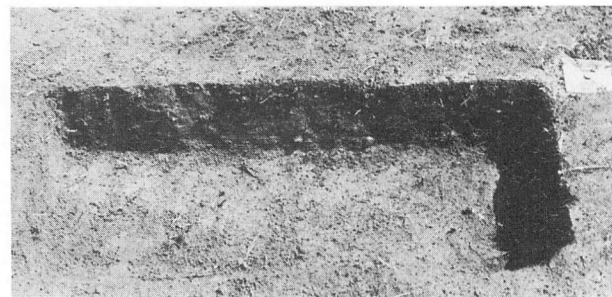
全景
(西→東)



埋土断面
(西→東)



遺物出土状況
(西→東)

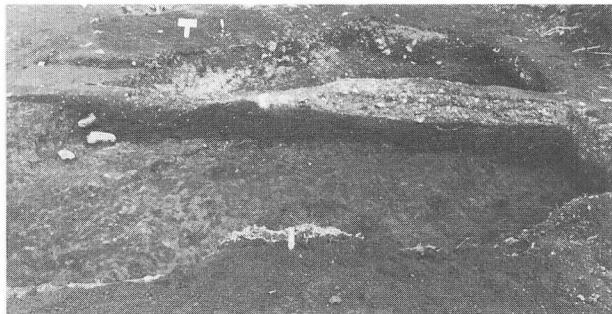


炉断面
(西→東)

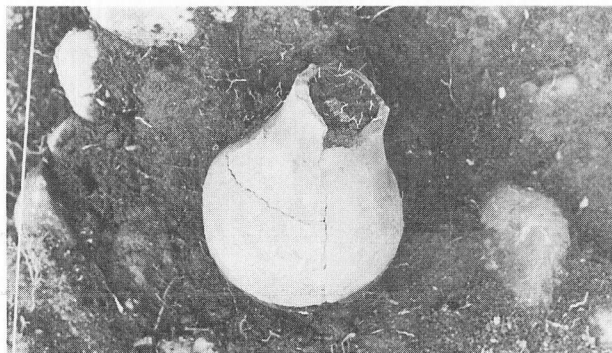
第45図遺構写真 (CJ20住居址)



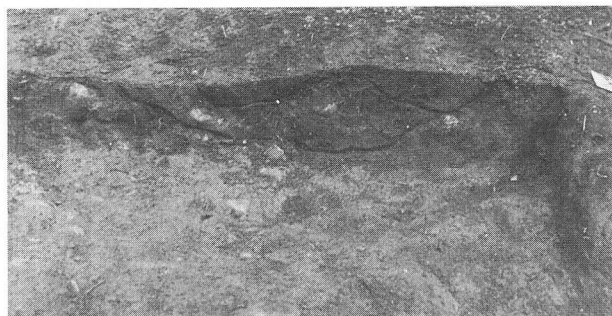
全景
(西→東)



埋土断面
(西→東)

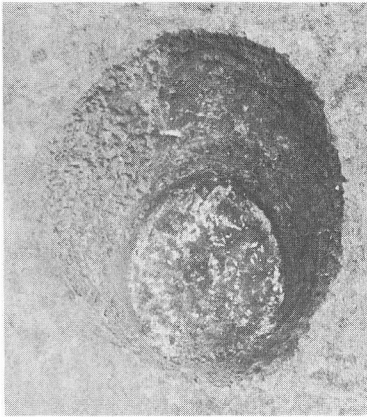


遺物出土状況
(西→東)

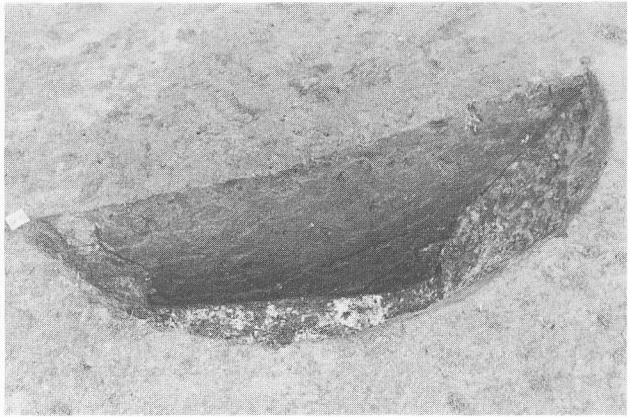


炉断面
(西→東)

第46図遺構写真 (C J 20-2住居址)

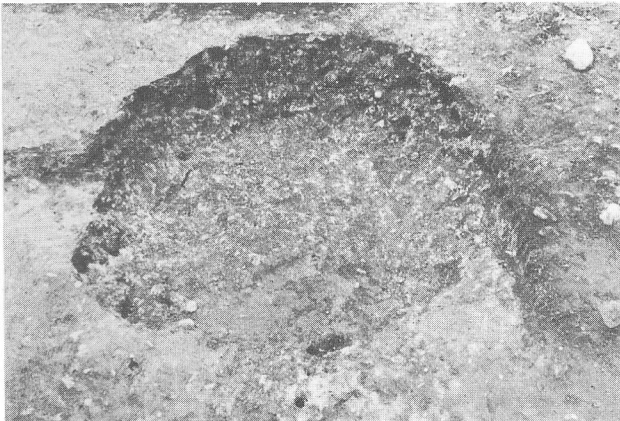


全景(北→南)



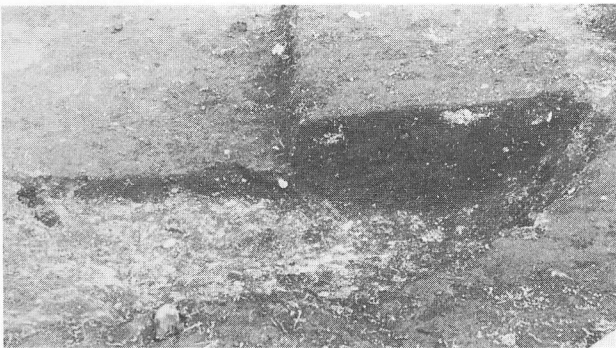
埋土断面(西→東)

BE20ピット



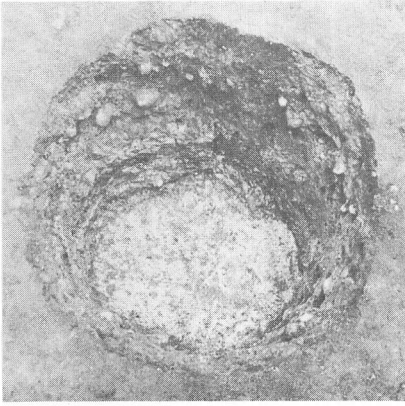
全景(北→南)

BF19ピット



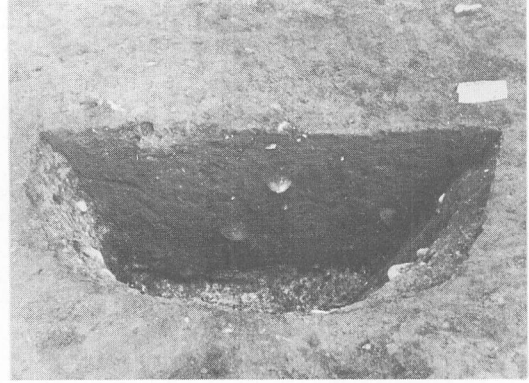
埋土断面(西→東)

第47図遺構写真 (BE20ピット, BF19ピット)

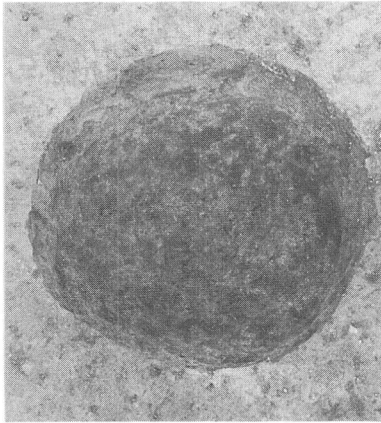


全景(南→北)

CB19ピット

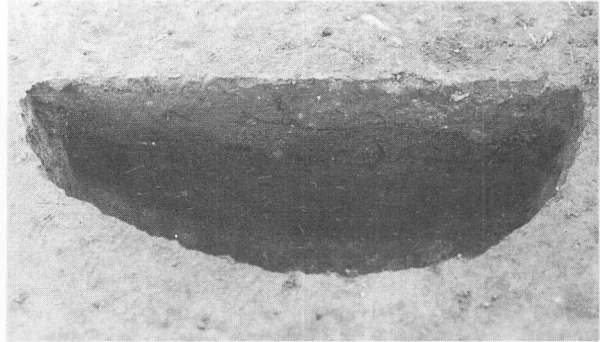


埋土断面(南→北)

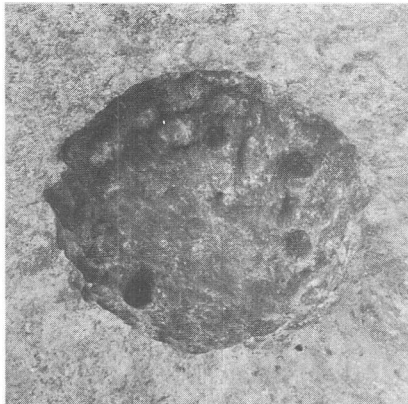


全景(南→北)

CC18ピット

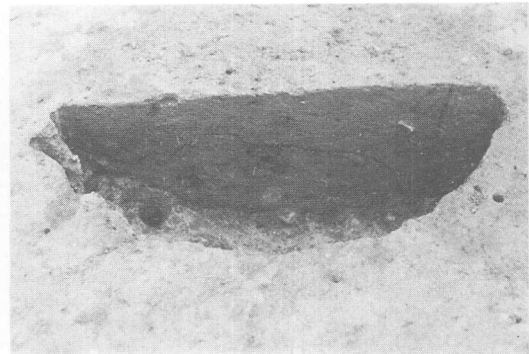


埋土断面(南→北)



全景(南→北)

CD18ピット



埋土断面(南→北)

第48図遺構写真 (CB19ピット,CC18ピット,CD18ピット)



BF 19 焼土遺構

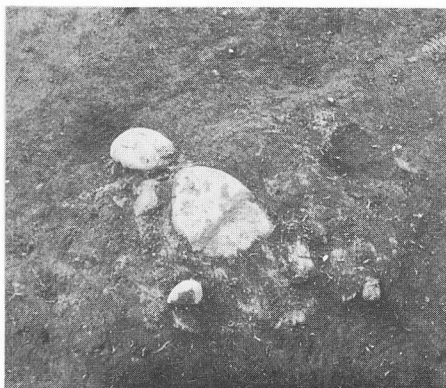
全景(西→東)



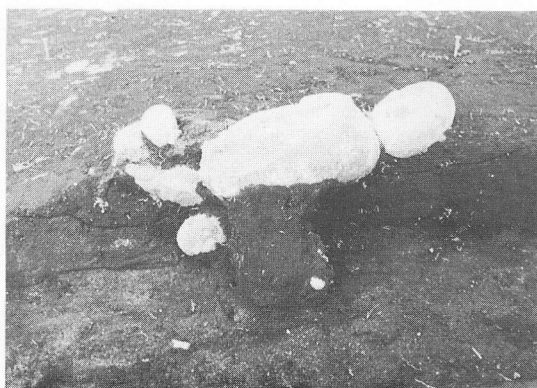
埋土断面(南→北)



焼土断面(西→東)



全景(北→南)



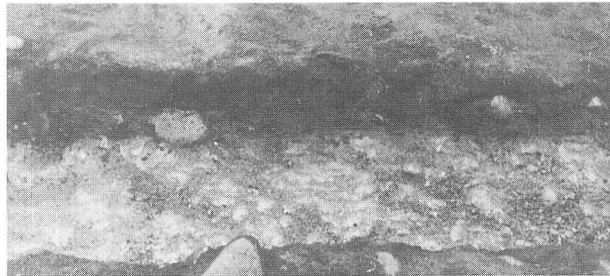
BF 21 焼土遺構

断面(西→東)

第49図遺構写真 (BF 19 焼土遺構, BF 21 焼土遺構)



全 景
(西→東)
C B17焼土遺構



断 面
(北東→南西)

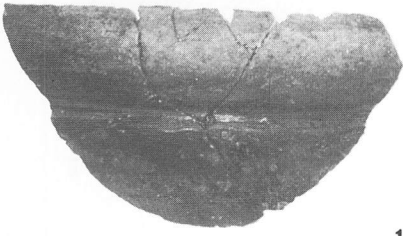


全 景
(西→東)
D A21焼土遺構

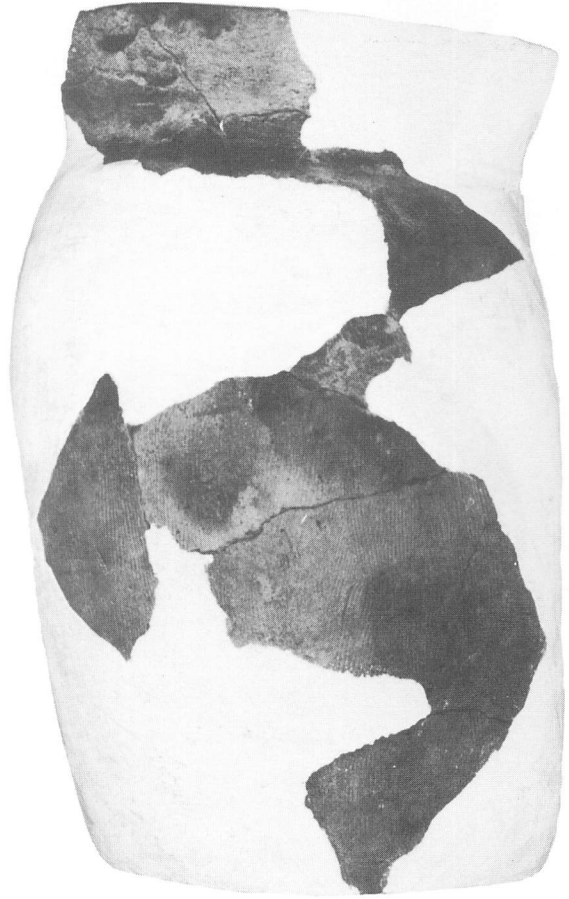


断 面
(南→北)

第50図遺構写真 (C B17焼土遺構, D A21焼土遺構)



1



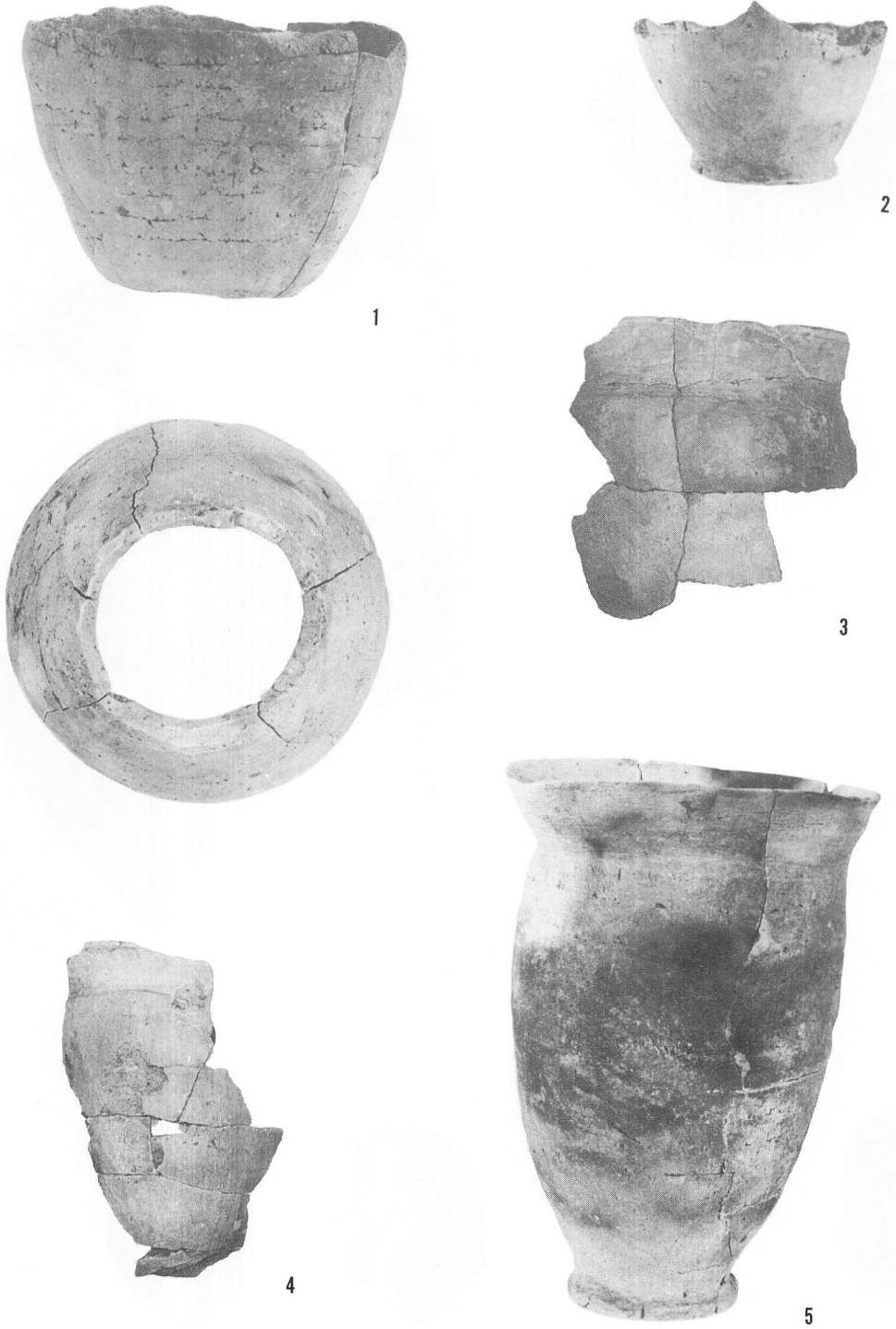
2



3

琥珀製遺物

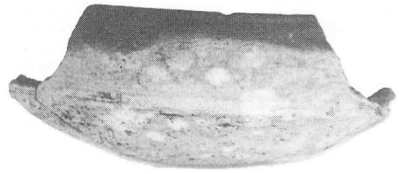
第51図遺物写真 (BH18住居址)



第52図遺物写真 (BJ20住居址)



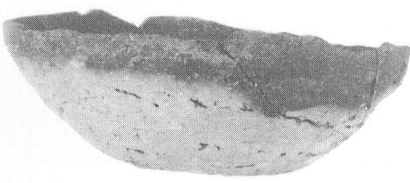
1



2



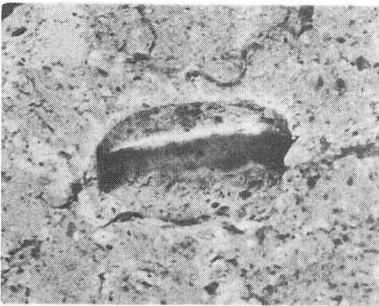
3



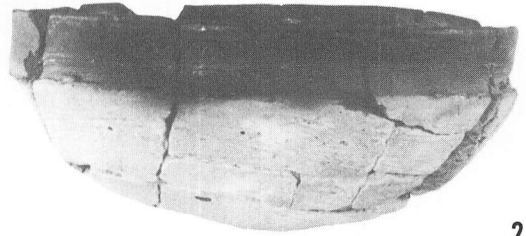
第53図遺物写真 (B J 20住居址)



1



粗
庄
痕



2

第54图遺物写真 (B J 21住居址)

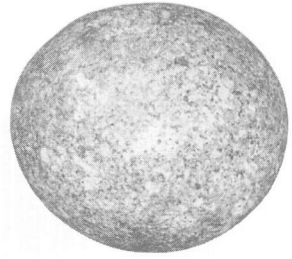


1



2

第55図遺物写真 (CE19住居址)



1

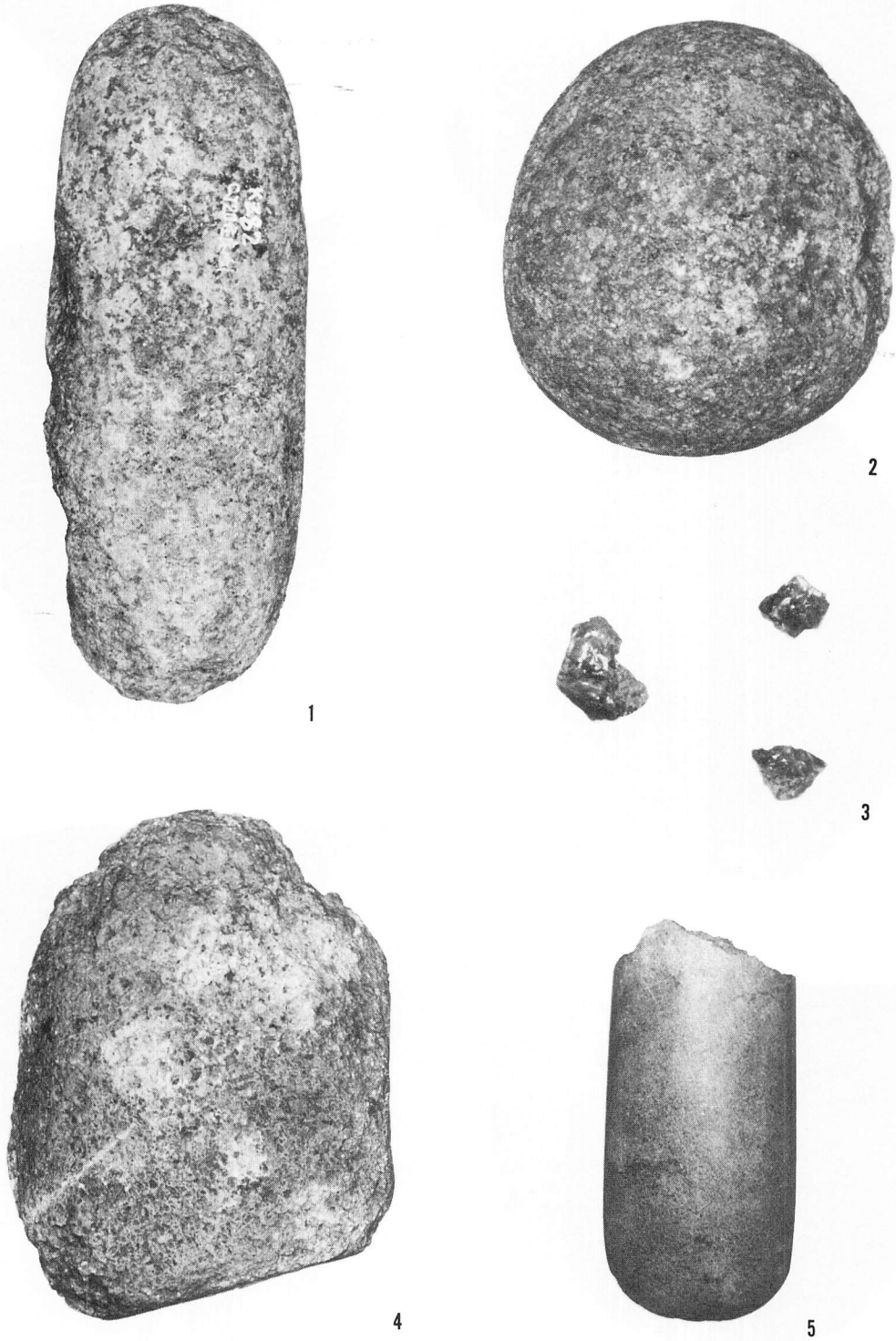


2

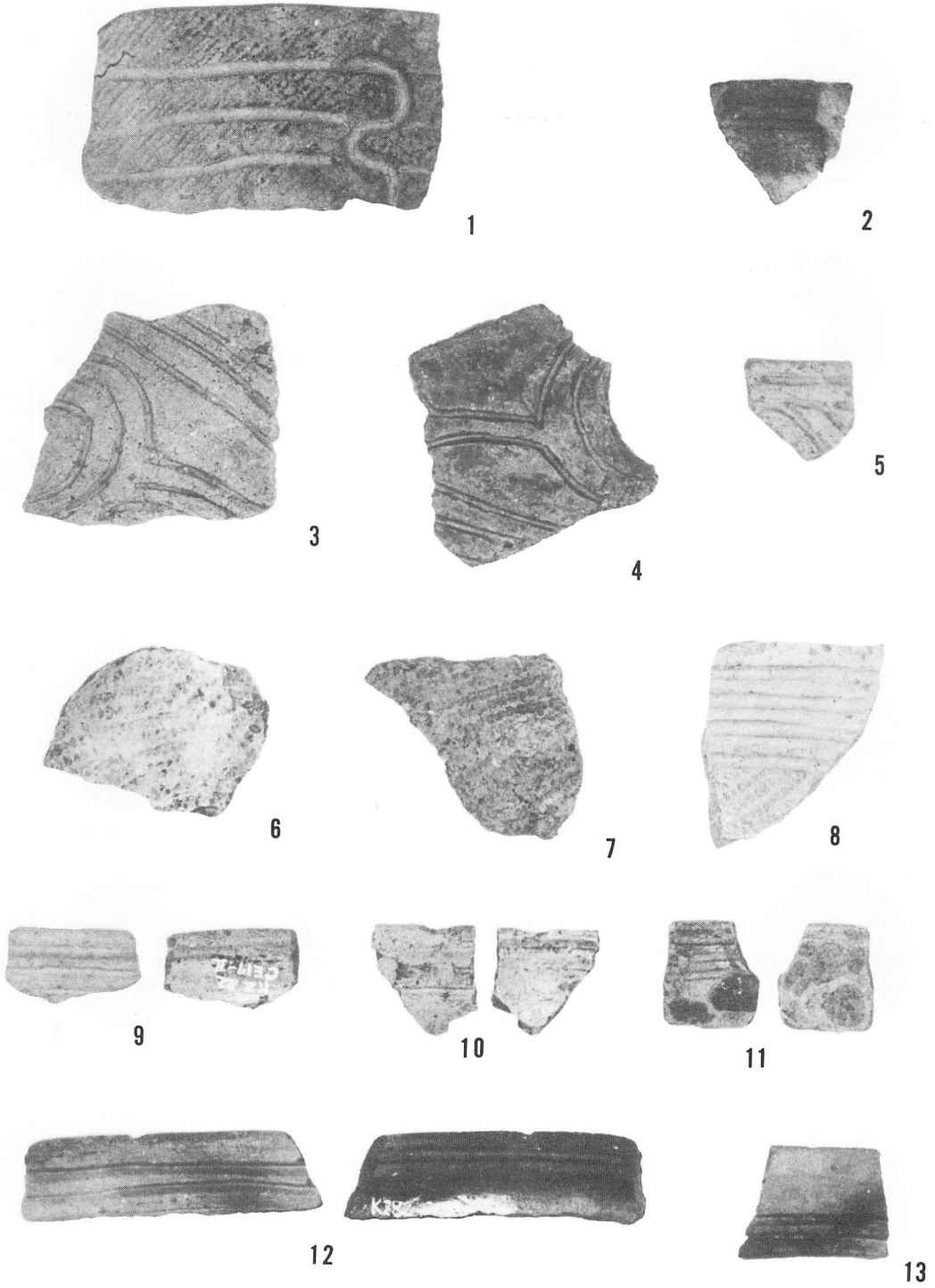
第56図遺物写真 (CG 20住居址)



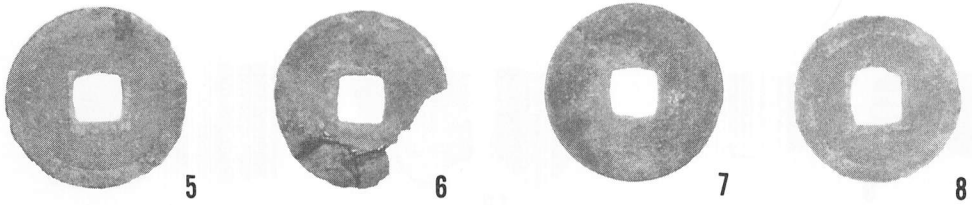
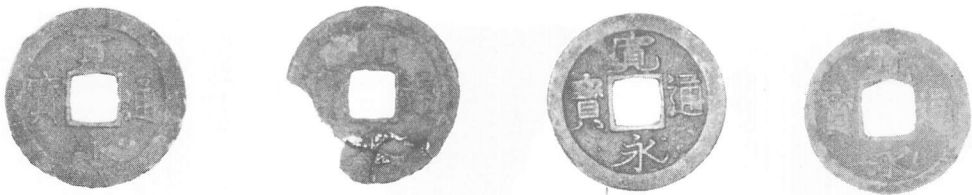
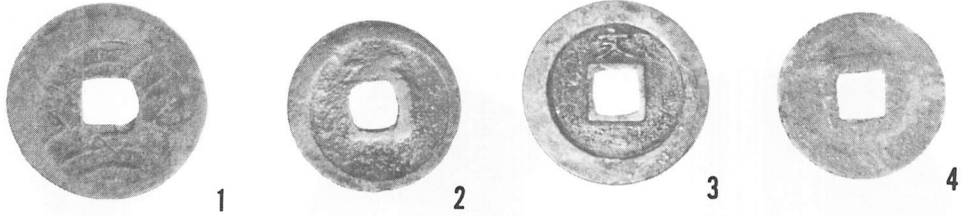
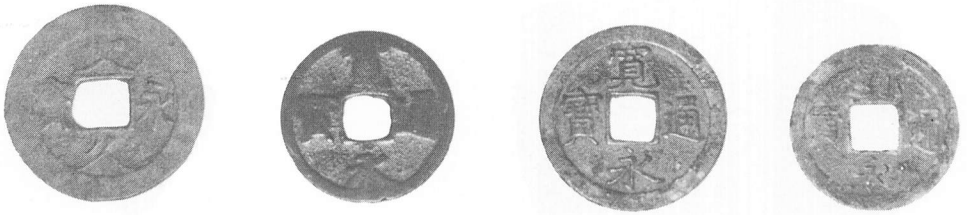
第57図遺物写真 (1.4~7 C J 20住居址, 2. C J 20-2住居址, 3. C J 20住居址)



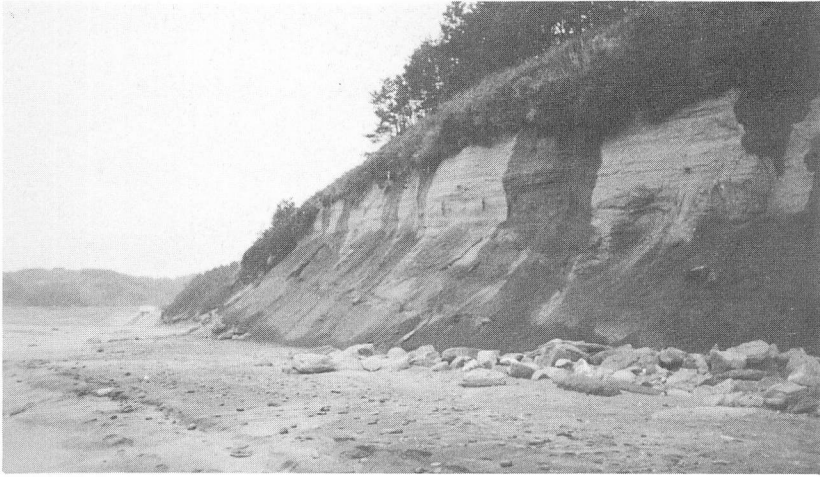
第58図遺物写真 (1. 2 C J 20住居址, 3 C I 20住居址・琥珀片,
4. 5 遺構外)



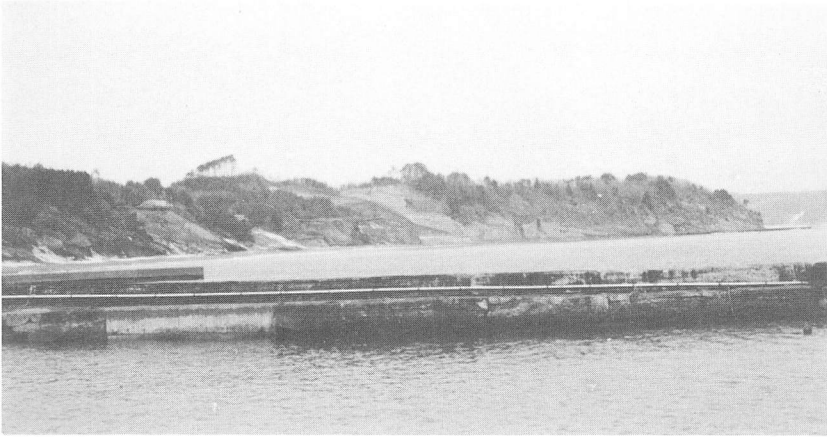
第59図遺構外出土遺物



第60図遺構外出土遺物



種市層群
(小子内砂岩部層)



久慈層群
(中央から左が
玉川層、右が
国丹層)



野田村米田
の坑道跡

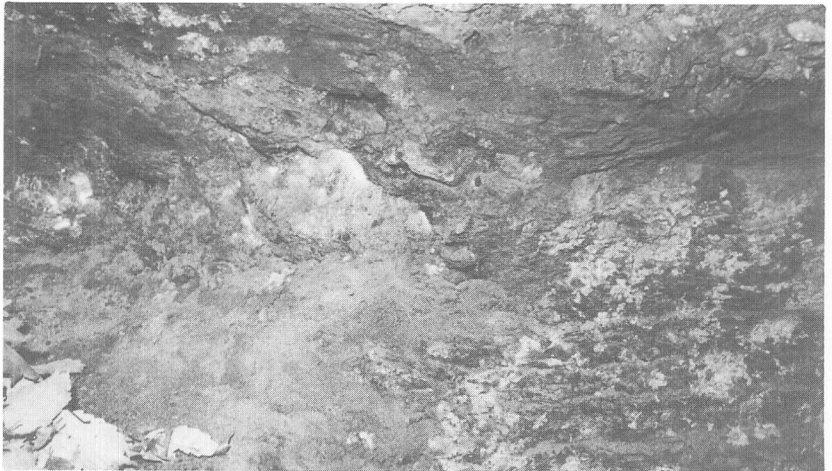
第61図琥珀産出地



坑道入口

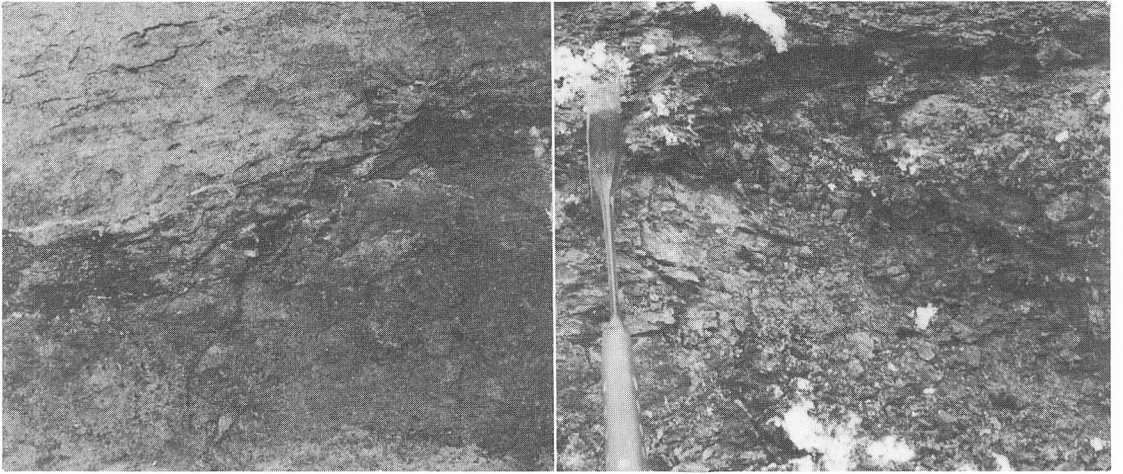


坑道内部



琥珀産出
状況

第62図琥珀坑道跡（久慈市大川目町碁石）



(久慈市夏井町宇津目) 産出状況 (久慈市小久慈町赤川)



ズリを捨てた跡(久慈市小久慈町赤川)



琥珀原石(久慈市宇部町長畑産)

第63図 琥珀産出状況

岩手県埋文センター文化財調査報告書第67集

上野山遺跡発掘調査報告書
国道45号線久慈バイパス関連遺跡発掘調査

昭和58年10月5日印刷

昭和58年10月15日発行

発行 (財) 岩手県埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡字高屋敷

TEL (0196) 38-9001~2

印刷 株式会社 富士屋印刷所

岩手県盛岡市下ノ橋町2番9号

TEL (0196) 23-6391
